ISSN 2187-6266

西南学院大学博物館研究紀要

第 5 号

―論　文―

フィレンツェ公国君主コジモ１世の書斎
―展示にみる政治的役割とその変遷― …… 内島美奈子　1

大学博物館の使命としての教育普及活動
―せいなんこどもワークショップ事例紹介と課題― …… 山尾　彩香　9

福岡市西区の草場古墳群採集の須恵器片 …… 秋田　雄也　33

―資料紹介―

天保九年 幕府巡見使の従者日記（一）
立野良道『西海道日記』一・二・三・四巻 …… 森　弘子　41(74)
宮崎　克則

2017年3月

西南学院大学

フィレンツェ公国君主コジモ１世の書斎
―展示にみる政治的役割とその変遷―

内島美奈子

はじめに

君主が書斎を建造する例は、14世紀から16世紀のイタリアで多くみられる。同地で領邦国家が形成されていくなか、君主は権力を中央集権化することに努め、その中枢機関として宮廷が必要とされた。そのなかで、君主の住居であり政治を行う場である宮殿が整備され、その一部として書斎が建設される。書斎はイタリアではストゥディオーロ（studiolo）もしくはスクリットイオ（scrittoio）と呼ばれ、静かに読書をする場でありながら、君主が自らが収集したコレクションなどを展示し、君主の徳を示し、さらには政治的なメッセージを発信する場となった。この点において現代の博物館の展示という機能がみてとれ、書斎が博物館の起源ともなったといわれている。

16世紀にコジモ１世が宮廷を形成した拠点であるフィレンツェのパラッツォ・ヴェッキオにはいくつもの書斎が建造された。コジモ１世は、フィレンツェにおけるメディチ家の君主としての立場の強化、さらには自身がメディチ家の傍流の出身であるということから相続の正統性を主張するという目的のもと、巧みにプロパガンダ政策をおこなった人物である。その初期の政策として宮廷の整備に取り組み、それまで市民が政治を行う拠点であり、共和国の象徴であった市庁舎の改築を行い、自らの宮殿とし、君主の部屋とともに多数の書斎を設置した。その改築を手掛けたジョルジョ・ヴァザーリによる詳細な記録が残され、当時の書斎の様子を想像することができる。

本稿では、コジモ１世が宮廷を形成したパラッツォ・ヴェッキオにおける書斎建設の意図について、その装飾とそこで展開された展示からみていきたい。同パラッツオ全体の装飾に指摘されるコジモ１世の政治的メッセージが書斎についてもみられることを指摘する。そして、コジモ１世の約40年の治世のなかで、書斎の展示は政策を反映して変化していく。その変遷についてもみていきたい。

１．イタリア宮廷の書斎に関する先行研究

宮廷は君主を中心とした社会であり、ひとつの権力空間である[1]。宮廷の拠点である宮殿は、君主のさまざまな権力誇示の舞台となった。その要素のひとつである書斎はその役割を担っている。実際に君主たちは競って書斎を造り上げている。イタリアにおける有名な書斎の例としてマントヴァのイザベッラ・デステ、ウルビーノのフェデリーコ・ダ・モンテフェルトロ、メディチ家のフランチェスコ１世の書斎などがあり、個別の研究が数多く取り組まれている[2]。これらの書斎には著名な芸術家が装飾のための作品を制作しており、その作品単体においても研究は取り組まれている。君主の書斎は15世紀にはじまるルネサンス期の例が中心となっていたが、16世紀のマニエリスム期の君主が建造した書斎も含めた、書斎の歴史や分類に関する包括的な研究も発表されている[3]。

展示される君主のコレクションついても、コレクショニズム研究の隆盛から、現在、多くの研究が提出されている[4]。ポミアンによれば、西欧において14世紀後半から「過去の時代や地上の未知の領域や自然に対する新しい態度」が現れ、古代遺物や異国の珍しいものを所有することに価値が見いだされ、

競って収集がなされた[5]。君主たちにとっては、宮廷の名声を高めるようなコレクションを保有することが国の豊かさや権威の象徴ともなり、またその正統性を周囲に示す手段ともなる。さらには、メディチ家は文芸を保護し、蒐集家として知られていた[6]。コジモ１世はメディチ家の先代たちを手本としてコレクション収集に努めたが、それは個人的な趣味ではなく政治的な理由があったとされる。

本稿では、コジモ１世のコレクションや政策に関する研究を参照し、書斎の展示にみる政治的役割について確認する[7]。

2．パラッツォ・ヴェッキオの書斎の概要

コジモ１世は、パラッツォ・ヴェッキオに居を移し、共和国の政治の拠点であった場所を宮廷に造り替えるべく、大規模な改築をおこなった（図１）[8]。

その経過は大きく２つの時期にわけられる。1540～55年にジョヴァンニ・バッティスタ・デル・タッソーが担当した時期と、1555～72年にジョルジョ・ヴァザーリが担当した時期である。書斎はすべてヴァザーリによって手掛けられ、８つもの書斎を建築した（表１）[9]。それらはいくつかの区画の一部である場合と、書斎だけを単独で建造する場合がある。

（図１）パラッツォ・ヴェッキオ、フィレンツェ（筆者撮影）

宮殿には、いくつもの部屋からなるまとまった区画があり、そのなかにはアッパルタメント（appartamento）がいくつも存在する。アッパルタメントとはまとまった一連

	書斎名	制作年	場所	担当
①	カリオペの書斎 (Scrittoio di Calliope)	1555～6	３階「四大元素の区画」	ヴァザーリ
②	ミネルヴァの書斎 (Scrittoio di Minerva)	1557～62	３階「四大元素の区画」	ヴァザーリ
③	ジョヴァンニ・ダッレ・バンデ・ネーレの間の書斎 (Scrittoio di Giovanni dalle Bande Nere)	1558～61	２階「レオ10世の区画」	ヴァザーリ
④	公爵の書斎 (Scrittoio del Duca)	1559～61	２階「コジモ１世の区画」	ヴァザーリ
⑤	公爵の書斎 (Scrittoio del Duca)（Tesoretto）	1559～62	２階「コジモ１世の区画」	ヴァザーリ
⑥	エレオノーラ公妃の書斎 (Scrittoio di Eleonora)	1561～62	３階「エレオノーラの区画」	ヴァザーリ
⑦	テラスの書斎 (Scrittoio del Terrazzo)	1562?5～6/1581～2	３階	ヴァザーリ/ アンマナーティ
⑧	フランチェスコ１世の書斎 (Studiolo di Francesco I)	1570～5	２階	ヴァザーリ

表１

の続き部屋のことであり、君主やその妃のものがそれぞれ作られる場合が多い。同パラッツォにもコジモ１世の２つの区画と妃エレオノーラの区画が作られ、それぞれに謁見の間、寝室、書斎などが配置されている。エレオノーラの区画には礼拝堂もある。その配置は、部屋の役割によって決められており、公的なスペースは入口の近くに、私的なスペースほど奥に据えられる傾向にある。書斎は区画のもっとも奥に造られることが多く、読書という私的な活動の場として本来は極めて私的な性格をもつ空間であった[10]。しかし、君主の書斎は、書斎本来の私的な性格を有しつつも、公私両方のスペースとして使用される両義的な性格をもっている。君主のコレクションを保管し、君主のみが自由にコレクションを眺める秘匿のスペースとして機能する一方で、自慢のコレクションを賓客に見せ、財力や権威を誇示する場でもあったのである。コジモ１世がパラッツォを改築していくなかで設置したいくつもの書斎は、その配置によって異なる用途があった。

パラッツォ・ヴェッキオには、コジモ１世の２つの区画があり、３階に「四大元素の区画（Quartiere di Elementi）」が、２階に「レオ10世の区画（Quartiere di LeoX）」が同時並行で建設された。上下に位置する２つの区画の装飾には、対応する形でコジモ１世の政治的メッセージが発信されている。レオ10世の区画は、メディチ家の発展の基礎を築いたひとびとである、コジモ・イル・ヴェッキオ、ロレンツォ・イル・マニフィコ、コジモの父であるジョヴァンニ、レオ10世、クレメンス７世とコジモ１世のそれぞれに部屋がわりあてられ、各自を称揚するエピソードで彩られている。四大元素の区画は神話の神々を各部屋のテーマとし、下階のメディチ家の部屋と関連づけられた。コジモ・イル・ヴェッキオは豊穣神ケレスと、コジモ１世は最高神ユピテルと、ジョヴァンニは英雄ヘラクレスと結びつけられている。この２つの区画の装飾において発信されているコジモ１世のメッセージとは、メディチ家の歴史のなかに自らを位置づけることによるメディチ家当主を相続する正統性のアピールと、メディチ家のひとびとやコジモ１世の称揚、神格化であるといえる。

次に書斎についてみていこう。レオ10世の区画の書斎③は、コジモ１世の父「ジョヴァンニ・ダッレ・バンデ・ネーレの間」に付随するものとして配置された。天井画はユリウス・カエサルが机に座り、『コンメンターリ』の執筆に没頭している様子である。この主題の選択には、勇猛な軍人であった父を軍服

（図２）ジョルジョ・ヴァザーリ《カリオペ》天井画

姿のカエサルと関連づける意図もあったとされる。もうひとつの区画には、①カリオペの書斎と②ミネルヴァの書斎という２つの書斎が配置された。それぞれが、区画の奥に配置されており、その立地は、孤独な時間を過ごす私的な空間としての書斎の本来の機能を保持していることがわかる。カリオペの書斎は、コジモ１世のコレクションを展示する場として活用されていた。装飾については詩歌などの諸芸術を保護するムーサのひとりであるカリオペとミネルヴァがそれぞれテーマとして選ばれており、知的な活動を行う場に最適だと考えられるものである（図２）[11]。ヴァザーリによれば、カリオペの書斎では、９人のムーサのうち、部屋の名となっているカリオペのみ人物像で表され、残りの８人は楽器などの象徴物となっている[12]。ムーサを描いた他の例として、マントヴァのゴンザーガ宮廷のイザベッラ・デステは、書斎に飾るためアンドレア・マンテーニャに《パルナッソス》を描かせ、踊る９人のムーサが表された。また、紀元前にアレクサンドリアに建造された学術研究の拠点は「ムーサの館」（ムーサイオン）と呼ばれてミュージアムの語源となっており、書斎の装飾の主題と空間の機能は現在の博物館と結びついている。

さらに２階に整備されたもうひとつのコジモ１世の区画にも、書斎⑤が建造された。この空間は、「宝物庫（Tesoretto）」とも呼ばれる。正方形の小さな空間ではあるが、大きな収納扉が四方にある。パラッツォのもっとも公的な空間である五百人広間のすぐそばにあり、貴重なものを保存するほか、文書を保管する場所でもあったという。コジモ１世が公的な業務を処理する場であったとも推測される。そして、区画とは別に建設された⑦テラスの書斎がある。２つのテラスに囲まれた空間であり、そのひとつがコレクションを保管するグアルダローバ（衣裳部屋）であった現在の「地図の間」と廊下でつながっていた。コジモ１世が選んだコレクションをグアルダローバから運ばせ、調べたり、眺めたりする場としてグアルダローバの補完的な機能を有していたと推測されている。

コジモ１世が造らせた書斎にはそれぞれ異なる用途があると推測されるが、ここでは展示室としておもに活用された①カリオペの書斎に注目してみていきたい。

３．コジモ１世のコレクションの展示 －カリオペの書斎

カリオペの書斎は、同パラッツオの改築で設置された書斎のなかで最初に造られた。四大元素の区画のなかでは、君主の寝室であったとされる「ケレスの間」の一角にあり、区画の一番奥に位置している。小さな空間ではあるが２つの入口があり、そのうちのひとつは「秘密の」階段に接続し、下の階にたどり着く。この階段を使用すれば君主は区画の一連の部屋を通ることなく、書斎にアクセスすることができ、君主の私的なスペースであることをうかがわせる。書斎の装飾は天井画のほか、窓にグロテスク文様で彩られた《ヴィーナスと三美神》が表わされている。そのほか、コジモ１世の星座や紋章も描かれ、書斎の装飾は文芸を庇護する君主の徳を表すものであった。

カリオペの書斎には、コジモ１世のコレクションが展示されていたことは、改築を手掛けたヴァザーリが書き残している。パラッツォ・ヴェッキオの解説書ともされる『ラジョナメント[13]』や、『列伝[14]』（第２版）のなかで、ドナッテロ、アニョーロ・ブロンツィーノ、ジュリオ・クローヴィオの伝記において書斎のコレクションについて触れられている。ブロンツィーノは書斎に飾るメディチ家のひとびとの肖像画を制作したという。そのほかの記述から、メディ家のひとびとの肖像画、大理石の古代彫像、ブロンズ像、小さい現代の絵画、小さな珍しいもの、金・銀・銅のメダルなどが展示されていたとされる。さらに、古代ローマ以前にトスカーナ地域に居住していたエトルリアの彫像などもあった。コジモ１世が収集した遺物は、1541年にアレッツォで発見されていたエトルリア彫刻とされるミネルヴァ像を1552年に取得、その翌年にキメラ像（図３）を得ている[15]。

ヴァザーリやベンヴェヌート・チェッリーニは、キメラについて紹介しており、当時、キメラ像が話題となっていたことがうかがえる。これらの収集品は、パラッツォ・ヴェッキオに安置されている。書斎は狭い空間であるため小型のものが展示品として選択される傾向にあり、キメラ像は同書斎に展示されることはなかった。しかし、ヴァザーリが同書斎の解説のなかでキメラ像について触れており、その重要性は強調されている。さらには、未開の地の珍しいものも展示され、同時代に流行した、世界のあらゆるものを収集していた他の君主の例もある。これらの展示されているものから、コジモ１世の２つの政治的意図が指摘されている。

ひとつは、メディチ家の家督を相続する正統性のアピールである。コジモ１世は傍流の出身であったため、今までメディチ家の当主としてフィレンツェに大きな影響力をもっていた主流の家系との連続性を主張する必要があった。それは、メディチ家の繁栄を築いたジョヴァンニ・ディ・ビッチからコジモ１世の息子たちまでのメディチ家のひとびとの肖像画を並べることで示された。また、1494年にメディチ家が２度目の追放にあった際に散逸したロレンツォのコレクションを再度手に入れて展示したという。メディチ家の歴代の当主たちは有名なコレクターであり、散逸したコレクションを再度収集することは、主流の家系とのつながりを強調することによる、地位の正当化という意図も見てとれる。

（図３）キメラ、国立考古博物館、フィレンツェ

もうひとつは、フィレンツェとエトルリアとの関連性の主張である。書斎では古代遺物、とくに小さな彫像を展示し、さらにトスカーナの14～15世紀の彫刻家の作品を並べていたという。それはエトルリア彫像から当時の現代の彫像までのつながりを述べることで、フィレンツェはローマ起源よりもさらに古い伝統があることを主張した。リーヴェンウェインによれば、トスカーナ彫刻の優位性の主張でもあるという。また、コジモ１世はこれからトスカーナ全域を支配する領域国家を形成するために、エトルリア神話を採用したと指摘されている。エトルリアというトスカーナ共通の起源を強調することで、フィレンツェ周辺の国家を併合してトスカーナを統一する正当性をアピールしたのである。これは、1565年に完成した五百人広間の天井においても強調される。コジモ１世が描かれた天上画を中心に、支配したトスカーナの領邦の国々が描かれ、エトルリアの王と自らを銘文で表記している。コジモ１世が固執したテーマであることがヴァザーリとのやりとりからも明らかとなっている。

北田によれば、フィレンツェの創建を古代ローマとしていた長い歴史に反して、コジモ１世はエトルリア創建の方を強調したとされる[16]。フィレンツェの都市、さらには宮廷を古い起源と結びつけるようなコレクションを保有することで、他の宮廷との競争に打ち勝つ目的もあったと推測される。とりわけ、コジモ１世の治世の前半期において、領土拡大は最大の関心事項であった。コジモ１世は領邦国家の形成を目指しており、エトルリアという同一の起源をもつ国々を支配することは、歴史的に正当であることをアピールする意図があったとされる。

したがって、カリオペの書斎の展示には、コジモ１世の治世前半の政策である相続の正統性と、領邦国家の支配という点が反映されていると推測される。

４．書斎の解体

コジモ１世のコレクションの展示空間として、書斎以外にも重要な場所が1563年から1565年の間に構

想された。それは、新しいグアルダローバである。衣裳部屋と訳されるグアルダローバは、博物館でいう収蔵庫のような役割を担う場であり、コレクションが増えるにつれスペースが手狭になり、君主の重要なものを収納するために改築された。古いグアルダローバには「秘密のグアルダローバ」があり、コジモ１世の特別なコレクションが保管されていた。そこには14個の箪笥があり、12番目の箪笥の中身の多くが、先に述べたカリオペの書斎に1559～60年に移されている。衣裳部屋でありながら、特別なコレクションを見せるためにしばしば賓客を案内することもあったとされる。そこで、新しいグアルダローバは収納を兼ね備えた展示室として考案される。フィオラーニによれば新しいグアルダローバにおいても、書斎と同様に展示空間として構想され、コジモ１世の政治的アピールがなされていることを指摘する[17]。その改築工事はコジモ１世と改築を担当したヴァザーリが亡くなる1574年時点にも終わることはなく、残された装飾の図案がすべて実現されたかは不明である。

（図４）フランチェスコ１世の書斎

新しいグアルダローバは、現在は「地図の間」として知られる。部屋に巡らされた収納するための箪笥の扉には装飾パネルがはめ込まれている。それは世界のさまざまな地域の地図が取り付けられていて、ひとつの世界が形作られている[18]。その地図の装飾は、収納するものがその地域と関連するものであり、一種のラベルとしても機能した。その他、1563～68年に地球儀が設置され、箪笥の上には237の有名人の肖像画が少なくとも1570年から飾られていた。この空間はこの天井の空をイメージした装飾 、地図の装飾という構成からもわかるとおり、宇宙がイメージされていた。これはコジモ（cosimo）＝宇宙（cosmo）を連想させ、コジモが世界を統べるという君主称揚の意味合いをもっている。

この構造は同時期に同パラッツオ建造された、コジモ１世の息子フランチェスコ１世の書斎に引き継がれた（図４）。コレクションを並べる展示室であった書斎は、フランチェスコ１世の書斎では収蔵する場としての性格が強い。その装飾は、宇宙創造が表現されている[19]。フランチェスコ１世の書斎は、イタリア宮廷の最後の書斎と言われているが、そこにはカリオペの書斎のような君主の徳を示すことや、政治的メッセージを発する場としての役割はあまりないといえる。その立地をみると、五百人広間というパラッツォのなかで最も公的な空間のすぐ近くに建造されており、精神活動を営む場として奥に設置されるべき伝統的な書斎の位置としては異例である。完成後、フランチェスコ１世の書斎はすぐに解体され、第二の宮殿であるパラッツォ・ピッティやパラッツォ・ウフィツィに移された。そこでは書斎ではなく展示室が造られ展示される。トスカーナ大公の君主となり、領邦国家を統治する立場となったメディチ家当主には、書斎という狭い空間で、君主の徳やメッセージを発信する場はそぐわなくなったといえよう。

おわりに

コジモ１世の書斎には、現代の博物館の展示で言

えば、学芸員＝ヴァザーリ、図録＝覚書、展示には明確なメッセージがあった。しかし、書斎という性格上、限られた空間であり、展示には所有者である君主個人の意図が強く反映された。他方で、息子フランチェスコ１世は､伝統的な君主の書斎ではなく、新たな展示空間にコレクションを並べ公開する。君主という個人の徳を示し、政治的なメッセージを発信する場は、空間も内容も拡大していくことで、その役割を終えることになる。

1　宮廷と権力空間についての研究は以下を参照。Marcello Fantoni, George Gorse, Malcolm Smuts, *The Politics of Space : European Courts ca. 1500-1750*, Bluzoni Editore, 2009, Roma.

2　Stephen Campbell, *The Cabinet of Eros : Renaissance Mythological Painting and the Studiolo of Isabella d'Este*, 2004 : Luciano Berti, *Il principe dello studiolo. Francesco I dei Medici e la fine del Rinascimento fiorentino*,Firenze, (1967)2002 : A cura di Alessandro Marchi, *Lo Studiolo del Duca . Il ritorno degli Uomini Illustri alla Corte di Urbino*, 2015.

3　Wolfgang Liebenwein, *Studiolo storia e tipologia di uno spazio culturale*, a cura di Claudia Cieri Via, Ferrara, (1977)2005.

4　イタリアのコレクショニズムの歴史については以下を参照。Cristina De Benedictis, *Per la Storia del Collezionismo italiano : Fonti e Documenti*, 1991, Ponte Alle Grazie, Firenze.

5　クシシトフ・ポミアン『コレクション――趣味と好奇心の歴史人類学――』吉田城・吉田典子訳、平凡社、1992年、58-63頁。

6　メディチ家の人々が形成したコレクションについての研究は国内外で数多く発表されている。A cura di Cristina Acidini Luchinat, *Tesori dale Collezioni Medicee*, Firenze, 1997 :
松本典昭「ルネサンス期におけるメディチ家の宝物コレクション」『阪南論集　社会学編』第51巻、第３号、311－326頁、2016年：遠山公一・金山弘昌編『美術コレクションを読む』慶應義塾大学出版会、2012年: 和田咲子「16世紀トスカーナ大公の肖像画コレクション――展示空間の変遷とその意味について――」『千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』第60集、2003年、１-14頁。

7　コジモ１世の政策については主に以下を参照。Henk Th. Van Veen, *Cosimo I de' Medici and his Self-representation in Florentine Art Culture*, Cambridge University Press, 2006, New York : 北田葉子『近世フィレンツェの政治と文化――コジモ１世の文化政策(1537-60)』2003年、刀水書房。

8　パラッツォ・ヴェッキオについての研究は以下を参照。Nocolai Rubinstein, *The Palazzo Vecchio 1298-1532 : Government, Architecture, and Imagery in the Civic Palace the Florentine Republic*, Clarendon Press Oxford, 1995 : A cura di E. Allegri, A. Cecchi, *Palazzo Vecchio e i Medici : Guida Storica*, 1980, S.P.E.S, Firenze : Ugo Muccini, Alessandro Cecchi, *Le stanze del principe in Palazzo vecchio*, Le Lettere, 1991.

9　それぞれの書斎について、リーヴェンウェインとチェッキを参考に簡単にまとめた。
①のカリオペの書斎はヴァザーリが宮殿の中で初めて手掛けた書斎である。３階にあり、四大元素のアッパルタメントの一番奥に配置された小さな部屋である 。アッパルタメントの最初の部屋である元素の間を通り、次のオプスの部屋、ケレスの間を通って、その一番奥に位置する。小さな空間であるが、二つ目の入り口を持つ。その二つ目の入り口は「秘密の階段(la scalina a chiocciola」に繋がっていて、下の階にたどり着く。よって、元素の区画のいくつかの部屋を通ることなくこの書斎にたどり着くことも可能である。この立地は、書斎の本来の本を読むために、孤独の時間を過ごす私的な空間としての書斎の機能を保持していることがわかる。部屋の名は、カリオペはヴァザーリが描いた、天井面にムーサのひとりで「叙情詩」を保護する女神カリオペに由来する。
②のミネルヴァの書斎は、四大元素の区画に位置し、ヘラクレスの間からサトゥルヌスのテラスの間にある 。1690年の火災により被害を受けており、損傷を受けた天井画が残るのみである。天井画は部屋の名の由来になっている《ユピテルの頭から誕生するミネルヴァ》が描かれている。ジョヴァンニ・ストラダーノが手掛けた。
③のジョヴァンニ・ダッレ・バンデ・ネーレの間の書斎は、レオ10世の区画にある 。今日は、天井画のみが現存しており、コジモ１世の間からバンデ・ネーレの間への廊下の役割を果たしている。天井画はユリウス・カエサルが机に座り、『コンメンターリ』の執筆に没頭している様子である。
④は現存しない書斎である 。チェッキによれば、フランチェスコ１世の書斎が建造される前に存在した書斎であり、もしくはテゾレットの下に建造されていたものである可能性があるという。その存在は、ヴィンチェンツォ・ダンティが手掛けた棚の扉から明らかになる。その支払い記録があり、さらにはヴァザーリの『列伝』のダンティのところで触れている、金属製の扉の装飾が現存している。バルジェッロ博物館に所蔵されている。その主題は、アウグストゥス帝に巫女の偽書の焼却を認める場面であると提案されている。その場面を中心に、ミネルヴァやアポロ(もしくはディアナ)などの神々が彫られている。
⑤の書斎はコジモ１世の区画にあり、この小さな空間は、「宝物庫(Tesoretto)」とも呼ばれる 。位置は、宮殿からの秘密の脱出口につながる隠された階段が近くに配置され、フランチェスコ１世の書斎に接続し、寝室も隣接する。部屋の造りは正方形であり、立方体の空間である。他の書斎と同じようにコーニスがあり、壁面には大きな収納扉が配置されている。それぞれの壁面の中心となる収納扉には､破風状の飾りが付されている。天井は緩やかなアーチとなっており、中央に配された正方形の《四福音書家の象徴》の周囲に寓意画が配されている。中央の絵の上下左右には、《哲学》《天文学》《詩学》《幾何学》、四隅には《建築の寓意》《彫刻の寓意》《絵画の寓意》《音楽の寓意》がある。天井画はヴァザーリとストラダーノが手掛けたとされる。
⑦の書斎はテラスの書斎は、記録からによれば、ヴァザーリが60年代に計画、一部を建設し､80年代にバルトロメオ・アンマナーティの指揮のもと、装飾などが完成しているとされる。ドガーナの中庭の上に位置する。エレオノーラの区画と新しいグアルダローバをつなぐ位置にある。２つのテラスに挟まれた一室という、他の書斎とは異なる位置にある。部屋には大理石の彫像が飾れていたという。部屋の内部はグロテスク装飾により飾られていた。２つのテラスには、フレスコ画で柱廊やつる棚、ヴィラ(別荘)をもつ風景が表されており、理想的な風景が表現されているとされる。つる棚には、アポロかオルフェウスの像が置かれているように描かれている。テラスの装飾は、トンマーゾ・デル・ヴェロキオが手掛けた。装飾の選択には、静かな生活を送る場所としてヴィラと書斎の類似性が指摘される。

10　改築を手掛けたジョルジ・ヴァザーリは、そのパラッツォの構成において、書斎は「裏階段(scale segrete)」、「控えの間(anticamere)」

と「洗面室（destri）」に続く.最後の要素であると述べている。Giorgio vasari, *Le vite de' più eccellenti architetti, pittori, et scultori italiani, da Cimabue, insino a' tempi nostri*, Nell'edizione per i tipi di Lorenzo Torrentino, Firenze 1550, A cura di Luciano Bellosi, Aldo Rossi, Einaudi, Torino, 1986, p. .

11 その他、ベルフィオーレにおけるレオネッロ・デステの書斎には、古典古代の諸芸術の守護神ムーサを主題とするプログラムが描かれていたと推測されている。

12 その他の８人のムーサは、クレーイオ、エウトゥルペ、メルポメーネ、ターリア、ポリンニーア、エラート、テルプシコーレ、ウラーニアである。

13 ヴァザーリがコジモ１世の息子フランチェスコを案内する会話形式。1558 ～ 63年に執筆され、1588年にヴァザーリの甥によって刊行された。*Ragionamenti del signor Giorgio Vasari. Sopra le invenzioni da lui dipinte in Firenze nel Palazzo Vecchio*, a cura di Eugenio Giani, Accademia dell'Iris, 2011.

14 コジモ・イル・ヴェッキオが擁護した彫刻家ドナッテロの彫刻についても、『列伝』のなかで触れられている。ジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス彫刻家建築家列伝』森田義之監訳、1989年、白水社。

15 古代遺物の収集については、ファブリツィオ・パオルッチ「15－18世紀におけるメディチ家の古代コレクション」渡辺晋輔訳『国立西洋美術館研究紀要』no.13、2009年、29-38頁。エトルリアの遺物の収集については、M. Christofani, "Per una storia collezionismo archeologico nella Toscana granducale. I. I grandi bronzi", in *Prospettiva*, n. 17, 1979, pp. 4-15.　北田前掲書、259頁。

16 北田、同掲書、258頁。

17 Francesca Fiorani, *The Marvel of Maps : Art, Cartography and Politics in Renaissance Italy,* Yale University New Haven and London, 2005

18 タンスのパネルの装飾は、エニャツィオ・ダンティーニによって1563-1575年に31の地図、ステファノ・ボンィニョーリによって1577-1586年に23の地図によって完成した。

19 若桑みどり「トスカーナ大公フランチェスコ一世のストゥディオーロの「主題」について」『日伊文化研究』第12号、1973年、77-100頁。

内島　美奈子（うちじま　みなこ）　　西南学院大学博物館学芸員

大学博物館の使命としての教育普及活動
－せいなんこどもワークショップ事例紹介と課題－

山尾　彩香

はじめに

大学博物館が担うべき教育普及活動の使命とは何であろうか。大学博物館という性質上、その活動は大学に在籍する学生に第一に向けられる。しかし大学博物館は社会に開かれた大学の窓口という役割もまた担っている。ならば、大学博物館がなすべき教育普及活動はその二つの使命の全うであろう。西南学院大学博物館では学生教育、そして社会教育への実践の場のひとつとして「ワークショップ」を実験的ながらも、2010年度より取り入れてきた。本稿では、これまでの５年以上に及ぶワークショップ活動の検証を通じて、西南学院大学博物館における教育普及活動の現状と課題を探っていきたい。

１．大学博物館における生涯学習

日本の博物館法（1951年制定）の第２条において博物館は次のように定義されている。

この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（社会教育法 による公民館及び図書館法（昭和二十五年法律第百十八号）による図書館を除く。）のうち、地方公共団体、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人（独立行政法人（独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三号）第二条第一項 に規定する独立行政法人をいう。第二十九条において同じ。）を除く。）が設置するもので次章の規定による登録を受けたものをいう。

ここで博物館に求められている役割は、資料の収集、保管（育成含む）、展示、必要な諸事業、調査研究である。博物館に求められる教育的役割については「教育的配慮」や「教養」という表現で、それぞれ展示と必要な諸事業の一端におかれているだけである[1]。博物館における教育活動が重要視されるようになるのは、1970年代に国際的な広がりを見せつつあった生涯教育の考えが日本にも波及したことがきっかけであった。1981年に文部省が中央教育審議会答申に提出した生涯教育についての答申（昭和56年６月11日）では、生涯教育とは「今日、変化の激しい社会にあって、人々は、自己の充実・啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自ら選んで、生涯を通じて行うものである。その意味では、これを生涯学習と呼ぶのがふさわしい。この生涯学習のために、自ら学習する意欲と能力を養い、社会の様々な教育機能を相互の関連性を考慮しつつ総合的に整備・充実しようとするのが生涯教育の考え方である。言い換えれば、生涯教育とは、国民の一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てられるべき基本的な理念である」[2]としたうえで、２章『我が国の生涯教育に関する状況と今後の課題』において「我が国においては、国民の多様な学習意欲の高まりや教育に対する強い関心・要求に対応して、それを充足する様々な学習機会が提

供されている」として学校教育があげられ、博物館もまた生涯教育への意欲的な取り組みがなされている施設として名を連ねている。その後、1984年には最終答申『生涯学習体制の整備』が掲げられ、1988年にはこれまでの社会教育局にかわり生涯学習局が新設され、1990年に「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」(「生涯学習振興法」)が公布されると、いよいよもって博物館は生涯学習実現のための施設として一躍重要な位置づけをされることとなった[3]。

一般的な博物館と原理的に違いの無い大学博物館において、生涯学習に対する姿勢もまた、近年になって指針が定められるようになった。1996年に第14期文部科学省審議会学術資料部会により提出された『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』と題された中間報告の第３章『ユニバーシティ・ミュージアムの整備』において、大学博物館(ユニバーシティ・ミュージアム)とは「大学において収集・生成された有形の学術標本を整理、保存し、公開・展示し、その情報を提供するとともに、これらの学術標本を対象に組織的に独自の研究・教育を行い、学術研究と高等教育に資することを目的とした施設である。加えて、『社会に開かれた大学』の窓口として展示や講演会等を通じ、人々の多様な学習ニーズにこたえることができる施設」とある。さらに、その教育機能においては「学術標本を基礎とした大学院・学部学生の教育に参加するとともに、博物館実習をはじめ大学における学芸員養成教育への協力を行う。また、一般の博物館の学芸員に対する大学院レベルのリカレント教育や、人々の生涯にわたる学習活動にも積極的に協力することが望ましい」とあり、生涯学習を積極的に支援する必要性を明記している。

2006年に開館した西南学院大学博物館は「西南学院大学博物館規則」(制定：2005年10月５日)の第３条において設置目的を以下のように定めている。

> 西南学院大学博物館(以下「博物館」という。)は、次に掲げる事項を目的とする。
>
> ⑴キリスト教文化、教育文化、地域文化、西南学院史等に関する博物館資料(以下「資料」という。)の収集、整理、保管、閲覧及び展示に関する事項
>
> ⑵前号の資料の調査研究に関する事項
>
> ⑶本学学生、教職員等の西南学院関係者並びに一般市民等の教養及び調査研究に資するために必要な事業の実施に関する事項

ここでは、西南学院大学のキリスト教主義教育にしたがって、キリスト教や教育文化、福岡という立地に鑑みた地域文化、大学の母体である西南学院の歴史に関する博物館業務をおこなうことを目的の第一に揚げている。その対象は本学学生、教職員、西南学院関係者等(教会関係者および学生保護者、保証人など)、そして一般市民等となっている。教育機関である大学の付属施設であり、学校法人が運営する大学博物館は、基本的に在籍する学生を第一に対象とするが、社会に開かれた大学の窓口としての役割もまた重要な使命である。生涯学習の一助となる大学の特性を生かした一般市民向けの展示、公開講演会、ミュージアムトークは勿論のこと、児童向けの教育普及活動にも積極的に取り組んでいる。そのひとつが「せいなんこどもワークショップ」である。

２．せいなんこどもワークショップ

西南学院大学博物館では教育普及活動として、2010年度より「楽しみながら学べる」をコンセプトに、主に大学周辺の小学生を対象とした「せいなんこどもワークショップ」(以下、ワークショップ)を毎年度開催してきた(付録１参照)。小学生向けのプログラムを作るにあたっては、参加者に西南学院を理解し、大学博物館を身近に感じてもらい、参加を通じて特別展や常設展示への認識を深めてもらうという目的がある。前章の西南学院大学博物館規則第３章で挙げた「キリスト教文化、教育文化、地域文化、西南学院史等に関する」事柄は、そのまま西南学院大学博物館の特色ともなる。ワークショップではこれら３つの要素「コンセプト：楽しみながら学べる」、「目的：西南学院の理解、大学博物館への親近

感、展示への関心づくり」、「特色：キリスト教文化、教育文化、地域文化、西南学院史等」を意識したプログラムづくりがなされる。

また、2014年度より大学博物館連携事業（大学博物館連携、地域博物館連携）の一環として館外ワークショップである「せいなんおでかけワークショップ」を行っている。協定先である長崎県南島原市および熊本県天草市や、共同事業を行う大学博物館に赴き、西南学院大学博物館のPRや交流を図ることを主な目的として様々なワークショップを開催している（付録２参照）。

ワークショップの企画運営は、基本的に西南学院大学博物館（以下、博物館）の学生を含む臨時職員を中心として行われる。年度のはじめに、１年間の大まかなワークショップスケジュールが組まれ、それをもとに各回の担当者となった臨時職員が企画を考えることとなる。プログラム内容は毎回変わるものの、①聖書植物園・常設展示関連、②春季特別展関連、③博物館実習成果展関連、③秋季特別展関連、④年中行事（季節もののイベント）が基本的な枠組みとして存在し、それぞれが１～２か月に一度の頻度で開催される。

また、ワークショップでは学生ボランティアも広く募集している。学生ボランティアは西南学院大学生（大学院生含む）を対象としたもので、活動内容は主にワークショップ当日の参加者との交流である。そこには博物館に馴染みのない学生に対して博物館活動の理解を促すとともに、参加した学生ボランティアが社会人となる際に求められる協調性や発想力、状況判断に基づく臨機応変な対応ができるような実践教育の場としての役割も考えられている。

ここからは実践例として2014年度「わたしのせいなんミュージアム」を挙げ、博物館におけるワークショップの具体的な取り組みを以下に記す。

実施例　「わたしのせいなんミュージアム」

開催日時：2014年8月2日（土）10：00～12：00（2時間）

開催の目的：

⑴特別展「海路―海港都市の発展とキリスト教受容のかたち―」関連イベント

⑵博物館で主体的に学ぶ姿勢をはぐくむ

⑶物事を様々な視点で捉え、まとめる能力を身につける

⑷参加者だけでなく保護者にもワークショップの成果を実感してもらう

⑸博物館実習生への実践的教育

参加者：小学生４名、保護者４名
　　学生ボランティア：２名
　　博物館実習生：４名
　　博物館スタッフ：３名

会　場：西南学院大学博物館、西南コミュニティセンター

内　容：

１　学習ノートを配布し、ボランティアや実習生とともに博物館内を探索し問題を解いて回る。

２　学習成果発表会（学習ノートに取り組んだ成果を保護者の前で発表）

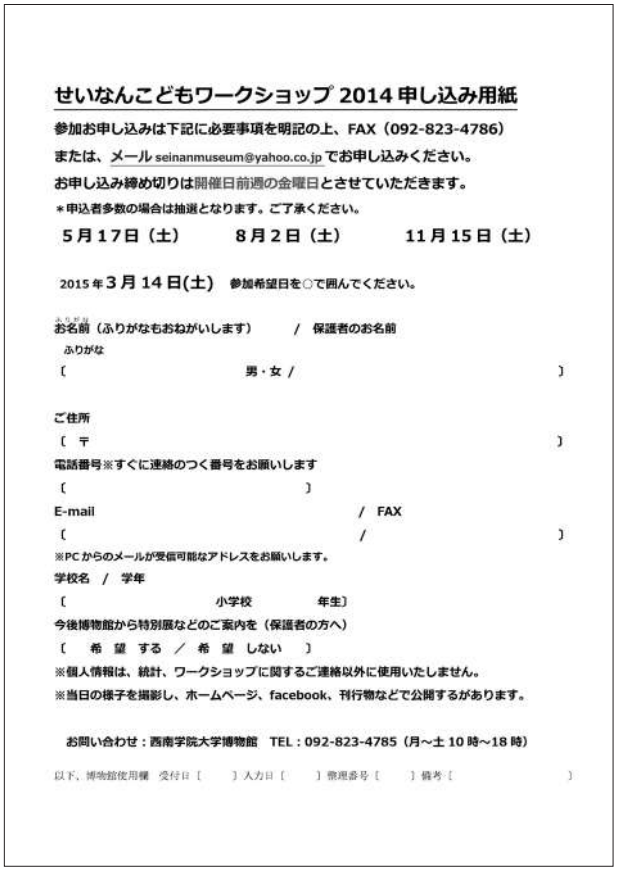
３　学生ボランティア、実習生、保護者から口頭で参加者へ向けてのメッセージと感想

ｉ）企画

2014年度に組まれた１年間のスケジュールでは、計４回のワークショップ開催が決定していた。各回のワークショップの全体統括者として企画、運営、報告を行う主担当（１名）と、主担当の補佐となる副担当（１～２名）が決まると、大まかな内容が主担当（以下、担当）によって考えられることとなる。各担当によるワークショップの提案内容が適切であるという学芸員の許可が下りると、次にワークショップ参加者募集のポスター（図１）が作成される。

作成されたポスターと、ポスターの裏面に申し込み用紙（図２）を印刷したチラシは博物館内、外部利用者の多い西南クロスプラザ（大学食堂）内の掲示板等に設置されるほか、博物館公式ホームページ（www.seinan-gu.ac.jp/museum）、SNS（Twitter、facebook）といったネット上でも公開される。ワークショップでは万一の事故に備え参加者の保険加入を行っているため、事前募集制度を採用している。また、同時期に学生ボランティアの募集も開始され

図１　2014年度せいなんこどもワークショップポスター



せいなんこどもワークショップ 2014 申し込み用紙

参加お申し込みは下記に必要事項を明記の上、FAX（092-823-4786）
または、メール seinanmuseum@yahoo.co.jp でお申し込みください。
お申し込み締め切りは開催日前週の金曜日とさせていただきます。
＊申込者多数の場合は抽選となります。ご了承ください。

5月17日（土）　8月2日（土）　11月15日（土）

2015年3月14日(土)　参加希望日を○で囲んでください。

お名前（ふりがなもおねがいします）　/　保護者のお名前
ふりがな
〔　男・女 /　〕

ご住所
〔 〒　〕
電話番号※すぐに連絡のつく番号をお願いします
〔　〕
E-mail　/ FAX
〔　/　〕
※PCからのメールが受信可能なアドレスをお願いします。
学校名 / 学年
〔　小学校　年生〕
今後博物館から特別展などのご案内を（保護者の方へ）
〔 希望する / 希望しない 〕
※個人情報は、統計、ワークショップに関するご連絡以外に使用いたしません。
※当日の様子を撮影し、ホームページ、facebook、刊行物などで公開するがあります。

お問い合わせ：西南学院大学博物館　TEL：092-823-4785（月～土 10 時～18 時）

以下、博物館使用欄　受付日〔　〕入力日〔　〕整理番号〔　〕備考〔　〕

図２　ワークショップ参加者申し込み用紙

る。

担当はワークショップ開催の１～２ヵ月前から準備に取り掛かる。担当は年度初めに提案した内容を具体的にするための企画書をまず作成する。８月開催の「わたしのせいなんミュージアム」では、春季特別展「海路―海港都市の発展とキリスト教受容のかたち―」の関連イベントとして開催されるワークショップというのが前提にあったが、この時期が小学生の夏休み期間と博物館実習期間とで重なっていることから、①夏休みの自由研究にも活用してもらえるような、参加者の主体的な学びの場の提供となること、②博物館実習の一環として該当年度の実習生の実践教育の場となること、という２つの目的を掲げることとした。そこから、自由研究として形に残る成果物の必要性から、補助教材として『わたしのせいなんミュージアム学習ノート』(図３)の導入を決定する。

ⅱ)博物館の学習的活用

『わたしのせいなんミュージアム学習ノート』

『わたしのせいなんミュージアム学習ノート』(以下、『学習ノート』)を作成するにあたって、①博物館の展示による学習、②博物館活動への興味関心づくりに主眼を置き、⑴学年ごとに難易度を設定した常設展、建物、特別展に関する問題集、⑵展示資料の調書シート、⑶オリジナルの博物館を書く課題シート、⑷感想、メッセージという構成をとった。ワークショップ参加者の対象は小学生であり学年の制限はないため、⑴の問題集では問題ごとに難易度を設定し、学年にあった学習に取り組める形をとった。低学年向けの問題１では、常設展示についての問題を採用したが、ここでは館内に設置してあるスタンプラリーを活用し、楽しみながら学べることをコンセプトとした。問題２は博物館の建築に関する問題を取り上げた。博物館の建物は旧西南学院本館として1921年にウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計により竣工した３階建てのレンガ造りで、現在は福岡県指定有形文化財[4]となっている。歴史的建造物としての価値を有した建造物であることから、2004～2005年に行われた建物の補強改修工事の際

西南学院大学博物館こどもワークショップ

わたしのせいなんミュージアム

学習ノート

小学校　年　組

名前

2014年8月2日　今日やること

★1・2ねんせいグループ

・もんだい1・・・・・・・・・・・2～3ページ
・もんだい2・・・・・・・・・・・4～5ページ
・わたしの夢のミュージアム・・・9ページ
・今日の感想・・・・・・・・・・・10ページ

★3・4年生グループ

・もんだい1・・・・・・・・・・・2～3ページ
・もんだい2・・・・・・・・・・・4～5ページ
・問題3・・・・・・・・・・・・・6～7ページ
・わたしの夢のミュージアム・・・9ページ
・今日の感想・・・・・・・・・・・10ページ

★5・6年生グループ

・問題3・・・・・・・・・・・・・6～7ページ
・学習テーマ・・・・・・・・・・・8ページ
・わたしの夢のミュージアム・・・9ページ
・今日の感想・・・・・・・・・・・10ページ

1

★はくぶつかんをたんけんして、こたえをみつけよう！

もんだい1

①～⑤のスタンプにかかれている絵はなんだろう？
さがしてなまえをこたえよう。

① 聖書の民、イスラエルの歴史

時文

ヒント：くろい、おおきい。

マメ　マメ

ヒント：マメは2しゅるいあるよ。

ヒント：「ショーファル」ともいうよ。

② 聖書の写本

文書

ヒント：つぼのなかにはいっていたよ。

聖書

ヒント：サルやウサギのえがかかれてるよ。

2

---

③ 鏡

ヒント：ひかりをあてるとキリストがうかびあがるよ。

④ キリスト教の母体としてのユダヤ教

指示棒（　　）

ヒント：ヘブライごで「て」といういみだよ。

肩掛け（　　）

ヒント：おいのりするときに、かたにかけるよ。

⑤ 九州のキリスト教

観音像

ヒント：とくべつてんじしつにあるよ。

3

もんだい2

はくぶつかんのたてものについてしらべよう。

（1）どんな建物かな？　どんなもので出来ている？

建物の外からみると（①　　）で、中からみると（②　　）でつくられている。

①

②

（2）誰がつくったのかな？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ヒント：がいこくじんだよ。
3かいでしらべてみよう。

4

（3）いつできたのかな？

＿＿＿＿＿＿＿＿年

ヒント：3かいでしらべてみよう。

（4）2かいと3かいのゆかの下に、しきつめられているものはなんでしょう？

（石炭の燃え殻）

ヒント：2かいのどこかに、ゆかのしたをのぞけるまどがあるよ。

（5）まどはぜんぶでいくつあるかな？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ヒント：たてもののまわりをまわってかぞえてみよう。

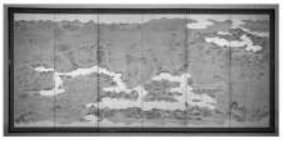
5

問題3

特別展「海路～海港都市の発展とキリスト教受容のかたち～」

について調べましょう。

【1】　この「海路図屏風」はどこからどこまでの航路（船の道）を描いているものですか。



＿＿＿＿から＿＿＿＿まで

チャレンジ問題（むずかしさ★★★）

福岡はどこにあるのかな？　探してみよう！

【2】　日本にキリスト教を伝えた、この人物について答えましょう。

この人物の名前は何ですか。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

どこの国から来ましたか。

＿＿＿＿＿＿

日本のどこにやって来ましたか。

＿＿＿＿＿＿

何年に日本に来ましたか。

＿＿＿＿＿年

6

【3】　船を描いた絵馬はどんなものだったのでしょうか。

船絵馬は（①　　）に乗る人が航海の（②　　）を祈って、神社やお寺に奉納されるものだった。

【4】これらの陶磁器（やきもの）はそれぞれ、どこの国から船で運ばれてきたものでしょうか。答えの組み合わせを線で結びましょう。

天目碗

青磁皿

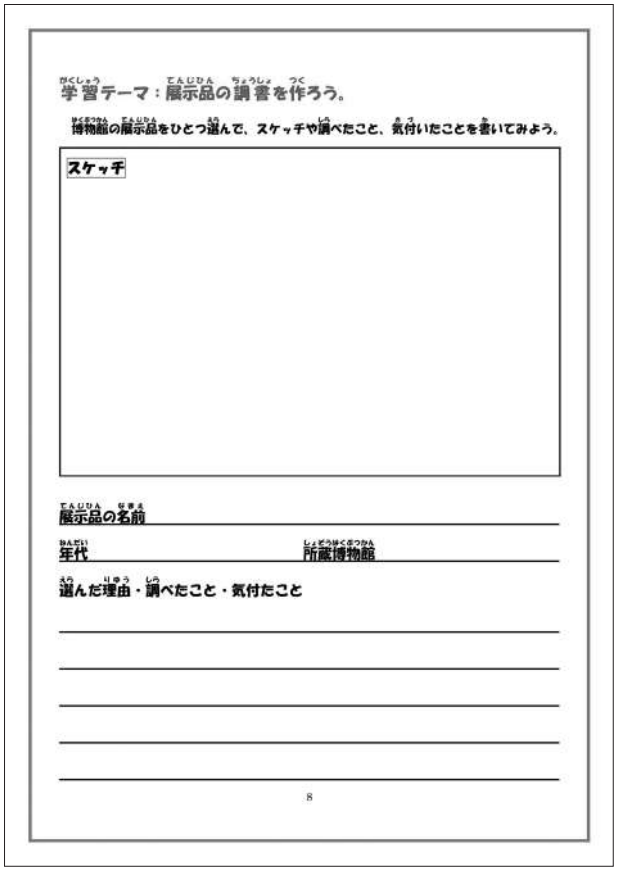
白磁碗

・　・　・

・　・　・

朝鮮王朝　　高麗　　中国

7



学習テーマ：展示品の調書を作ろう。

博物館の展示品をひとつ選んで、スケッチや調べたこと、気付いたことを書いてみよう。

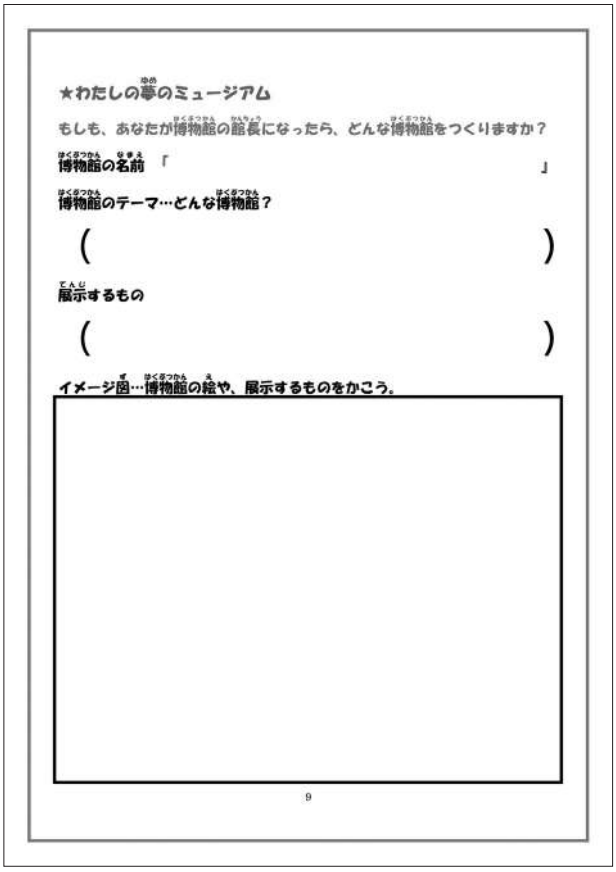
スケッチ

展示品の名前

年代　　所蔵博物館

選んだ理由・調べたこと・気付たこと

8



★わたしの夢のミュージアム

もしも、あなたが博物館の館長になったら、どんな博物館をつくりますか？

博物館の名前　「　　」

博物館のテーマ…どんな博物館？

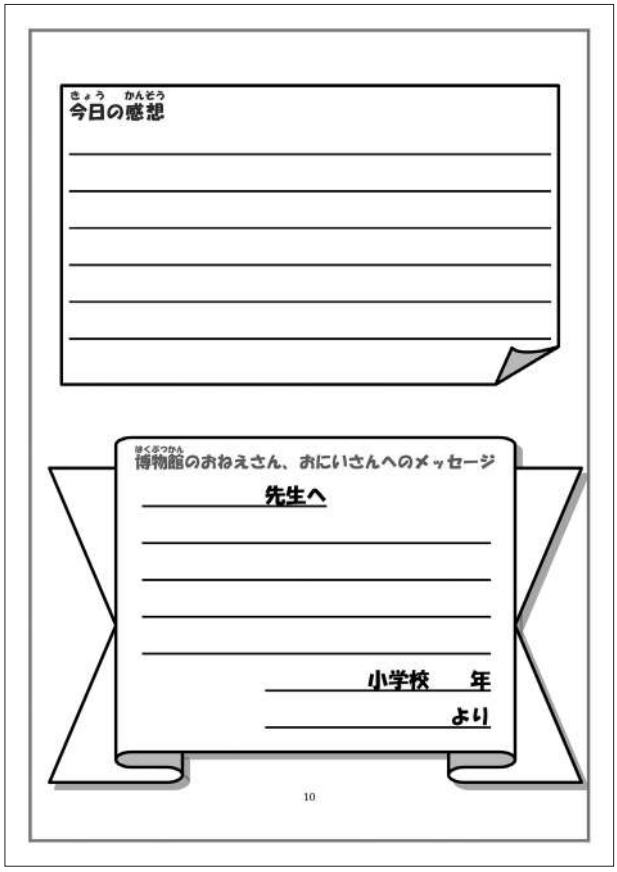
(　　)

展示するもの

(　　)

イメージ図…博物館の絵や、展示するものをかこう。

9



今日の感想

博物館のおねえさん、おにいさんへのメッセージ

先生へ

小学校　　年

より

10

図３　『わたしのせいなんミュージアム学習ノート』（原本A ４）

に、建物の建築構造もまた展示の一部として活用するため、壁や床の一部にのぞき窓が設置された。建物に関する問題はそういった展示も踏まえ、館内だけでなく館外まで探索の足を広げじっくりと観察しなければ解けない問題構成にした。一方で高学年向けの問題３では、特別展「海路―海港都市の発展とキリスト教受容のかたち―」の資料の観察とキャプションの読解を必要とする問題を設定する。⑵の展示資料の調書シートは高学年向けのものの学習課題として、「展示資料紹介」を目的とした、簡易的な調書シートを用意した。これは、資料の細かな観察や学習を促すだけでなく、博物館で働く学芸員の仕事のひとつである調書作成を通して、博物館への興味関心づくりもねらいにあった。後者のねらいを引き継いだ低学年向けの⑶「わたしの夢のミュージアム」と題した課題では、参加者に「博物館の館長になったらと、どんな博物館をつくりますか？」と問いを投げかけ、オリジナルの博物館の構想を考えてもらう内容となっている。そのページは博物館の名称、展示テーマ、展示資料内容、博物館のイメージ図で構成されている。最後の⑷の感想とメッセージは博物館側が回収して成果物として保管できるよう、ページが切り取れるように工夫をしてある。これはワークショップの全体の反省に生かせるよう、参加者の反応を明確に残すねらいがあった。また、学生ボランティアや実習生に向けてのメッセージを参加者に書いてもらうことで、学生の博物館活動に対する意識をより印象深いものにする目的もあった。

『学習ノート』の構想を固めると、ワークショップの主要内容も定まってくる。問題ごとの難易度を設けたことから、学年ごとにグループ分けが必要となった。そのため各グループには最低１名以上の博物館実習生あるいは学生ボランティアを担当させ、グループで博物館を探索しながら学習ノートを完成させていくのを大まかな流れとした。学習ノートの進め方については、時間に余裕があればすべての問題に取り組み、学習ノートの完成を目指すとし以下のようにした。

学年別グループと学習内容

【１・２年生グループ】

問題１→２→夢のミュージアム

→感想・メッセージ

【３・４年生グループ】

問題１→２→３→夢のミュージアム

→感想・メッセージ

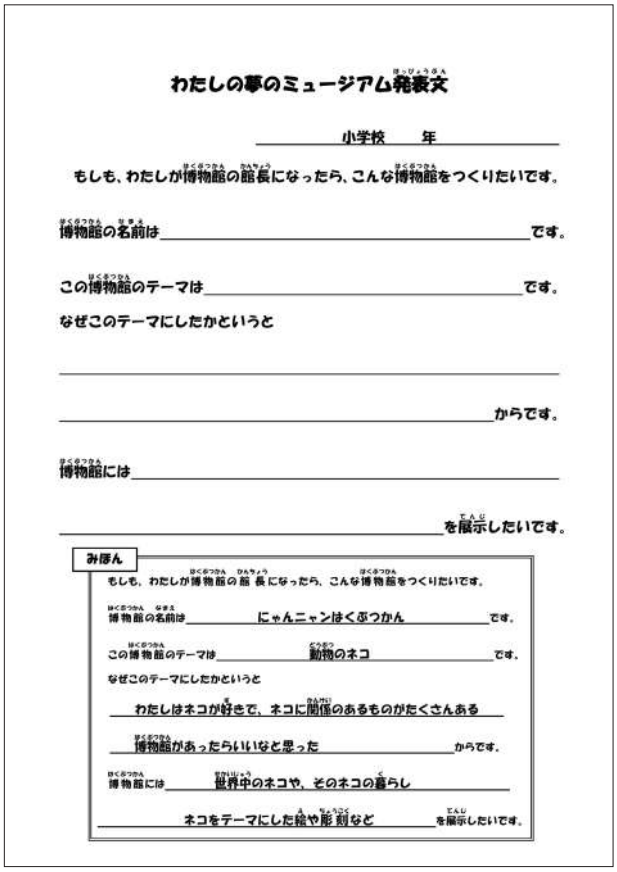
【５・６年生グループ】

問題３→調書→(夢のミュージアム→)

感想・メッセージ

ⅲ)保護者を視野にいれた「学習成果発表会」

これまでのワークショップでは原則として参加者の保護者は送迎のみで、ワークショップへの参加は自主性や社会性を養うことへのねらいから、子どものみに限定してきた。しかし、ワークショップを通して保護者へも何らかのアプローチを試みたいとの考えから「わたしのせいなんミュージアム」では保護者を巻き込む子ども向けワークショップのプログラ


わたしの夢のミュージアム発表文

＿＿＿＿小学校　　年＿＿＿＿

もしも、わたしが博物館の館長になったら、こんな博物館をつくりたいです。

博物館の名前は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿です。

この博物館のテーマは＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿です。

なぜこのテーマにしたかというと

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿からです。

博物館には＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿を展示したいです。

みほん

もしも、わたしが博物館の館長になったら、こんな博物館をつくりたいです。

博物館の名前は＿にゃんニャンはくぶつかん＿です。

この博物館のテーマは＿動物のネコ＿です。

なぜこのテーマにしたかというと

＿わたしはネコが好きで、ネコに関係のあるものがたくさんある＿

＿博物館があったらいいなと思った＿からです。

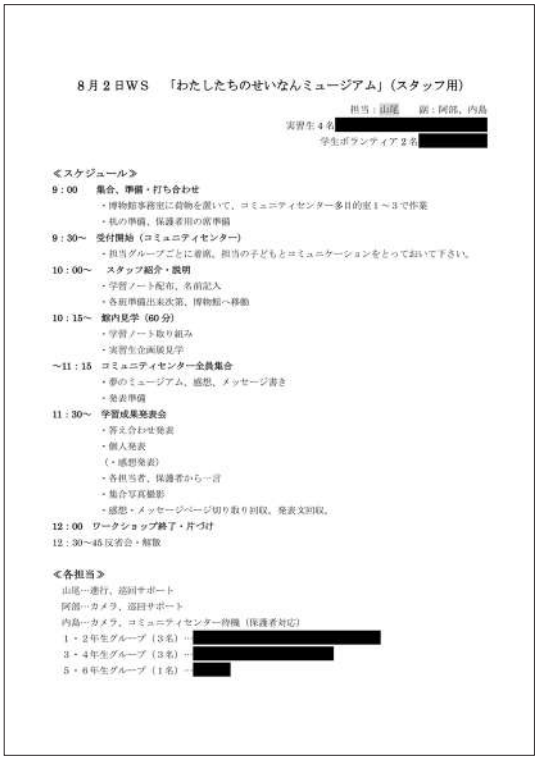
博物館には＿世界中のネコや、そのネコの暮らし＿

＿ネコをテーマにした絵や彫刻など＿を展示したいです。

図４　わたしの夢のミュージアム発表文(原稿)

ム作りを目指した。それがワークショップ後半に実施した学習成果発表会だ。

学習成果発表会は、ワークショップの前半で取り組んだ『学習ノート』の答え合わせ、および課題（調書、わたしの夢のミュージアム）の発表を保護者の前で行うもので、低学年参加者には発表の補助として、穴埋め形式の発表原稿（図４）を用意した。この学習成果発表会は保護者に対する、①博物館の教育普及活動への関心と理解の促進、②発表内容を通しての博物館宣伝、③親子間のコミュニケーションづくり、④ワークショップ参加の成果報告を目的として定めていた。また、参加者にも学習成果発表会を

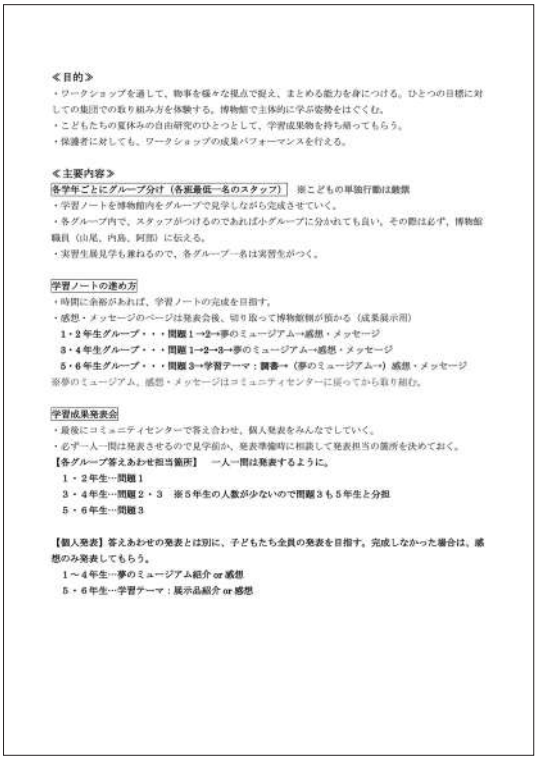


８月２日WS　「わたしたちのせいなんミュージアム」（スタッフ用）

担当：山尾　副：阿部、内島
実習生４名[redacted]
学生ボランティア２名[redacted]

≪スケジュール≫
9：00　集合、準備・打ち合わせ
・博物館事務室に荷物を置いて、コミュニティセンター多目的室１～３で作業
・机の準備、保護者用の席準備
9：30～　受付開始（コミュニティセンター）
・担当グループごとに着席、担当の子どもとコミュニケーションをとっておいて下さい。
10：00～　スタッフ紹介・説明
・学習ノート配布、名前記入
・各班準備出来次第、博物館へ移動
10：15～　館内見学（60分）
・学習ノート取り組み
・実習生企画展見学
～11：15　コミュニティセンター全員集合
・夢のミュージアム、感想、メッセージ書き
・発表準備
11：30～　学習成果発表会
・答え合わせ発表
・個人発表
（・感想発表）
・各担当者、保護者から一言
・集合写真撮影
・感想・メッセージページ切り取り回収、発表文回収。
12：00　ワークショップ終了・片づけ
12：30～45 反省会・解散

≪各担当≫
山尾…進行、巡回サポート
阿部…カメラ、巡回サポート
内島…カメラ、コミュニティセンター待機（保護者対応）
１・２年生グループ（３名）[redacted]
３・４年生グループ（３名）[redacted]
５・６年生グループ（１名）[redacted]



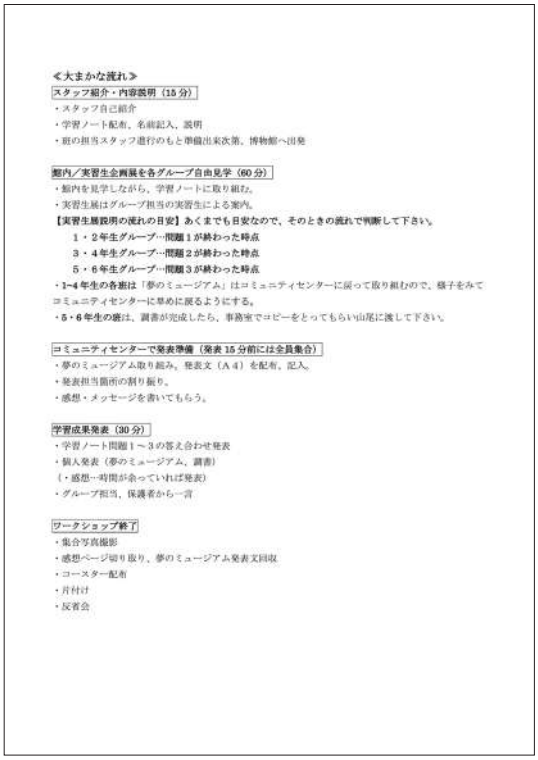
≪目的≫
・ワークショップを通して、物事を様々な視点で捉え、まとめる能力を身につける。ひとつの目標に対しての集団での取り組み方を体験する。博物館で主体的に学ぶ姿勢をはぐくむ。
・こどもたちの夏休みの自由研究のひとつとして、学習成果物を持ち帰ってもらう。
・保護者に対しても、ワークショップの成果パフォーマンスを行える。

≪主要内容≫
各学年ごとにグループ分け（各班最低一名のスタッフ）　※こどもの単独行動は厳禁
・学習ノートを博物館内をグループで見学しながら完成させていく。
・各グループ内で、スタッフがつけるのであれば小グループに分かれても良い。その際は必ず、博物館職員（山尾、内島、阿部）に伝える。
・実習生展見学も兼ねるので、各グループ一名は実習生がつく。

学習ノートの進め方
・時間に余裕があれば、学習ノートの完成を目指す。
・感想・メッセージのページは発表会後、切り取って博物館側が預かる（成果展示用）
１・２年生グループ・・・問題１→２→夢のミュージアム→感想・メッセージ
３・４年生グループ・・・問題１→２→３→夢のミュージアム→感想・メッセージ
５・６年生グループ・・・問題３→学習テーマ：調書→（夢のミュージアム→）感想・メッセージ
※夢のミュージアム、感想・メッセージはコミュニティセンターに戻ってから取り組む。

学習成果発表会
・最後にコミュニティセンターで答え合わせ、個人発表をみんなでしていく。
・必ず一人一問は発表させるので見学前か、発表準備時に相談して発表担当の箇所を決めておく。
【各グループ答えあわせ担当箇所】　一人一問は発表するように。
１・２年生…問題１
３・４年生…問題２・３　※５年生の人数が少ないので問題３も５年生と分担
５・６年生…問題３

【個人発表】答えあわせの発表とは別に、子どもたち全員の発表を目指す。完成しなかった場合は、感想のみ発表してもらう。
１～４年生…夢のミュージアム紹介 or 感想
５・６年生…学習テーマ：展示品紹介 or 感想



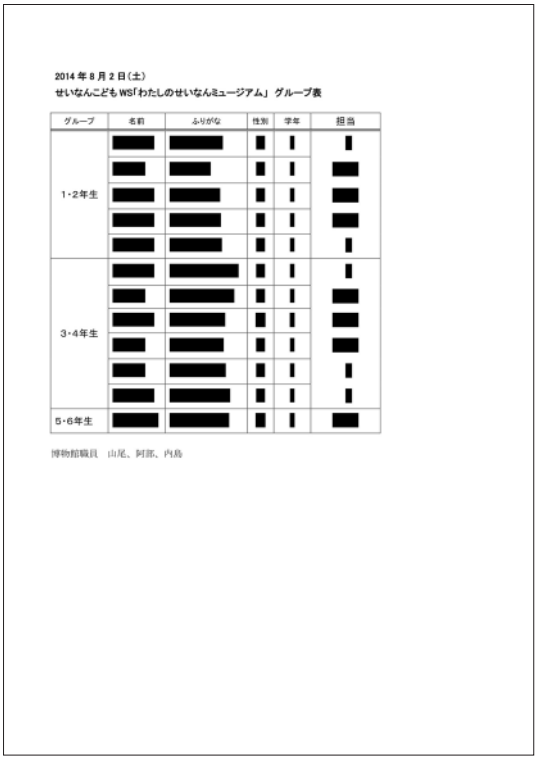
≪大まかな流れ≫
スタッフ紹介・内容説明（15分）
・スタッフ自己紹介
・学習ノート配布、名前記入、説明
・班の担当スタッフ進行のもと準備出来次第、博物館へ出発

館内／実習生企画展を各グループ自由見学（60分）
・館内を見学しながら、学習ノートに取り組む。
・実習生展はグループ担当の実習生による案内。
【実習生展説明の流れの目安】あくまでも目安なので、そのときの流れで判断して下さい。
１・２年生グループ…問題１が終わった時点
３・４年生グループ…問題２が終わった時点
５・６年生グループ…問題３が終わった時点
・1~4年生の各班は「夢のミュージアム」はコミュニティセンターに戻って取り組むので、様子をみてコミュニティセンターに早めに戻るようにする。
・５・６年生の班は、調書が完成したら、事務室でコピーをとってもらい山尾に渡して下さい。

コミュニティセンターで発表準備（発表15分前には全員集合）
・夢のミュージアム取り組み、発表文（A４）を配布、記入。
・発表担当箇所の割り振り。
・感想・メッセージを書いてもらう。

学習成果発表（30分）
・学習ノート問題１～３の答え合わせ発表
・個人発表（夢のミュージアム、調書）
（・感想…時間が余っていれば発表）
・グループ担当、保護者から一言

ワークショップ終了
・集合写真撮影
・感想ページ切り取り、夢のミュージアム発表文回収
・コースター配布
・片付け
・反省会



2014年８月２日（土）
せいなんこども WS「わたしのせいなんミュージアム」グループ表

グループ	名前	ふりがな	性別	学年	担当
１・２年生	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
３・４年生	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]
５・６年生	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]	[redacted]

博物館職員　山尾、阿部、内島

図５　ワークショップスタッフ用マニュアル

時間	内容	詳細
9：00	集合、準備・打ち合わせ	・博物館事務室に荷物を置いて、コミュニティセンター多目的室1 ～ 3で作業 ・机の準備、保護者用の席準備
9：30 ～	受付開始	・担当グループごとに着席 ・子どもとコミュニケーションをとる
10：00	ワークショップ説明	・学習ノート配布、名前記入 ・各班準備出来次第、博物館へ移動
10：15	館内見学	・学習ノート取り組み ・実習生展見学
11：15	コミュニティセンター全員集合	・夢のミュージアム、感想、メッセージ書き ・発表準備
11：30	学習成果発表会	・答え合わせ発表 ・個人発表 ・感想発表 ・各担当者、保護者から一言 ・集合写真撮影 ・感想・メッセージ、発表原稿回収
12：00	ワークショップ終了	・撤収 ・反省会 ・解散

表1　「わたしのせいなんミュージアム」スケジュール

『学習ノート』取り組みの様子

設けることで、ワークショップへの取り組みをより意欲的なものへとするねらいもあった。学習成果発表会の最後には保護者からの感想を伝えてもらう時間も設け、これは参加者、保護者、博物館の三者にとって有意義なものとなった。

iv）運営：博物館教育実践の場として

ワークショップの当日は博物館スタッフ、学生ボランティアの打ち合わせから始まる。学生ボランティアには事前にスケジュールや内容を伝えており、当日に詳しい打ち合わせを行う。「わたしのせいなんミュージアム」では博物館実習生が中心となるため、ワークショップ前日の実習時間に事前に打ち合わせを行っていた。開催ごとに用意されるワークショップスタッフ用のマニュアル（図５）と、答えを載せたスタッフ用の『学習ノート』をもとにスケジュール（表１）、内容、グループの担当、注意点等の確認が終わると、受付や会場設営の準備に取り掛かる。

「わたしのせいなんミュージアム」では事前申し込みで12名の参加者が予定されていたが、最終的な参加者は１年生２名、３年生２名の計４名となった。そのため、想定していたグループ行動を急遽変更し、参加者１名に対して実習生および学生ボランティアを１～２名つけるマンツーマン体制をとることとなった。学生側も急な変更にも関わらず臨機応変な対応をみせ、これによりグループの引率者とその一員としてではなく、パートナーとしての学生と参加者の関係が築かれることとなった。このことは『学習ノート』への取り組みを捗らせ、当初予定していた学年ごとに設定していた問題集のすべての問題を、学年に関係なく参加者全員が完成させることとなり、結果としてより親密で学習効果の高いプログラムとなったのは僥倖であった。なお、想定していた実習成果展の案内は当日の設営が間に合わず叶わなかった。

博物館での『学習ノート』の取り組みを終えた後、机と椅子を用意してある場所へと移動し、そこでは「わたしの夢のミュージアム」の課題に取り組んだ。この課題は発想力を必要とするものであったため、なかなか筆の進まない参加者が多かった。ここでは事前に学生に対して、参加者の好きなものやどういった博物館に行ってみたいか、などのコミュニケーションを通して取り組むように指示をしており、パートナーである学生の助けを借りて、参加者

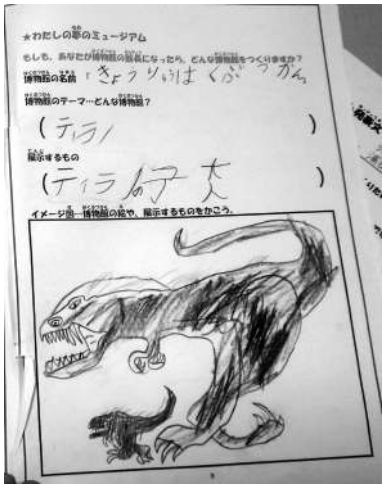
課題：わたしの夢のミュージアム

【作成例１】

博物館名称「きょうりゅうはくぶつかん」

展示テーマ「ティラノ」

展示するもの「ティラノの子、大人」

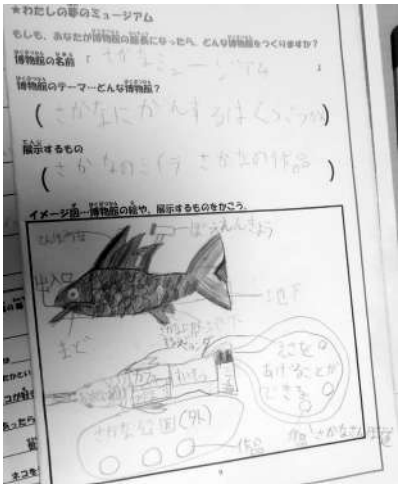


【作成例２】

博物館名称「さかなミュージアム」

展示テーマ「さかなにかんするはくぶつかん」

展示するもの「さかなのミイラ、さかなの作品」



全員が課題を完成させることができた。展示資料紹介の調書シートは高学年の参加者がいなかったため取り組まなかった。

『学習ノート』を完成させると、次は学習成果発表会の時間だ。事前に保護者には発表会の旨と時間を伝えており、参加者４名のうち３名の保護者が発表会に参加することとなった。学習成果発表会では、まず博物館で取り組んだ『学習ノート』の問題集の答え合わせから行った。問題ごとに挙手をし、口頭で発表するというものであったが、すべての問題で参加者全員の手があがり、臆することなく元気よく正解を発表してくれた。答え合わせの次は、「わたしの夢のミュージアム」の発表となり、ここではパートナーである学生に該当のページを持ってもらいながら、用意していた発表原稿文を手に、保護者に向けて発表を行った。１年生や３年生とは思えない、しっかりとした発表と個性豊かなミュージアムの紹介に保護者からは拍手が送られた。参加者の発表が

学習成果発表会の様子

終わると、今度は参加者のパートナーである学生、そして保護者からの口頭で感想を発表してもらった。学生は参加者がいかにワークショップに頑張って取り組んだかを保護者に知らせ、保護者からは普段とは違った参加者の学習姿勢への感動と学生への感謝の言葉が送られた。学生や保護者からの言葉に、参加者は気恥ずかしそうにしながらも満面の笑みをたたえていたのが印象深い。

プログラムに参加しての感想は参加者が書いた『学習ノート』内の感想・メッセージと同様のシートを保護者にも配布し回収した。ワークショップに参加した学生たちの満足度も高かった。

参加者と保護者による感想

＜参加者＞

・今日はたのしかったです（３年生）
・コークスがずっとつづいててびっくりした（１年生）
・一番のりだったからうれしかったです（３年生）
・たのしかった（１年生）

＜保護者＞

・普段、触れ合うことのない大学生のお姉さんと組んでの作業に笑顔がはじけていました。異世代の人たちの前での発表もよい経験になったと思います。貴重な体験のできる機会をありがとうございました。
・今日は、よい機会をいただきありがとうございました。子ども達の学ぶ姿勢（走りまわりながらも）調べることの楽しさを体験する事が出来て、とても良かったと思います。また、発表もすばらしく、全く知らない人の前で緊張するのかと思っていましたが、みんなとても上手でした。本日は本当にありがとうございました。
・家庭では見られない息子の一面が見ることが出来ました。調べたりすることはとても好きな子ですが、人前での発表が苦手な面があったので、りっぱに発表している息子を見て感動致しました。すばらしい時間をありがとうございます。

ｖ）報告：博物館教育普及活動の宣伝と課題と改善

ワークショップが終了すると、その日のうちに主担当あるいは副担当が、実施したワークショップの館外に向けた報告を行う。ワークショップの概要と写真を、博物館ホームページ（図６）やFacebook（図７）で公開するのだ。この報告は博物館の教育普及活動の宣伝も兼ねている。

主担当は後日、これとは別に館内向けのワークショップの実施報告書（図８）を作成する。実施報告書では、プログラムの内容（実施日、会場、申込人数、

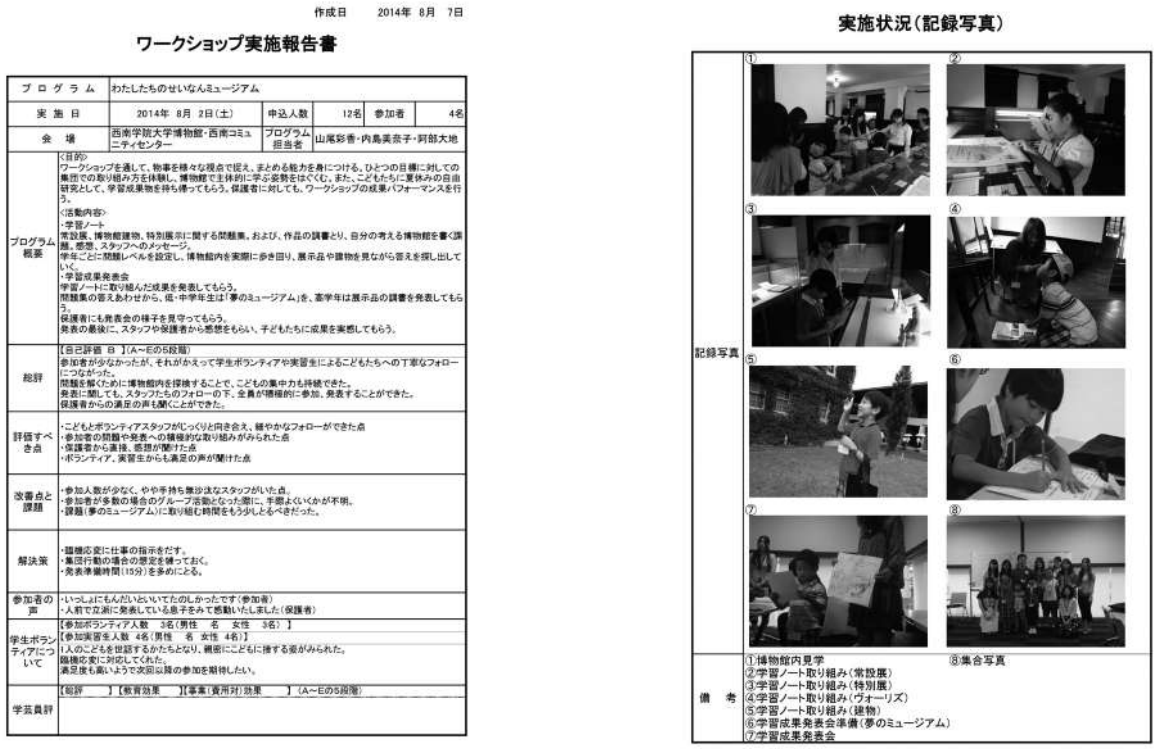
図６　西南学院大学博物館ホームページでの報告

図７　西南学院大学博物館Facebookでの報告

参加人数、プログラム担当者)、概要、プログラムを終えての自己評価と総評、評価すべき点、改善点と課題、解決策、参加者の声、学生ボランティアについて、学芸員評、記録写真といった項目が設けられている。実施報告書を通して全体の振り返りをすることで課題と改善点が見えてくる。これらの情報は今後のワークショップづくりには欠かせないものだ。そのため、実施報告書は博物館職員であれば誰でも閲覧できるシステムがとられている。ワークショップの担当者はプログラムをより良いものとするために、これらの過去の実施報告書などをもとに、次のワークショップづくりに励むのだ。その年度に開催したワークショップは、次年度に発行される『西南学院大学博物館年報』にてもまとめて報告される。ここまでが西南学院大学博物館におけるワークショップの一連の流れとなる。

3. 課題と展望

2010年度より開始されたせいなんこどもワークショップは、当時の臨時職員(在学生アルバイト)の要望によって始められたものだった。それから毎年、博物館で働く学生たちが入れ替わろうともワーク



作成日　2014年 8月 7日

ワークショップ実施報告書

プログラム	わたしたちのせいなんミュージアム				
実施日	2014年 8月 2日(土)	申込人数	12名	参加者	4名
会場	西南学院大学博物館・西南コミュニティセンター	プログラム担当者	山尾彩香・内島美奈子・阿部大地		
プログラム概要	〈目的〉 ワークショップを通して、物事を様々な視点で捉え、まとめる能力を身につける。ひとつの目標に対しての集団での取り組み方を体験し、博物館で主体的に学ぶ姿勢をはぐくむ。また、こどもたちに夏休みの自由研究として、学習成果物を持ち帰ってもらう。保護者に対しても、ワークショップの成果パフォーマンスを行う。 〈活動内容〉 ・学習ノート 常設展、博物館建物、特別展示に関する問題集。および、作品の調査とり、自分の考える博物館を書く課題、感想、スタッフへのメッセージ。 学年ごとに問題レベルを設定し、博物館内を実際に歩き回り、展示品や建物を見ながら答えを探し出していく。 ・学習成果発表会 学習ノートに取り組んだ成果を発表してもらう。 問題集の答えあわせから、低・中学年生は「夢のミュージアム」を、高学年は展示品の調査を発表してもらう。 保護者にも発表会の様子を見守ってもらう。 発表の最後に、スタッフや保護者から感想をもらい、子どもたちに成果を実感してもらう。				
総評	【自己評価 B 】(A～Eの5段階) 参加者が少なかったが、それがかえって学生ボランティアや実習生によるこどもたちへの丁寧なフォローにつながった。 問題を解くために博物館内を探検することで、こどもの集中力も持続できた。 発表に関しても、スタッフたちのフォローの下、全員が積極的に参加、発表することができた。 保護者からの満足の声も聞くことができた。				
評価すべき点	・こどもとボランティアスタッフがじっくりと向き合え、親やかなフォローができた点 ・参加者の問題や発表への積極的な取り組みがみられた点 ・保護者から直接、感想が聞けた点 ・ボランティア、実習生からも満足の声が聞けた点				
改善点と課題	・参加人数が少なく、やや手持ち無沙汰なスタッフがいた点。 ・参加者が多数の場合のグループ活動となった際に、手際よくいくかが不明。 ・課題(夢のミュージアム)に取り組む時間をもう少しとるべきだった。				
解決策	・臨機応変に仕事の指示をだす。 ・集団行動の場合の歌詞を練っておく。 ・発表準備時間(15分)を多めにとる。				
参加者の声	・いっしょにもんだいといいてたのしかったです(参加者) ・人前で立派に発表している息子をみて感動いたしました(保護者)				
学生ボランティアについて	【参加ボランティア人数　3名(男性　名　女性　3名) 】 【参加実習生人数　4名(男性　名　女性　4名)】 1人のこどもを世話するかたちとなり、親密にこどもに接する姿がみられた。 臨機応変に対応してくれた。 満足度も高いようで次回以降の参加を期待したい。				
学芸員評	【総評　　】【教育効果　　】【事業(費用対)効果　　】(A～Eの5段階)				

実施状況(記録写真)

記録写真	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧
備考	①博物館内見学 ②学習ノート取り組み(常設展) ③学習ノート取り組み(特別展) ④学習ノート取り組み(ヴォーリズ) ⑤学習ノート取り組み(建物) ⑥学習成果発表会準備(夢のミュージアム) ⑦学習成果発表会 ⑧集合写真

図８　ワークショップ実施報告書

ショップは引き継がれ、毎回の担当者ごとに趣向を凝らしたものが今日まで開催されてきた。このことは西南学院大学博物館が積極的に取り組んでいる「実践力がある博物館職業人の育成」の一助となっているといえるだろう。大学博物館の使命のひとつである学生のための在り方にも準ずるものでもある。また、担当者が統一されないゆえに、担当者の特色に沿った個性豊かなワークショップが行われる利点もある（付録参照）。

一方で、課題として浮きあがるのは、ワークショップの担当者が入れ替わりの激しい学生アルバイトであることから、各ワークショップの内容に関するレベルが一定を保てないことである。何をもって行われたワークショップを評価するのかにより、基準となるレベルも決まるが、この場合、ワークショップが目指すべき3つの要素が鍵となるだろう。すなわち「コンセプト：楽しみながら学べる」、「目的：西南学院の理解、大学博物館への親近感、展示への関心づくり」、「特色：キリスト教文化、教育文化、地域文化、西南学院史等」だ。この認識の徹底が現状ではなされていないといえる。

ワークショップの企画運営など、新規の学生アルバイトのほとんどが未経験である。そのため、まずワークショップ経験者が主担当となったワークショップの副担当につき、ある程度のノウハウをそこで学ぶこととなる。ワークショップ準備マニュアルも存在し、ワークショップのすべての企画には学芸員のチェックもはいる。しかし、それらの指導の中でこれまでワークショップの目指す方針が十分に共有されていたかといえば否であった。指導係となる主担当者が統一されていないうえ、主担当者自身もまた、明確な方針を十二分に理解しないまま引き継いできたためだ。その主な原因は、教育普及活動におけるワークショップの方針が博物館の共通意識として浸透していないことがあげられる。雇用形態上、長期間の統一指導者を設けることが難しい現状で、そういった意味でも、ワークショップの方針と具体的な運用方法を提示する意義が本稿にはある。

また、一部例外はあるもののこれまでのワークショップは小学生のみを対象としたものに限定されてきた。本稿では紹介していないが、2016年度に試験的に行われた一般向けのワークショップ（2016年10月開催「博多おきあげをつくろう」）での参加者アンケートでは、大人向けのワークショップ開催の要望が多くみられた。今後は、小学生のみではなく一般を対象としたワークショップの導入を本格的に検討するべきだろう。

また、博物館への親しみを促す学生向けのイベントの必要性も高まってきている。限られた一部の学生しか参加できないボランティア形式にとどまるのではなく、学生のための大学博物館の存在意義と周知をはかるためにも、対策を講じていく必要があろう。その際にはより発展したワークショップを実現するためにも、これまでの蓄積を形にした本稿が少しでも後進の役に立てばと願うものである。

なお、本稿は、西南学院大学博物館が申請した本学教育研究推進機構学内GP（グッド・プラクティス、研究推進助成）「大学博物館における高度専門職学芸員養成事業」の成果の一部である。

末筆ではありますが、これまで博物館の教育普及活動に携わっていただきました関係者および参加者の皆様に記して感謝の意を表します。

付録１．2010 ～ 2015年度 せいなんこどもワークショップ

2010年度から2015年度までで、博物館で開催されたワークショップは以下の通りである。とくに明記がない場合、参加者は事前募集で募った小学生が対象となる。計28回に及ぶワークショップが開催され、そのうち中止となったものはない。

2010年度　第１回～第６回

第１回「西新の歴史マップを作ろう」

日　時：2010年10月30日（土）
　　13時～ 16時30分（３時間30分）
目　的：地域の歴史文化を学ぶ
参加者：12名、保護者１名
学生ボランティア：８名
内　容：①西新地区の名所旧跡を散策：西南学院大学１号館内元寇防塁、元寇防塁、防塁神社、ちんちく堀、猿田彦神社（神社参拝の指導）、紅葉八幡宮、西新商店街、勝鷹神社
　　②２グループに分かれて白地図に西新の歴史マップを作成
　　③グループ発表

第２回「音楽とお話に親しもう」

日　時：2010年11月13日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴特別展「海を渡ったキリスト教」関連イベント
　　⑵キリスト教文化（音楽）と親しむ
参加者：14名
学生ボランティア：４名
内　容：①学芸員による特別展のギャラリートーク
　　②クリスマス音楽の合唱
　　③西南学院大学応援指導部吹奏楽団によるサックス演奏と演奏体験
　　④大学音楽主事によるパイプオルガンの演奏体験

第３回「クリスマスのグリーティングカードを作ろう」

日　時：2010年12月11日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：キリスト教の文化・行事（クリスマス）と親しむ
参加者：21名
学生ボランティア：15名
内　容：①大学宗教主事によるクリスマスの講話
　　②クリスマスカード（クリスマスツリーが飛び出す仕組み）の作成

第４回「お正月について学ぼう！
　　留学生のお兄さんお姉さんと餅つきをしよう」

日　時：2011年１月８日（土）14時～ 16時（２時間）
目　的：⑴日本の文化・行事（正月）に親しむ
　　⑵留学生との交流
　　参加者：20名、保護者９名
　　学生ボランティア：２名
内　容：①学芸員による正月の講和
　　②留学生別科の学生との餅つき（もち米、古代米）体験
　　③餅の成形、実食

第５回「鬼の面をつくろう」

日　時：2011年２月５日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：日本の文化・行事（節分）に親しむ
参加者：14名
学生ボランティア：11名
内　容：①大学非常勤講師（民俗学）による節分の講和
　　②鬼のお面をつくる
　　③豆まき体験

第６回「おひなまつりをしよう」

日　時：2011年３月12日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：日本の文化・行事（ひなまつり）に親しむ
参加者：11名
学生ボランティア：４名
内　容：①博物館職員による雛祭りの講話
　　②貝合わせを模した絵合わせカードづくり
　　③貝合わせ大会

2011年度　第７回～第12回

第７回「船のペーパークラフトをつくろう」

日　時：2011年６月25日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：⑴特別展「天草－祈りの原点とキリシタン文化－」関連イベント

⑵日本の船と南蛮船（西洋諸国の船）との違いを知る

参加者：23名

学生ボランティア：８名

内　容：①博物館職員による特別展のギャラリートーク

②南蛮船のペーパークラフト作成

第８回「ドージャー探検隊!－十字架のありかを探せ－」

日　時：2011年８月27日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：クイズを通して展示品への興味・関心を引き出す

参加者：26名

学生ボランティア：９名

博物館実習生：５名

内　容：①十字架の図像をもつ展示品にまつわるクイズと館内マップがかかれたワークシートをたよりに、クイズにあげられている十字架の図像をもつ展示品を探しながら、グループごとに博物館内を見学し、クイズを解く

②２階講堂において、博物館実習生によるクイズの答え合わせと解説

③ドージャー探検隊のメダルとして参加者の名前入りの缶バッジを記念に渡す

第９回「せいなんミュージアムカードをつくろう」

日　時：2011年９月17日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：⑴博物館内の展示品を観察し、そこでの小さな気づきや発見の喜びを絵手紙にして誰かに伝える

⑵博物館や展示に親しみを持ってもらう

参加者：30名

学生ボランティア：８名

内　容：①グループに分かれ、学生ボランティアによる展示品等のギャラリートーク

②展示品のスケッチ

③絵手紙の作成”

第10回「みんなで仮装しよう！
－ミュージアムでハロウィンを－」

日　時：2011年10月８日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：ハロウィンを通して、キリスト教やケルトの人々の文化を体験する

参加者：35名

学生ボランティア：10名

内　容：①ハロウィンについての講話（歴史、由来、ジャック・オ・ランタンの紙芝居、仮装をする意味）

②ハロウィン仮装の衣装づくり（黒のビニール、画用紙、折り紙、スパンコールなどの材料を使って帽子や衣装を作成）

③Trick or Treatという習慣の由来と意味の説明

④作成した衣装を着用し、博物館内で「Trick or Treat」を体験（お菓子をもってスタッフが待機している３か所を探して回る）

第11回「松ぼっくりでクリスマスツリー！」

日　時：2011年12月10日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：クリスマスのお話や、クリスマスツリー製作を通して、クリスマスの文化に触れその意味を知ってもらう

参加者：28名

学生ボランティア：10名

内　容：①クリスマスの講話（サンタクロースの紙芝居、クリスマスツリーのオーナメントについてのパネル解説）

②松ぼっくりクリスマスツリーの作成（松ぼっくりに綿やスパンコールの装飾）

③クリスマスツリーを飾る台紙（色画用紙）の作成

第12回 「2000年前の生活体験ー勾玉をつくろうー」

日　時：2012年３月３日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：古代の服飾文化について学ぶ

参加者：39名

学生ボランティア：８名

内　容：①2000年前の人々の服飾についてのクイズ
②勾玉作成（滑石を紙やすりで削り成形する）

2012年度　第14回～第16回

第14回「みんなのせいなんすいぞくかん」

日　時：2012年９月29日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：⑴博物館実習成果展「ギョギョギョ西南☆海ステリー博」関連イベント
⑵シルエットのみという自由度の高いぬりえを通して、子どもたちの想像力を刺激し、表現する面白さを感じてもらう
⑶展示に関連した魚のシルエットを使うことによって展示への興味関心を促す

参加者：小学生23名

学生ボランティア：８名

博物館実習生：９名

内　容：①博物館実習生による実習成果展の案内
②シルエットぬりえに自由に色を塗り、オリジナルの魚を考える
③塗り終わった魚を台紙にはり「せいなんすいぞくかん」を作成
④各自のぬりえの中から魚を一匹選び「みんなのせいなんすいぞくかん」のパネルを作成

第15回「せいなんウォークラリー」

日　時：2012年11月17日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：⑴大学博物館の建物や展示に関するクイズを解きながら館内を見学することで、普段はなかなかじっくり観察することのない資料や建物、博物館という施設について興味をもってもらう
⑵グループで行動することで普段接することのない他学年・学校の児童とのコミュニケーションも楽しんでもらう

参加者：10名

学生ボランティア：７名

博物館実習生：１名

内　容：①グループごとに館内をウォークラリー（館内の展示・建物にまつわるクイズとヒント、自由記述用のカードを配布）
②クイズの答え合わせと解説
③ウォークラリーバッチの進呈

第16回「粘土をつかった古代モノづくり」

日　時：2012年12月１日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：スタッフの専門性を活かし、考古学、古代史を身近に触れてもらう

参加者：21名

内　容：①古代のモノづくりの講話（土器の用途、製作工程など）
②粘土を使ったモノづくり体験

2013年度　第17回～第21回

第17回「せいなんウォークラリー」

日　時：2013年５月18日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：⑴博物館、大学の魅力にも興味をもってもらう
⑵他校・他学年の児童と同グループで行動する事で様々な人と協力をするということを学ぶ

参加者：15名

学生ボランティア：９名

内　容：①グループごとにキャンパス内をウォークラリー（地図、クイズカード、自由記述用のカードを配布）
②クイズの答え合わせと解説
③ウォークラリーバッジの進呈

第18回「万華鏡をつくろう」

日　時：2013年７月20日（土）10時～ 12時（２時間）

目　的：⑴特別展「平戸松浦家の名宝と禁教政策」関連イベント

⑵万華鏡という実例を通して海を通して諸外国から日本に入ってきた文化を日本が受け入れ活用していたことを学ぶ
⑶スケッチを通しての展示資料の観察
⑷鏡の反射の仕組みを体験する

参加者：29名
学生ボランティア：７名
内　容：①万華鏡についての概説
②博物館職員による特別展、常設展のギャラリートーク
③万華鏡の軸紙（博物館オリジナル）に展示資料のスケッチ
④万華鏡の作成

第19回「カリグラフィーをかこう」

日　時：2013年９月７日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴博物館実習成果展「海の玉手箱展」関連イベント
⑵常設展示室の写本や外国語への興味関心を促す

参加者：28名
学生ボランティア：３名
博物館実習生７名
内　容：①実習生による実習成果展と博物館職員による常設展示室のギャラリートーク
②手作り本の作成（ローマ字で名前を書く）

第20回「大学博物館まるごとツアー」

日　時：2013年11月９日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴博物館と聖書植物園の資料、植物の観察
⑵キリスト教についての知識を深める
⑶他学年、他学校とのコミュニケーションづくり

参加者：12名
学生ボランティア：３名
内　容：①グループごとに館内と植物園内をスタンプラリー（スタンプカード、スタンプ設置場所のヒントシートを配布）
②スタンプを設置した展示資料の解説
③集めたスタンプのワードを並べ替えてキーワードを完成させる

第21回「イースターエッグをつくろう」

日　時：2014年３月８日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：キリスト教文化（イースター）を学ぶ
参加者：24名
学生ボランティア：１名
内　容：①イースターについての講話
②イースターエッグづくり（お絵かき用のエッグ型にデザイン、着色）

2014年度　第22回～第25回

第22回「バッチをつくろう！－草花のかんさつ－」

日　時：2014年５月17日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴聖書植物園を、聖書を学びながら春の季節も体感する
⑵留学生による異文化交流（ドイツ文化）

参加者：13名
学生ボランティア：４名
留学生：１名
内　容：①聖書に登場する植物のレクチャー
②聖書植物園の散策（クイズシート配布）
③留学生によるドイツ文化の紹介
④記念缶バッチ作成

第23回「わたしたちのせいなんミュージアム」

日　時：2014年８月２日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴特別展「海路―海港都市の発展とキリスト教受容のかたち―」
⑵博物館で主体的に学ぶ姿勢をはぐくむ
⑶物事を様々な視点で捉え、まとめる能力を身につける
⑷参加者だけでなく保護者にもワークショップの成果を実感してもらう
⑸博物館実習生への実践的教育

参加者：４名
学生ボランティア：３名
博物館実習生：４名

内　容：①学習ノートを配布し、ボランティアや実習生とともに博物館内を探索し問題を解いて回る。
②学習成果発表会（学習ノートに取り組んだ成果を保護者の前で発表）
③学生ボランティア、実習生、保護者からメッセージ

第24回「ヘブライ語でうたってみよう」

日　時：2014年11月15日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴特別展「ジュダイカ・コレクションⅢ 祈りの継承－ユダヤの信仰と美術－」関連イベント
⑵ユダヤ教（旧約聖書）の文化に親しむ
参加者：２名
内　容：①ユダヤ教についての学習（ユダヤ教について、大学院生によるヘブライ語クイズ）
②特別展見学
③ヘブライ語での合唱（マイムマイム）”

第25回「しおりをつくってみよう」

日　時：2015年３月14日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴「しおり」という本にまつわる道具の製作を通し、本がなんのためにあるのかを学ぶ
⑵博物館が所蔵する本に注目した見学を行うことで、展示見学の際に意識する視点を学ぶ
参加者：10名
内　容：①本に関するクイズ形式の講話（本の機能、博物館にある本の紹介、しおりの成り立ち）
②博物館の「本」さがし（問題シートの配布。博物館見学。お気に入りの本探し）
③オリジナルしおりづくり（消しゴムスクラッチによるオリジナルしおりの制作）

2015年度　第26回～第28回

第26回 せいなん+とうほく「東北の”すべらない話”」

日　時：2015年７月５日（日）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴大学博物館共同企画特別展「Nexus」関連イベント
⑵東北の学生との交流を通して復興の続く東北の姿に触れる機会を提供する
⑶大学博物館が合同で開催することによって、ワークショップをひとつの学生交流の機会とする
形　態：自由参加制
参加者：６名
東北学院大学博物館学生スタッフ：４名
内　容：①スタンプラリー形式で、東北学院大学博物館のブース（２か所）と西南学院大学博物館のブース（１か所）をまわる
②東北学院大学博物館ブース⑴東北の祭りである金魚ねぶたを紹介し、金魚ねぶたづくりを体験⑵東北地図のパズルを解きながら、各県の特産物や位置を知ってもらう
③西南学院大学博物館ブース：七夕にちなんだ飾り絵馬づくり

第27回「マーブル紙をつくろう」

日　時：2015年８月29日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴博物館実習成果展「ユダヤの信仰と動物」関連イベント
⑵水や色、絵の具の性質を体感する
参加者：９名
博物館実習生：５名
内　容：①学芸員課程の実習生が進行の主体となって様々な紙にマーブリングを施す
②マーブル紙が乾く間、実習生による実習成果展の案内

第28回「拓本をとろう！」

日　時：2015年11月28日（土）10時～ 12時（２時間）
目　的：⑴特別展「南蛮－NAMBAN－昇華した芸術」関連イベント
⑵博物館が所蔵展示する拓本に興味関心を促す

⑶学芸員の調査・保存・収集活動の一端を知ってもらう
⑷留学生との交流
参加者：６名
留学生：２名
内　容：①拓本のやり方の説明と実演
②葉、松かさ、硬貨などを拓本
③博物館職員による特別展のギャラリートーク

付録２．2014～2015年度 せいなんおでかけワークショップ

「せいなんおでかけワークショップ」は2014年度より産官学連携事業の一環として開始された館外で開催されたワークショップである。こちらの詳細はまた別の機会に報告できたらと考えている。

2014年度　第１回～第５回

第１回「バッチ作りにちょうせん！」
日　時：2014年8月5日（火）14時～16時（2時間）
場　所：長崎県南島原市西有家図書館
目　的：⑴産官学連携の特別展示「海路―海港都市とキリスト教受容のかたち―」の一環事業
⑵図書館の活用促進
参加者：24名
内　容：①図書館からバッチに使う資料（本）を借りてくる
②バッチ制作

第２回「ポルトガル船づくりに、ちょうせん！」
日　時：2014年８月６日（水）10時～12時（２時間）
場　所：長崎県南島原市有家図書館
目　的：⑴産官学連携の特別展示「海路―海港都市とキリスト教受容のかたち―」の一環事業
⑵日本近世において外国から来た船がもたらしたもの、その役割などを楽しみながら学ぶ
参加者：33名
内　容：①南島原市教育委員会職員によるポルトガル船についての講話（資料配布）
②ポルトガル船のペーパークラフト作成

第３回「地球儀を作ってみよう！」
日　時：2014年８月６日（水）14時～16時（２時間）
場　所：長崎県南島原市原城図書館
目　的：⑴産官学連携の特別展示「海路―海港都市とキリスト教受容のかたち―」の一環事業
⑵世界地図等と比較しながら、人々がいかなる「世界」を見ていたのかを、制作を通して学び考えてもらう
参加者：23名
内　容：①南島原市教育委員会職員による天正欧遣少年使節についての講話
②地球儀のペーパークラフトに日本や好きな国、知っている国などに色を塗る
③地球儀のペーパークラフト作成

第４回「天草四郎をエコ・デコレーション in 原城図書館」
日　時：2014年11月15日（土）10時～12時（２時間）
場　所：長崎県南島原市原城図書館
目　的：⑴産官学連携サテライト展示「島原・天草一揆の実像と記録」の一環事業
⑵展示中の「天草四郎肖像」をモチーフとした作品づくりを通して、天草四郎や、島原・天草一揆への興味関心を促す
参加者：34名
内　容：①南島原市教育委員会職員による島原・天草一揆についての講義
②天草四郎をエコ・デコレーション（Ａ０のシートに印刷された天草四郎のイラスト（２種類）をもとに、こどもたちが各パーツを担当し、いらなくなったチラシやポスターなどを使って貼り絵、デコレーションを行う）
③完成後、図書館内にて展示

第５回「天草四郎をエコ・デコレーション
in 天草キリシタン館」

日　時：2015年３月15日（日）10時～ 12時（２時間）
場　所：長崎県南島原市天草文化交流館
目　的：⑴産官学連携の特別展「西南学院大学博物館コレクション展Ⅰ」（開催：天草キリシタン館）の一環事業
⑵展示中の「天草四郎肖像」をモチーフとした作品づくりを通して、天草四郎や、島原・天草一揆への興味関心を促す
参加者：12名（保護者含む）
内　容：①天草キリシタン館学芸員による天草キリシタン館講義
②天草四郎をエコ・デコレーション
③完成後、天草キリシタン館にて展示

2015年度　第６回～第10回

第６回　「せいなん+とうほくこどもワークショップ
in 東北学院大学博物館」

日　時：2015年７月11日（土）10時～ 12時（２時間）
場　所：東北学院大学博物館
目　的：（１）大学博物館共同企画特別展「Nexus」関連イベント
（２）東北学院大学博物館で行われているワークショップの実見と学生交流
形　態：自由参加制
参加者：53名（保護者含む）
内　容：①東北学院大学博物館の駐車場にテントを設置。西南２ブース（センス、絵馬）東北２ブース（金魚飾り、拓本）。机と椅子を並べて、受付が終了したこどもから好きなブースでワークショップ。作業がおわるとスタンプを押して次のブースへ。
②「おもしろセンス」センスキットをつかって、センスを手作りする。羽の部分は自由にお絵かきをする。
③「飾り絵馬づくり」仙台七夕にあわせて、厚紙製の絵馬に願い事を書き、好きな紐を通して完成。

第７回　「手作りカルタでご紹介！
～わが家オススメの一冊～」

日　時：2015年７月19日（日）10時40分～ 12時（２時間40分）
場　所：長崎県南島原市有家図書館（ありえコレジョホール）
目　的：（１）官学連携事業の一環として南島原市教育委員会主催「おはなしカーニバルin南島原」への参加
（２）図書館の活用促進
形　態：自由参加制
参加者：15名（大人含む）
内　容：①図書館の案内のもと、おすすめの本を一冊借りる
②借りてきた本の紹介シートを作成
③紹介する本にちなんだカルタ（絵札、読み札）を作成
④作成したカルタでカルタ取り遊び

第８回　「世界にひとつだけ！
オリジナル缶バッチをつくろう」

日　時：2015年８月２日（日）　10時～ 12時（２時間）
場　所：長崎県南島原市有家図書館（ありえコレジョホール）
目　的：（１）官学連携事業の一環として「南島原市から世界遺産を」運動への参加
（２）文化財への興味関心づくり
参加者：33名
内　容：①南島原市教育委員会世界遺産登録推進室の職員によるこども向け講義
②オリジナル缶バッチの作成：デザインシートにお絵かきした後、その中からふたつを選んでもらい缶バッチにする。

第９回　「親子でつくろう！オリジナル万華鏡」

日　時：2015年８月２日（日）　13時30分～ 15時30分（２時間）
場　所：長崎県南島原市口之津図書館

目　的：（１）官学連携事業の一環としてのイベント開催
（２）図書館の活用促進
参加者：34名（保護者含む）
内　容：①図書館の案内のもと、おすすめの本を借りる
②万華鏡の軸紙シートに借りてきた本のお絵かきをする
③万華鏡の作成

第10回　「世界にひとつだけ！オリジナル缶がバッチをつくろう！」

日　時：2015年９月26日（土）10時～ 12時（２時間）
場　所：長崎県南島原市原城図書館
目　的：（１）産官学連携の特別展「東西交流の軌跡」（開催：有馬キリシタン遺産記念館）の一環事業
（２）上記特別展関連展示会場での学びの提供
参加者：14名
内　容：①南島原市教育委員会世界遺産登録推進室の職員によるギャラリートーク
②オリジナル缶バッチの作成：デザインシートにお絵かきした後、その中からふたつを選んでもらい缶バッチにする。

註

1　駒見和夫『博物館教育の原理と活動－すべての人の学びのために－』学文社、2014、36頁
2　１章「生涯教育の定義」
3　神野善治ほか『ミュージアムと生涯学習』武蔵野美術大学出版局、2008、32頁
4　2004（平成16）年に旧本館・講堂が「福岡市指定有形文化財」、「保存建物」に指定され、2014（平成27）年に「福岡県指定有形文化財」（建造物）に指定された。

参考文献

安髙啓明ほか『西南学院大学博物館事業報告Ⅰ　大学博物館連携事業―官学・産官学連携事業報告書―』西南学院大学博物館、2015
駒見和夫『博物館教育の原理と活動－すべての人の学びのために－』学文社、2014
高倉洋彰・安髙啓明編『日中韓博物館事情－地域博物館と大学博物館－』雄山閣、2014
加藤里美『國學院大學学術資料センター研究報告第30輯2014年３月』「大学博物館としての教育普及プログラムの試み―ミュージアムトークからワークショップ「探検！ミュージアム」まで―」2014
栗田信司『大学改革と生涯学習：山梨学院生涯学習センター紀要第17号』「生涯学習としての「博物館における教育普及活動」」2013
小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄編『博物館教育論　新しい博物館教育を描きだす』ぎょうせい、2012
寺島洋子『博物館教育論』放送大学教育振興会、2012
神野善治ほか『ミュージアムと生涯学習』武蔵野美術大学出版局、2008
栗田信司『大学改革と生涯学習：山梨学院生涯学習センター紀要第17号』「生涯学習としての「博物館における教育普及活動」」2013

山尾　彩香（やまお　あやか）　　西南学院大学博物館学芸研究員

福岡市西区の草場古墳群採集の須恵器片

秋田　雄也

1. はじめに

福岡市西部に広がる早良平野は古代から脈々と人類の歴史が受け継がれ、国内外の人々の交流の拠点であった。現在の早良平野は古代の人々の歴史の積み重ねの上に成り立っている。地域に根付く博物館にとって地域史は非常に重要な研究課題である。古墳時代後期に当たる6世紀後半の代表的な古墳である福岡市西区所在の草場古墳群において、2014年に筆者が採集した須恵器片の資料紹介を行う。

2. 地理的概要と考古学的環境

草場古墳群（福岡市西区）は長垂山から伸びる丘陵の尾根線上や裾部に位置する後期群集墳であり、付近の金武・羽根戸・野方地域の西側丘陵部には古墳時代を通して古墳が多数分布している。また6世紀後半代から急速に増加する古墳時代後期の群集墳からは鉄滓を供献する例や、広石南古墳群A群のように鍛冶工具を副葬する例もあり、これらの古墳は製鉄工人との関連が窺われる（松村2010）。また、長垂

図1 草場古墳群とその周辺の遺跡 ※国土地理院地図を一部改変して作成

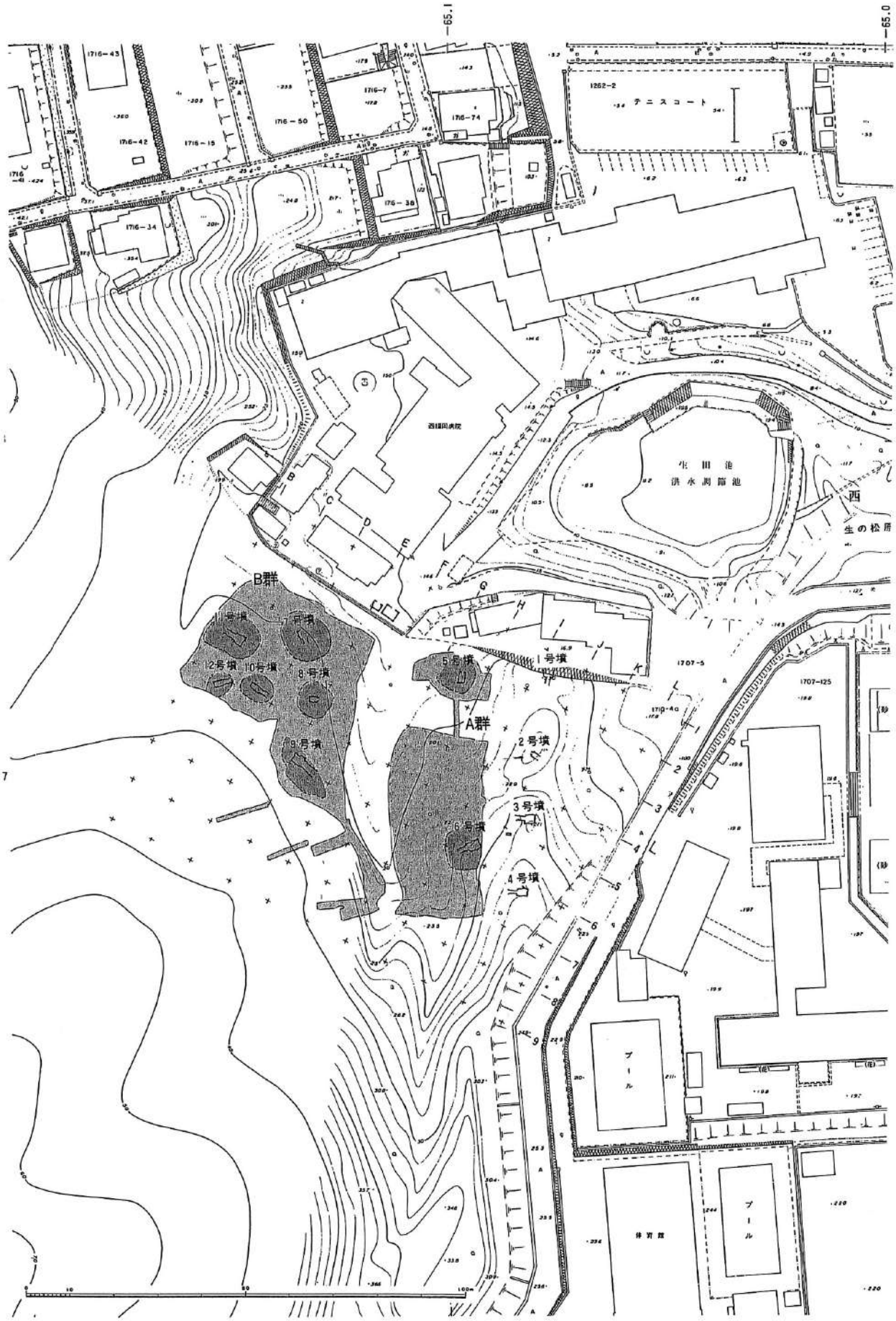


図2 草場古墳群分布状況 出典:(松村2010)

山を挟んだ西側の今宿地域には鋤崎古墳などの前方後円墳が集中している今宿古墳群がある。4世紀から6世紀後半を通して在地集団の系譜をたどる事のできる点で稀な事例である（辻田2013）。周辺には古墳時代の遺跡だけではなく、草場古墳群から南東約300mに斜ヶ浦瓦窯跡があり、「伊貴作瓦」・「警固」などが刻まれた文字瓦が見られ、鴻臚館に使用されたという（松村2010）。なお、近隣には、同時期の城ノ原廃寺も知られている。また海岸近くには弥生時代から古代にかけての生の松原遺跡や下山門遺跡が存在する。中世には元寇防塁が築かれ、現在は生の松原海岸に復元整備されている。

3. 遺跡の概要

草場古墳群は12基からなる古墳群である。長垂山地方に延びる丘陵の尾根上に存在する後期群集墳である。東側をA群、西側をB群としており、主に6世

写真1　1号墳（右）、2号墳（左）　筆者撮影

写真2　3号墳　筆者撮影

写真3　4号墳　筆者撮影

写真4　4号墳石室　筆者撮影

写真5　3号墳石室入口　筆者撮影

写真6　須恵器散布状況　筆者撮影

紀後半から7世紀初頭にかけて構築されたとされている（松村2010）。これまで3次に渡る調査（加藤1992・松村2010）が実施されており、1～4号墳は近くの斜ヶ浦瓦窯跡とともに福岡市指定史跡として保存されている。5～12号墳は、現在住宅地となり消滅した。以下、西陵公園内に保存されている1～4号墳の概要を述べる。

1～4号墳は南から北へ延びる丘陵尾根にほぼ等間隔に並ぶ。4号墳南側は削平され、1号墳墳丘北側は病院建設で切断されて垂直な崖面となっている。

1号墳は方墳で横穴式石室を持つ。A群中、5号墳と同じ最北端部の標高23m付近に位置している。調査以前の段階で墳丘は破壊されているため正確な規模は不明であるが第2次調査報告書（松村2010）によると東西16.7mであり、南北も同規模であるとされている。石室は南側に開口し、羨道部からは須恵器甕・壺・坏などがまとまって出土しており、墳丘祭祀が行われていたと推測できる。

2号墳は歪んだ長楕円形を程している。4つの古墳では一番小規模であり、現在では石室を構成していたと推測される石材の一部が土から顔を出しているだけである。これまで実施の2号墳の調査によると墳丘の全面調査は行っておらず、正確な状況が不明である。なお、遺物は石室内から4点の須恵器（坏身・坏蓋・小型壺・提瓶）が出土している。

3号墳と4号墳は現状では明瞭な区別が難しく、3号墳北側の墳丘裾部が半円状であることから双円墳の可能性も指摘されている（松村2010）。しかし3・4号墳ともに横穴式石室が検出されており、3号墳玄室からは須恵器のほかに刀子・鉄鏃・鉇・鉄斧・金環・水晶切子玉・ガラス小玉が出土している。羨道付近の墳丘からは内部に石が入った須恵器甕が1つ押しつぶされたような状態で出土している。これも1号墳と同様に墳丘祭祀である考えられている。

4号墳は墳形確認のための調査が行われたのみで出土遺物はない。石室は3号墳と同じく西に開口しており、墳丘頂部は削平されている。

4. 採集資料の特徴

草場古墳群において採集した須恵器片は全合計14点である。この内、小片を除く9点を図化した（図3）。なお、図3は断面実測図を挟んで拓本右が内面、左を外面としている。今回検討する須恵器片はいずれも甕の胴部破片である。1～9の全て外面は格子目叩きであり、その中でも1～9の外面は格子目叩きの上にカキメが施されている。1～9の内面は全て青海波叩きが施されており、中でも1・5・6・8・9は青海波叩きの上に横ナデ調整が見られる。またこれらは胎土の特徴や色調から4個体を構成すると考えられる。図4－1を個体A、図4－2・3を個体B、図4－4を個体C、図4－5～9を個体Dとする。5～9は程度に差はあるものの、表面が風化している。

個体A：1は最大長8.5cm・最大幅7.7cmであり、非常に微量ではあるが微小な雲母とガラス質化した石英が胎土に含まれる。

個体B：2の最大長は8.2cm・最大幅は7.6cm、個体B：3の最大長は5.6cm・最大幅は8.2cmである。胎土には微小な雲母とガラス質化した石英が含まれているが雲母の量が個体Aと比べ多い。また、3は内面が焼成時の熱で変形している部分がある。なお、3は2号墳と3号墳に挟まれた場所で採集したものであるが、胎土や色調から個体B：2と同一個体とした。3号墳の墳丘から雨などの影響で流出したと推測される。

個体C：4は1と外面の色調が近いが個体Cの方が暗灰色をしている。4の最大長は4.7cm・最大幅は7.5cmであり、胎土に微小な雲母とガラス質化した石英が含まれており、雲母の量は個体Bとほぼ共通である。

個体D：5～9の胎土は他と同じように微小な雲母とガラス質化した石英を含むが、個体Dは雲母量が他の個体と比べると非常に多い。また、個体D全て外面焼成時に熱で変形した跡が確認出来る。5の最大長は5.9cm・最大幅は6.7cm、6の最大長は6.4cm・最大幅は7.8cm、7の最大長は5.5cm・最大幅は5.5cm、8の最大長は4.2cm・最大幅は7.7cm、9

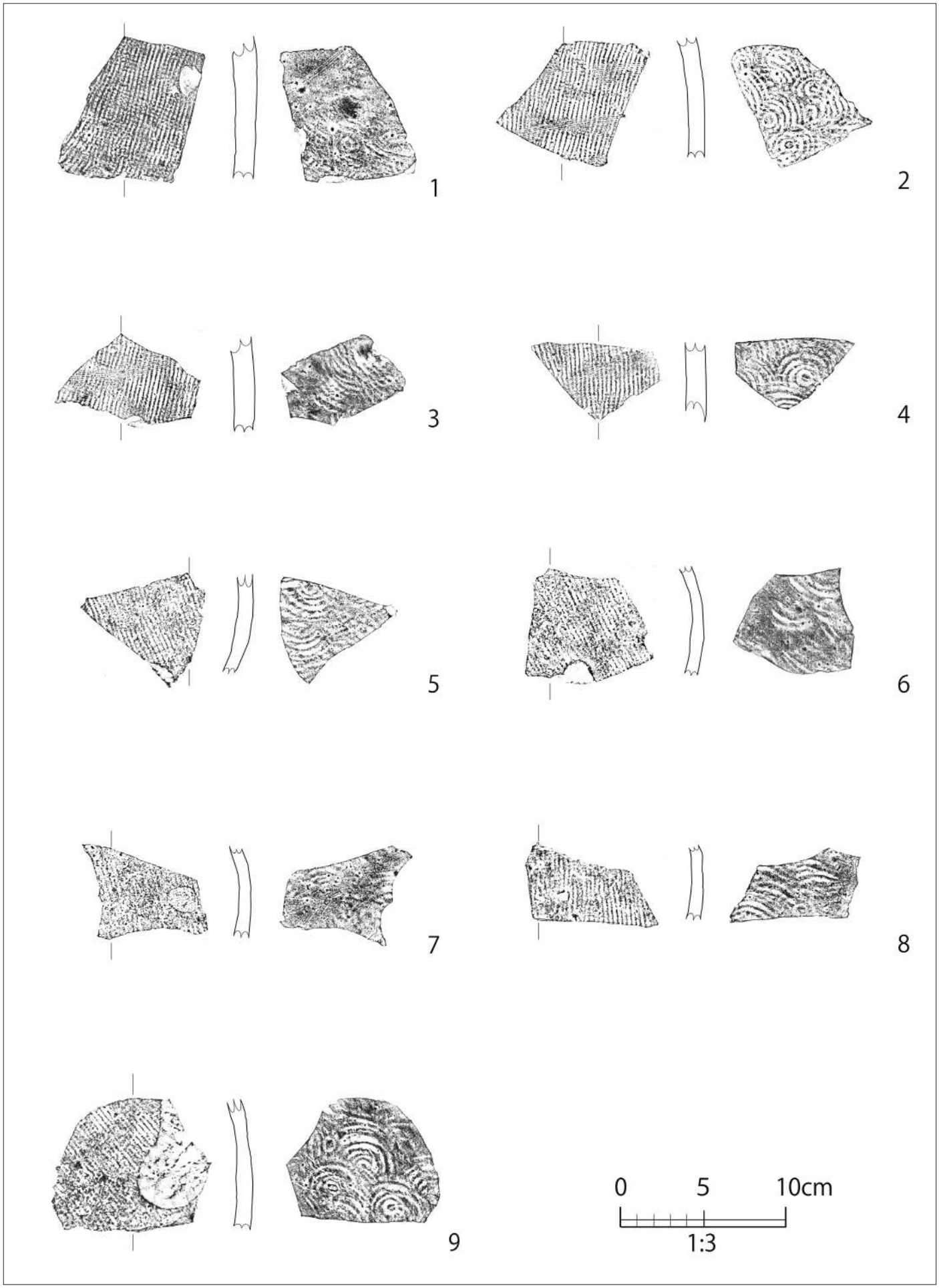


図3 採集須恵器拓本・断面実測図（1/3）　※1が個体A、2・3が個体B、4が個体C、5～9が個体Dである。

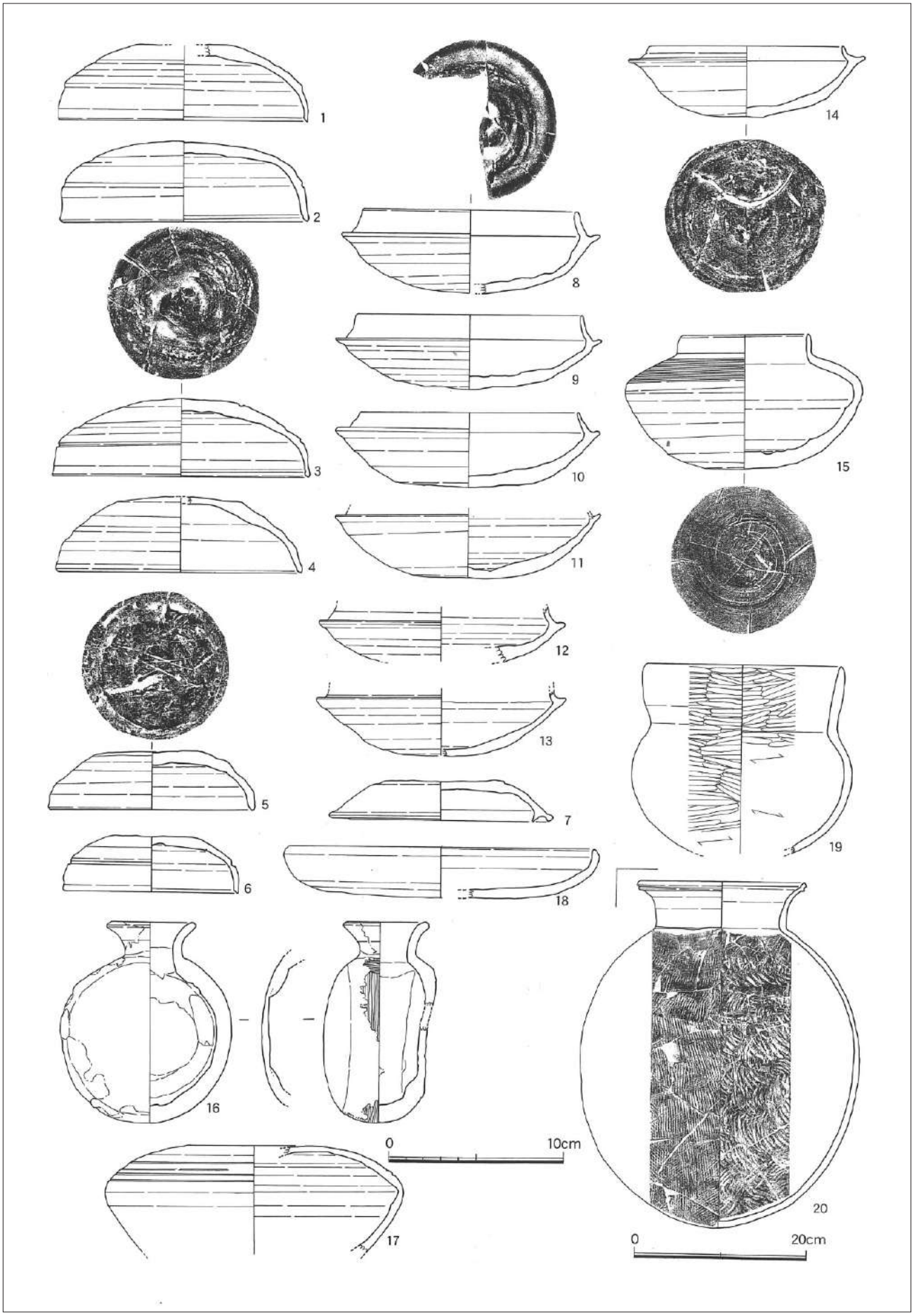


図4 草場古墳群3号墳出土須恵器 出典:(松村2010：25頁)

の最大長は7.9cm・最大幅は9.2cm、である。

5. 考察

今回図化した9点の須恵器甕胴部破片は焼成時に熱で変形したものが多く（特に個体D）、狭い範囲に複数個体の散布を確認した。第2次調査報告書（松村2010）によると、筆者が須恵器を採集した箇所から羨道を挟んで南側に隣接した場所から、墳丘祭祀に使用したと考えられる須恵器甕を1個体検出している。以上のことから今回採集した須恵器甕胴部破片は本来、墳丘祭祀に使用された可能性がある。今回の採集した須恵器は少なくとも4個体であるので、3号墳の墳丘祭祀に使用された須恵器甕は最低4個体以上の可能性がある。

第2次調査報告書（松村2010）によると3号墳出土の須恵器は牛頸窯跡群編年のⅢBを主体としている（図14、松村2010：25頁）。図4の甕20と今回採集した資料の特徴が外内面とも非常に類似している。今回採集した資料には口縁部が含まれていないため胴部からおおよその時期を推測するほかなく、出土状況が3号墳出土の須恵器甕（図4）と類似しており、おそらく同時期だと考えられる。他地域の資料報告においては、1970年刊行『野添・大浦窯跡群』（福岡県文化財報告書第43集）の編年を基礎にした牛頸窯跡群の須恵器編年を基準としている。そこで、これまでの編年研究を基礎に船山良一氏が総括的に牛頸窯跡群出土須恵器の編年を行った『牛頸窯跡群―統括報告書1―』（大野城市文化財報告書第77集）と元にすると、第2次調査報告書（松村2010）3号墳出土のもの須恵器もⅢB期であると考えられる。そのため今回採集した須恵器甕胴部破片はⅢB期（6世紀後半）と推測される。

以上、今回採集した須恵器についてまとめると以下のようになる。

(1)全部で4個体が存在すると考えられる。

(2)燃成時の熱で変形したものが多く、決して良質といえないものが多数である。近隣の須恵器窯との関連性が考慮される。

(3)時期は牛頸窯跡群出土須恵器編年を基準とすると同窯跡群ⅢB期（6世紀後半）と考えられる。

(4)墳丘祭祀に伴う須恵器甕の可能性が考えられる。

6. おわりに

福岡市の油山山麓から西部地域にかけて多くの後期群集墳が存在する。これら6世紀後半から7世紀初頭における古墳群と近隣の須恵器窯跡や製鉄関連遺跡など、周辺の生産遺跡との関連性を探ることで、この時代の後の律令国家形成への道程を明らかにすることをこれからの研究課題としたい。

謝　辞

本報告において常に懇切に指導をしていただいた伊藤慎二先生（西南学院大学国際文化学部准教授）、また、本研究紀要への掲載をお許しいただいた宮崎克則館長（西南学院大学博物館館長兼国際文化学部教授）、内島美奈子先生（西南学院大学博物館学芸員兼国際文化学部助教授）を始めとする西南学院大学博物館のスタッフの方々や、石川蒼氏（國學院大学文学研究科博士課程前期史学専攻）、普段から非常にお世話になっています同期の坂本夏菜氏を始めとする多くの西南学院大学大学院生に多大なる尽力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

なお、今回報告した採集資料は、現在西南学院大学博物館が収蔵保管している。

参考文献

石木秀啓　2011 「筑紫の須恵器生産と牛頸窯跡群」、『古文化談叢』第66集、23－54：頁、九州古文化研究会

小田富士雄・真野和夫編　1970 『野添・大浦窯跡群』、福岡県文化財報告書第43集、福岡県教育委員会

加藤良彦　1992 『草場古墳群―第3次調査報告―』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第301集、福岡市教育委員会

田辺昭三　1981 『須恵器大成』、角川書店

辻田淳一郎2013 「古墳時代」、『新修福岡市史―特別編　自然と遺跡からみた福岡の歴史』、144－147頁、福岡市史編纂室

中村浩　1981 『和泉陶邑窯の研究』、柏書房

中村浩　1993 『古墳時代須恵器の編年的研究』、柏書房

船山良一編　2008 『牛頸窯跡群―統括報告書1―』、大野城市文化財報告書第77集、大野城市教育委員会

松村道博　2010 『草場古墳群2―第2次調査報告―』、福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1104集、福岡市教育委員会

秋田　雄也（あきた　ゆうや）　　西南学院大学博物館学芸調査員

御家言拝見仕候、誠ニ一々的中、時弊、水府公御嘉賞被成候儀御尤ニ奉存候、如斯温厚之君子ニ緩々不得周旋遺憾難尽申候、渾て期御再会而己、今朝御上舟之由、炎暑之候折角御自愛御祗役可被成候、御帰郷之上幸便も御座候ハヽ、何卒鴈魚之信奉願候義御座候、臨筆悵然不能細縷、不一

六月初六日　　向井拝

立野阿大兄

御出立　御乗船

諸役人　天草渡海

見物の男女

望外の奇観

未下刻御本陣を御出立、波戸場にて御乗船也、道筋ハ先日御台場御巡見道也、波戸場ニて御召替船に御乗被遊、阿蘭陀船の廻りを乗廻シ御覧有之、夫より御本船ニ御移り、同所舟泊、阿蘭陀舟と二丁計はなれ船掛りなり、御乗船の時波戸場ニ鍋島家の諸役人、長崎諸役人、御本陣御用達、乙名、細川家の家来、是ハ天草渡海の舟を出せし故也、其外見物の男女、実ニ雲霞の如し、御船え御移被遊候後、為御悦御使者等来ル、今度紅毛船の入津并まの当たり見し事ハ望外の奇観也き、其事委しく書まほしけれと、故ありて爰ニ略ス

遠目鏡にて見る

紅毛人　長崎中の男女

六月六日

向井氏　対面

篤厚の人物

立野先生

て安禅寺の座敷へ通り遠目鏡にて見る、神崎辺より入来る所也、日くれ迄見て帰る、これよりさき午中刻頃、沖ノ番所にて両度石火屋聞へ、一度ニ二挺つゝ打也、暫し有て高木内藏之丞殿やしき中島にて両度打事一度に二挺つゝ打也、右ハ紅毛人入津を知せに打し也、石火矢を打しより町々の乙名なと陣笠等にて波戸場へ相詰、長崎中の男女東西にかけ走りいと騒かし、沖ノ番所、台場等ハ夫々警固厳重に相備候由なれと、此所より遠く隔りたれは見へす

六日

朝間くもりしかまなくはれて、終日くもらす、いと暑し、朝より南風ふきたれとはけしからす、早朝荷物積込致ス、辰上刻向井氏より書面来ル、過日かし遣はせし役義家言を返されたり、辰中刻みつから問来て対面、半時余物語致ス、新渡書籍の事、また大清地誌の事なとを尋ねとひ、おのれ東都の文物の事何くれと語り聞せしに、いたく悦ひおのか丙申凶荒記を草稿せし事なとを語りしに、切に見まほしき由いはれたり、おのか家言同意の趣いひて信用せしよし、其外何くれと物語りかはし名残をしけに帰られたり、向井氏、学問のうへハしれされと、篤厚の人物なる事しるし、おのれへおくられし両度の書面を見てもしらる、後の思ひ出くさに俗文別にめつらしき事ハあらねと、こゝニ記ス

美墨辱拝見仕候、如命酷暑之節御座候処、益御多祥被為成御起居抃喜之至奉存候、扨一昨朝は始而奉接芝眉大慶に過之候、当節厳官御随従之事候得は尊姓名を承知仕候義も不相成、遺憾奉存候処、何と天佑、良縁御細ノ牘被下置、加之御著述ニ得寓目、且御在所并尊族之御志趣をも略得聞し、実望外之大幸、御書中ニて承知仕候処、実用之学を被修候由誠嘉賞之至、深欽仰仕候、季世之弊風諸邦之学者兎角麗文ニ流レ白首迄従事于期仕候ても終ニ無益、国家人民実無用之事、小生尤所不取ニ御座候、種々御著作も有之趣、御敦篤之至感佩仕候、染々不得接高話為恨実深、何卒近年之内当所鎮台ニ御陪遊被成候様奉存候、左御座候へは一ヶ年之間如何様共周旋仕候義相成候得は、必御再遊奉待候、今朝奉行所へ罷出候義有之、何分細縷御答難申上先御請迄、早々閣筆仕候、拝借被仰付候御家言ハ御発駕前迄留置申度候、頓首謹言

六月五日　　向井哲拝復

立野先生

左　右

西御役所
西泊御番所

戸町御番所
鍋島家勤番
石火屋

朝よりくもりしか巳よりはれ、いとあつし、申よりくもりかちなり、朝より東南風ふきたれとはけしからす、辰上刻炉粕町、北馬町、南馬町、勝山町、桜町、豊後町、本興善町、堀町、本博多町、大村町、外浦町、西御役所え御立より、平戸町、樺島町、波戸場、江戸町、出島、阿蘭陀やしきへ御出、江戸町波戸場より御乗船にて西泊御番所御見分、波戸場より廿丁余有、惣外曲輪、弐百廿壱間四尺四寸、但坪数凡三千八百七拾坪、軒数拾八軒也と、少シ入込たる所也、右へ曲り坂を上り左ニ番所二三軒、右ニ武器蔵、十間計うへ二並に四軒、六軒、十弐間、六間、六間、七間位なり、しはし御休あり、船にて戸町御番所へ御渡、戸町御番所総外曲輪百九十間、坪数凡弐千八百四十坪有と、軒数十八軒ありと、当御番所共、当年ハ鍋島家勤番ニ付、鍋島孫六郎始役人大勢詰居、番所四方、其外小屋々々の回り幕打廻し、長柄鑓数十本立たり、石火屋も多く並へあり、船にて小瀬戸へ御渡、右すぐれ、大田尾（オ、タヲ）なと御台場あり、神崎（カウサキ）、御台場御見分、海辺御番所あり、其うへに家の内に石火屋五ツ、五百目、五百目、二貫目、六百目、壱貫目、二貫目の石火矢、太き所にて四尺五寸計廻りたり、長さ九尺計、口のさしわたし、一段高く三百目、五百目、八百目、一貫目、同し並び八百目、三百目、一貫目、一貫五百目、一貫五百目、八百目、一貫目、其うへ少し高き所一貫八百目、八百目、八百目、其うへ高き所一貫目、一貫五百目、二貫四百目、都合廿二あり、御台場十二ヶ所の内此所のミ石火屋数を記ス、魚見嶽、かう崎と入江をへたてて見ゆ、かう崎より石火屋数多しとなん、御見分なし、又々御船にて小瀬戸へ御渡、小瀬戸、入口に石段高く、次ニ小せと村あり、二丁計上り中番所あり、御三方様御一同御上陸、この御番所にて御休あり、此所より五島見ゆ、夫より北ノ方二丁計高き所遠見番所あり、御見分なけれは我輩も行す、かみの島、小せとゝかみの島の間いさゝか狭き所を舟ハ往来する也、かミの島畑も多く人家も多く見ゆ、高鉾島、小き島也、御台場あり、かうやく島、御台場あり、硫黄島、かうやく島とならひたり、俊寛僧都の流されしハ此島也と長崎人ハ語れと、さつま潟おきのこ島とよみし歌にて、薩摩国なる事論を待すして明らけし、船にて御帰り、出島、長崎町なとを右に見て、御船蔵、焔硝蔵なと御見分、船蔵の内に船二艘あり、焔硝蔵一ツ、箱多く並へ合焔硝八百目、白焔硝高百五十五斤、麻灰十二斤、硫黄高二百三十斤なとあり、御鉄砲蔵一ツ、鉄砲皆箱にいれてあり、土間にも道具あまた並へあり、夫より波戸場へ着船、もとの道を御帰り、立山御役所へ、当所巡見相済、明日出立之旨申断、御帰り也

五島見ゆ
御台場あり
出島
御鉄砲蔵
波戸場へ着船

六月五日
阿蘭陀船入津

五日

朝より雨時々ふりしか、強からす、午より晴たれとくもりかち也、辰より南風吹、いとはけし、辰上刻、向井雅次郎へ遣はしたる書状の返簡来ル、未上刻曽我様御本陣へ御寄合ニ御出、申中刻阿蘭陀船入津ニ付、呉藤次郎案内ニ

六月三日
聖堂預向井雅次郎
林大学頭殿
鳴滝
清正公の像
放火山
眺望あかずなん　馬場郷
日見口
氷見峠
貧しき家
家のあらぬハけしからぬ
六月四日

三日

朝間くもりしか、巳中刻頃よりはれ、終日くもらす、午より南風すきたれと強からす、辰上刻聖堂預向井雅次郎儀、昨日巡見之節被仰付置候書付持参、玄関にて何くれと物語す、同人儀、林大学頭殿へ門入致居候所、一度東都へ罷出可申旨度々被申越候間、一両年之内江戸表へ罷出申度候間、其節面談致度旨申聞候、辰中刻より放火算巡見ニ御出立、炉粕町、北馬町、南馬町、新大工町、長崎村之内馬場郷、左右人家有、庄屋吉田豊吉宅のさきより左へ小道を入、大道を行は日見海道也、放火山道を一丁よ行、鳴滝と云る谷川の石を伝ひ落るを見、川はた一丁計行左へ上る、此辺所々に小家あり、中川口也、五六丁行、左高き所、今ハ畑となりたる所長崎甚右衛門古城跡之由、三四丁行、橋を渡り一丁計行、此所左ニ家一軒あり、左ニ小道あり、明□寺道也、是清正公の像を安置したりと、中川郷の内也、此所よりいと険し、山駕籠を出されたれと歩行にて御上り也、五丁計上り、右松一本あり、染筆松と云り、此下陰に御休あり、又四五丁上り、島原の方見ゆる所御休あり、これより山を廻り四丁計上り、此山のいたゝき放火場也、放火山、山の頂さし渡シ三間計り、丸く築立一丈余高く三方にかまと口あり、此所より島原温泉嶽卯辰、天草島午未、天草島長けれは所によりたかへり、氷見峠巳、大村子、山陰ニ成、長崎町申酉、此いたゝきいと高けれは四方数十里見わたされて、眺望あかずなん、下りて馬場郷森田豊吉方ニて御三方上下共昼食也、休息の間に春徳寺のうしろの山なる東海氏の墓を見ニ行、西遊記にこと〳〵しう書たれと、花鳥なと彫たるハいさゝかにて、聞しにハ劣れり、されとおのれ今迄見し事なき美麗の墓也、奥ノ石に、慶安二年己丑十一月念九日と肩書し、先考敬雲法名海雲徐行妃管氏法名妙隆孺人神位、其の外多けれと略す、昼後より日見口巡見也、豊吉方より一丁計行、石橋あり、いさゝか上り一丁計ゆき、左ニ八幡ノ社あり、石鳥居有、少シさき制札場、次ニ石ニて築立たるくひ違ひあり、二丁計行、石橋あり、一のせ川ニ掛る、二丁計いさゝか上り、右高き方ニ鳥居あり、英彦山と額あり、此うへの山いと高く峙ちたり、彦山と名つくおなし並ひ東ノ方、豊前坊とて塚の如くにて古松多き高き峰あり、此辺より段々上り右ノ方小家所々あり、右ノ山間より谷水なかれ出る所四ところわたり、険しき坂を上り十四五丁計にて氷見峠也、氷見峠、左右に貧しき家両三軒あり、御三方様共庭へ駕籠をすへ御休あり、此峠より矢上迄一里半ありと云り、矢上の方下り坂木しけり険しく見ゆ、木ノ間より島原よく見ゆ、長崎道にて往来の人必休むへき所なれは、いさゝかは休らふへき程の家のあらぬハけしからぬ事なり、もとの道を帰り中島御鉄炮方高木内蔵之丞殿方え御立より、未中刻御本陣迄御帰りあり

四日

本蓮寺

仏いと多し

福済寺

臨済宗黄檗派、無本寺、東明山と号ス、境内五千九拾四坪、内四千百六十七坪余、長崎村御年貢地、九百弐拾六坪余、今紺屋町御年貢地、石坂八段あり、山門、額、東明山、聯、右、寶林壇乗千秋茂、左、移地明山萬古隆、右へ七段上り本堂、十間計、大椎寶殿、聯、右、宝池初登国師千秋如在、左、法幢重振東明五世其昌、左堂あり、六間計、額、海天司命、聯、右、帆懸四海波濤静、左、澤被群生雨露新、本堂の内ノ額、大明中興隆武歳次乙丑季夏吉旦、濟世法王、寺町通り、中紺屋町、今紺屋町、新橋町、諏訪町、磨屋町、酒屋町、引地町、豊後町、小川町、南美酒（ママ）町、東中町、西中町、東上町、西上町を御通り

本蓮寺

法華宗、京都本国寺末、聖林山、御朱印境内一万拾坪、石坂三段上り、同十八段、山門あり、額、聖林山、十八段上り、右、鐘楼、廿六段上り、本堂、額、雲瑞道場、左右銅燈籠、右、庫裏あり、本堂に安置の仏いと多し、寺ハ巡見の諸寺の中に劣りたる寺也

福済寺

臨済宗黄檗派、無本寺、分紫山、境内三千八百弐拾九坪半余、内三千拾坪長崎村御年貢地、八百拾九坪半余下筑後町御年貢地、石段十二段上り山門あり、額、萬治戊戌中秋吉旦、福濟禅寺、臨濟三十三世黄檗木庵陷書、山門ノ表、聯、右、紫気裔雲光服濟、左、漁江玉帯擁山門、木庵、同裏、右、東山無雙池、右、西来第一門、名分明ならす、四十六段上り石門あり、右へ曲り廿間計行、門あり、額、山海大観、鰲江□垓書、聯、右、萬里雲帆転積、左、一圍天景分明、元岱東消、此聯いと古く名分明ならぬ計也、されと字体誠に動が如し、裏の額、慈航普度、敬修亦禩敬立、本堂中ノ額、通身手眼、額、普天慈母、光昊、無盡燈、法国英、青蓮相、陳元震、真護法、蔡朱緡、東海楳岑、龔素肅、聯、右、入三摩地示現普門千江月影、左、得自在赴感群念萬卉春容、右、蓮座洪可天臺覧海浪花、飜鉢水、左、貝音寅月嶋翠岑雲樹、涌山尤、陳元震、額、慈航永濟、海天活佛　海甸維寧、乾坤正氣、聯、右、履険如夷絶域殊郷通宝篋、左、有求必應風恬浪静托慈航、左へ丸き門を入、堂あり、表額、萬行荘厳、裏、扶正法、黄檗沙門即非合十書、聯、右、弘濟福膺浙護、左、□扶法社頼屏麻、堂額、光風盖宇、木庵、同、大椎寶殿、温陵鄭泰、聯、右、超佛越祖楢落堦階梯向取捨倶忘處承當始和心原不二、　左、譚微説妙己渉唇吻會文彩未彰時一着方信道本無言、左、開山堂、額、永昌明、東瀾敬立、聯、右、檀徳光涵滄海日、左、刹竿瑞掲紫山雲、祖師像のうへ、額、開山、額、霊光永輝、聯、右、青鳥啣花天外宇、左、黄接消恩杖頭通

わか母の兄

美麗にしてめてたし

聖堂

孔子廟

向井氏居宅

伊勢宮

興福寺

花表より石坂九段、同九段上り石灯籠一対、天明三年卯九月、一段上り二ノ鳥居、石ノ鳥居也、額なし、石灯籠一対、寛政元年己酉夏五月、南総市原郡羽山今関文治盈文建とあり、こハわか母の兄なる田尾村今関弥右衛門にて水野若狭守殿に随従して在勤せし程の事也、文治とは若かりし時の名也、二ノ鳥居より二段、七段、五段、九段、八段、七段上り三ノ鳥居也、石ノ鳥居也、額なし、三ノ鳥居より六段、五段、廿一段上り、左右五六十間、向ふの坂上り口迄廿間余計の平らなる所あり、石燈籠一対、享保七年高木作右衛門藤原忠栄とあり、石坂七十二段上り、楼門、銅額、諏方大明神、左右回廊、右十二間、左七間計也、本社の方へも廻れり、十二間計也、十六段上り中ノ門、十二段上り拝殿也、額、正一位諏方三社、本社拝殿より板檀高し、宮ノ脇に石垣あり、四十三段に十段上り本社の脇也、板の筥檀も右の通ニ高き也、諏方社ハ吉田派、境内御朱印也、一万坪程、本社、中諏方大明神、左森崎大権現、右住吉大明神、外ニ末社三拾社ありと、二ノ宮鳥居より左へ一丁計行、松ノ森ノ社也、松ノ森、吉田派、境内二千六百弐拾坪余、内千三百三十坪余、除地千二百九十坪余、長浜村御年貢地、四段上り石ノ鳥居、左右石手水鉢あり、廿七段上り門あり、額、天満宮、庭を廿間計行、池あり、石橋あり三間計、七段上り庭也、拝殿、三間ニ三間半計、本社天満宮也、回りいかき、唐人の諸職人のさまを掘たる也、美麗にしてめてたし、南馬町、新大工町、伊勢町を通り

聖堂

東より西へ流るゝ谷川を前にして南へ向て長屋門あり、二ノ門櫺星門（レイセイ）、三ノ門杏檽門、横額、乾隆辛巳孟春之吉、萬仞宮墻、雲間碩孝先敬書、聯、右、乾隆辛巳孟春之吉、萬世文章祖、左、歴代帝王師、雲間碩孝先敬書、門の戸ひら板四枚、大学之道云々より厚未之有也と迄を書てあり、呂□拝午とあり

孔子廟

東西二間半、南北四間半計、正面に孔子の像あり、像の前に緒に、萬世師表と篆字の帳あり、額、萬世師表名を書す、乾隆帝の書也と、聯、右、廟貌森然海肅陳俎豆、左、儀範卓爾崎山尊視衣冠、孔廟に向ひ左ニ講堂あり、二間半ニ五間計也、額、明倫堂沈□、聯、右、講幄宏開群仰邦領袖、左、冷壇・・・・・・、右ニ文庫あり、左講堂ニ並ひ入口ノ方に向井氏居宅入口あり

伊勢宮

伊勢派、境内五百二坪半余、但伊勢町屋敷御年貢地、道ノきは石ノあま犬左右ニあり、三段上り門あり、左右に石の手水鉢あり、木鳥居あり、拝殿ニ七間ニ三間計、本社二間四方計、天照太神、豊受太神、相殿に祭れり

興福寺

天后聖母

大音寺

文化五年イキリス一件

皓台寺

石仏なと多し

六月朔日

巡見ハ休

諏訪宮

宗福祥寺、聯、右、天空海濶無雙地、左、虎伏龍歸不二門、龍飛歳次甲戌菊月吉旦　海西法窟、臨済第三十四世嗣祖沙門安千獸敬立、右、横額也、額、大雄宝殿、真字、聯、右、佛是了事漢、左、世豈無全人、額、乾坤正気、同、威徳荘厳、同、臨下有赫、額、護法蔵、聯、右、一座壽山観自在、左、無邊福海大圓通、右、帝極奠安四海仰恩波洋溢、左、皇言宣諭萬民荷徳澤淵深、大釜有、天和二年ニ鋳たり、堂、天后聖母の堂あり、額、山河正気、本堂額、永護安瀾、額、高登彼岸、同、萬里安瀾、同、海天活佛、聯、右、揚帆登寶所、左、慈愛見婆心、左、萬古流芳、額、法海慈航、此外あれと書ず、うしろの山、六十六段上り、左右に分レ道あり、左庵あり、山上数丁の間石塔多し

大音寺

石垣四段、同十一段上り門あり、額、正覚山、十八段上り、左、石のいかきありて中に石塔有、碑銘あれと読す、当寺開山の唐人の由、十六段上り、山門、五十二段上り、本堂、十一間、額、中道院、額、鎮西大法、右庫裏あり、左鐘楼あり、左半丁計奥、文化五年イキリス一件之節、切腹ありし松平図書頭殿石塔あり、現光院殿従五位下前圖書頭俊譽浄雄大居士、文化五年八月、本堂のうしろ御霊牌殿、御代々尊牌を安置し有之由

皓台寺

曹洞宗無着派、肥前佐賀春日村玉林寺末、海雲山皓台寺、御朱印地、境内一万千六百七拾七坪余、石坂三段上り、外門、八段上り、山門、額、勅賜海雲山、門ノ表、聯、右、法窟為国賜建立眞輔王道千古、左、堂頭承鈞旨提綱永祝聖世萬年、門ノ裏、聯、右、萬畝紺苑打開通玄門、左、数樹青松遮断紅□界、十一段上り、右石仏なと多し、十五段上り、中門、仁王門也、額、皓台禅寺、真字、左右銅燈籠、一丈二三尺、石台二尺余、本堂額、萬徳殿、真字、同、紫金仙、行字、聯、右、殿裏底錯安名字、左、門外漢不労註脚、額、無量閣、同、夜明昼、古教照心、選佛場、香積冢、経堂、大きなる仏あり、常□(寂)光、東皐心鉞書

天保九戊戌年六月　大　朔日　庚午

朝間雨ふり、辰時やミしか、午上刻一村雨誠ニ強く、やかてやミしか終日ふりつやミつ、いくたひとなし、朝より南風ふく、朝より雨天ニ付巡見ハ休也、午上刻より近藤様御本陣ニて御三方様御寄合、夕くれ御帰り也

二日

朝間雨ふりしか、辰下刻やミ、いさゝか日かけ見へしか、とかくくもり、午中刻より雨ふり、未上刻やミたり、辰上刻御出立、諏訪宮御参詣、石坂四段上り、一ノ鳥居、銅ノ鳥居也、額、鎮西大社、天保三壬辰九月とあり、一ノ

御用達　炉粕町乙名　家原嘉次郎
今石灰町乙名　中尾幸三郎
曽我様　御本陣　南馬町　長崎糸割符宿老　林熊太郎
御用達　東町乙名　宇野九郎兵衛
外浦町乙名　中村茂助
近藤様　御本陣　北馬町救銀会所請払役　三田村太蔵
御用達　西築町乙名　荒木金四郎
古町乙名見習　堀喜八郎

五月廿九日

唐人屋敷
大筒二ツ

大徳寺

家作よからす
宗福寺

廿九日

朝間くもり、辰中刻より晴しか、未よりとかくくもりかち也、朝より南風ふく、つよからす、辰上刻炉粕町御出立、通筋町々の名跡ニ記ス、町々乙名木戸口に下座、名札を出す、唐人屋敷、外門、門の外右ニ番所あり、文化年中大村侯へ番被仰付しか、其後奉行持に成たり、門より一丁計あり、門より正面海辺に家ありて大筒二ツあり、門の右ニ番人、役人大勢詰居、中門あり、左右唐人の客舎造り並へあり、赤旗二枚左右、福徳正神とあり、中門額、徳配天高、福清弟子魏振堅叩数とあり、徳配天高の四字横也、聯、右、道光甲午年蒲月吉旦、発祥黒帛招財至、左、餘慶金輪送福□、同し門の額、福被群黎

大徳寺

総門額、護国法城、石坂七十四段上り木鳥居あり、同十七段、同右十七段、左右銅燈籠あり、正面、天満宮、額、海香崎天神、額、神光文學、左、鐘楼あり、天神の並び、観音堂、額、海東普陀山、横四間、額、蓮界荘厳、右ニ客殿あり、門あり、左鐘楼の並ひ茶店あり、長崎の町目ノ下ニ見ゆ、もとの道を帰り、右ニ坂を上り、右正覚寺あり、石垣高く城塁の如し、日蓮宗、二丁計上り八剣宮あり、天満宮あり、右鳥居あり、五丁計上り一ツ松とて、大木の松一本あり、此所御休所しつらへあれと御休なし、三丁計行、茂木村、村の入口高木作右衛門殿の手代なと待居たり、人家を一丁計行、右へ曲り一丁計にて田上寺あり、昼食、真言宗也、寺小く門もなし、茂木村ハ左右ニ人家あれと何れも家作よからす、茂木の坂より天草島近く見ゆ、田上寺の辺孟宗竹殊ニ多し

宗福寺

石坂六段上り、左へ廿五段上り、左右大石燈籠、同廿五段上り、右松一本あり、門あり、額、第一峰、即非、横額、

時津村　大村家の家老
長崎の案内来ル

左右人家あり
浦上村

長崎宿役人　待居たり

衣類着替

焔硝蔵

稲佐嶽

立山御役所

島也、木あり人家なし、日並村、右をうしろに海を前に所々家あり、龍崎の辺より時津正南に見ゆ、西時津、左の海辺に家多く有、時津村の御上陸場と八人家続かず、村のうしろ高き所迄田也、時津村、波戸場に大村家の家老・用人・横目なと出たり、波戸一丁よ海へ石にて築出しあり、此所迄長崎の案内来ル、時津村、高千三百四十八石余、市場より、舟上りの所を市場と云、村へいり町家也、左へきれ正面、八幡宮有、此所より右へきれ、町をはなれ一丁よ行、左のノ山ノ下人家あり、御休、御休所より二丁計行、此間左右田地、石橋あり四間、川を左に見て行、二丁計にて継石、右の山の六七丈高き所ニあり、丸き大石かさねたるやうなる石あり、是をつぎ石と唱へたり、五六丁行、左へきれ二丁計行、内坂川、石橋あり三間計、川を右ニ一丁余行、小坂を上る二丁計、険しからす、右谷間山高く見ゆ、左平宗、家所々に見ゆ、滑石村の内也、滑石村高三百七十石余、筋違村、左右人家あり、家のうしろ蓮多く植たり、三丁計川を右ニ見て行、石橋あり四間計、岩屋口、浦上村之内、立場あり御休、岩屋山、道の右ニ石の鳥居あり、額あり、岩屋山とあり、岩屋山大権現の山ハ右ノ方しけりいと高し、十八丁といへと一里も有へく見ゆ、鳥ゐより三四丁行、道はた大岩に南無妙法蓮華経、三尊弥陀、六地蔵なとの像を岩にほり込て、案内に問と、誰人の作ともしれすと答へたり、故ありけに見ゆる石仏也、左住吉ノ社あり、道ノ左にあり、四方田也、石の鳥居あり、住吉と額あり、番所、道ノ左にあり、是大村領と御料所高木作右衛門支配の地境也、大村家の家老・用人其外待居たり、十間よはなれ御料地面に、高木作右衛門手代長崎宿役人なと待居たり、右の境杭あり、浦上村、小名じやうのこし、さと口、まこめ口、土橋あり、十五六間計、少シ坂をこへ又土橋あり、平の宿、浦上村の内、家続きいと長し、坂を下り田のある所を過、長崎郷に入也、いさゝか坂を上り左ニ山王宮あり、別当円福寺、道ノはた左石鳥居あり、石坂を上り真向ひ山王宮、左別当円福寺、右洪鐘あり至て小し、長崎浦上山里村山王権現鐘銘并引、と始に有て、終に享保元年丙申八月穀旦とあり、此別当寺にて御三方様共御待合、御供のもの迄衣類着替て行、いさゝか下り又上りなとし、田畑のある所の石地の道を行、左りいさゝかはなれ山高く右ハ入江見おろさるゝ也、右、道より低く山の出崎ニ聖徳寺、右、道ノ下船蔵、焔硝蔵、鉄炮蔵あり、長崎入口に坂あり、此辺より長崎市中目下ニ見ゆ、右ノ方海をへたて稲佐嶽、悟真寺、いなさ崎其外見ゆ、真向ひ町并入江こしニ大音寺・愛宕山・大徳寺なと始め、戸町御番所のうしろの山なと見え好景也、坂を下り左、本蓮寺、福済寺、聖福寺、永昌寺なと山の中腹に山門より諸堂見あけらる、西上町、東上町通りを行、立山御役所へ御立寄、御三使様御同道ニて御出、奉行久世伊勢守殿、炉粕町御本陣へ御着、呉藤次郎宅也、左安禅寺、石坂高し、此寺に東照宮の御霊屋あり、立山御役所に隣れり

大久保様　御本陣　炉粕町　唐小通事　呉藤次郎

並村宿

樹木も倒れ家も倒るゝ

五月廿八日

乗船　大村町

矢倉見ゆ

山々おほく田

箕島

堂崎

左へ曲り八幡ノ宮あり、石坂数段あり、社ノ下中島市太夫宅御休、此所より城下迄二里あり、松原村出口石橋あり、四五丁行、辺配（ヘンハイ）川、石ノ上土俵を並へて渡ス、左右ニ人家あり、正連寺といふ石橋あり、竹松、小名、宮小路（ミヤコウジ）、左右人家あり、左ニ幸天社、石の大鳥居あり、郡村之内原口、高五百四十六石余、左右人家あり、一里塚、松並木の内ニあり、御休有、宝庫（ホウコ）野村、高六十三石余、左右人家あり、入口右ニ石鳥居あり、正元山と額あり寺也、左右人家多し、道中に小溝流れ老木の桜を植つゝけたる事六七丁斗也、右祇園の社あり、左家中の宅あり、並村宿、左右人家あり、石橋有、原小路、大村之内、左右人家あり、久出津（クデツ）、左右に人家あり、此辺左ハ田也、右ハ海近く島も見ゆ、大上戸川、石橋あり十六間計

廿七日

あかつき雨、つよかりしが朝間やミ、辰上刻西北風ふき出て烈しさいはん方なく、樹木も倒れ家も倒るゝあり、雨も車軸を流す如し、一時もなくやミ午未の間二たひ雨ふり来、日かけ見えしか、とかく陰り、申上刻又日かけ見へ、くもりかち也、今五ツ時御乗船の積り也しか、風雨ニ付延引

廿八日

朝間くもりしか、辰よりはれ、午よりとかくくもり暑からす、辰より南風ふく、強からす、辰上刻乗船、大村町の中程、制札場より右、南ノ方海手、横道へきれ二丁計行、石にて海中へ四丁計築出し波戸場あり、少シこき出て見れは、町ハ丑寅、城ハ辰巳にて古木しけれり、木のまより矢倉見ゆ、海中より見れは郡村の辺より諫早の方角かけ、海より半道はかり離れ、山高く垣をめくらせる如く長く続けり、其山々おほく田也、波戸場より十七八丁こき出、左臼島、小松生ひよほと高く大かた丸き島、同一里計ゆき、右箕島、小松生ひ山も高からす畑あり、人家少シ見ゆ、波戸場より一里といへと近し、箕島より大村の方により小き島三ツあり、かろうとかいふよし、名をきく程の島もなし、臼島・箕島の間をこき出て見れは、諫早卯辰ニ当るよし見えす、子の方こかさき見ゆ、高からす、大村の方地続也、右なか村、其外何くれの山海辺に見ゆ、遠く白壁の土蔵の如く見ゆるハ海辺の石のよし、左佐瀬村、山の下人家いさゝか見ゆ、海辺西戌に向へり、左堂崎の出崎、琴緒山の戌の方へなかれたる所の出崎也、松あり、左琴緒岳見ゆ、堂崎・崎野地つゝき、樹木もなし、此辺高き山なれと樹木ハなし、堂崎のはなわを廻れば堂崎村、家所々に見ゆ、堂崎と崎野の間辰巳の方廿丁計、入江の奥に長与浦見ゆる、人家多く並ひ見ゆ、右二島、小き島共也、松木なと見ゆ、右龍崎、たつさきの出崎岩あり、龍崎より二丁計行、山をうしろに小き家七八軒あり、右高島、小き

（六五）

小音琴村

所々人家あり

彼杵村

此所より時津へ渡る

長崎道　繁花に見ゆる

五月廿六日

千綿村

左右人家多し

武留路村

丁計行、川棚川、川は丶三十間計、石を並へ渡ス、川棚村ハ東より西へ長く、南北ハ山なる谷間村也、されと谷間広し、一丁計行右へ小坂を上る、上り一丁計下り一丁余、下れは左ニ溜井あり、三丁計行海辺也、右百津村、人家あり多からす、□浜あり、是大村の入江也、左へ曲り海辺を五丁計行、小音琴（コネコト）村、彼杵村の内、左ノ方山にそひ人家かなたこなたにあり、右ハ海也、石橋をわたり左山にそひ行、小坂あり、三丁計行下り、右ハ入江也、大音琴村、彼杵村之内、左右に人家有、宿めきたれと住居あしく、石橋を渡り、左ノ方山ねに所々人家あり、小坂を上り三丁計行、下りて田地の所を通り行、朽木田（クチキタ）、彼杵村の枝郷、石橋あり、人家ハ左の山根にあり、うしろ山高し、道はた左水地権現の宮あり、此辺人家山の形に随ひ住居せり、和田、彼杵村の枝郷、御休所あり、朽木田之内海辺大木の松三四本ある所也、一丁計行、又坂を上り五六丁行海辺也、少し高し、下り左ニ十二社大権現の宮あり、此辺立髪・島田、彼杵村の内人家あり、石橋を渡り金蔵町、左右人家あり、彼杵村也、彼杵村、大村丹後守領分、高二千二百三十八石余、家数、仮亭主山田斎兵衛、彼杵村ハ村高も家数も多けれど種々の小名ありて分郷いたし、彼杵町ハ二百八十軒計也と、さも有へし、町中に東長崎道、北小倉道、南平戸道の石の傍示あり、彼杵町の南ハ大村へ続ける入江也、広さ三四里もあらん、此所より時津へ渡る也、東十丁計にて山あり、山のいたゞき迄田也、北も十丁もなくハ山高く谷間也、これ嬉野通り小倉道也、西ハ立髪の出崎、山つゝき迄十丁ハなし、其内ハ四方悉く田也、浦付殊ニ長崎道なれは家作もよく繁花に見ゆる也

廿六日

夜あけてより雨ふり出、辰下刻頃しはしやミしか、巳中刻頃より雨いとつよく、時々やミしか、夜半より甚雨いはんかたなし、午より西北風ふく、強からす、暁六ツ時彼杵町を出立、町の出はなれ石橋あり、左右田地三丁計行、川あり、廿間計石の上へ土俵を並へ渡ス、三四丁行、又石橋あり、此辺より左ハ山近く右ハ海也、少シの坂あり、四五丁行、千綿（チワタ）村、高七百廿石余、彼杵町より十八丁あり、左右人家あり、出はなれちわた川有、石を並へ土俵を積て渡ス、少しの坂を上り人家ある所を過、下りて石橋あり、左右に人家あり、平原（ヒラ）、千綿村之内、御立場あり、左右ハ田にて海へ近し、彼杵村より一里也と、一丁計行、下りて石橋あり、江ノ串の境也、江ノ串村、高三百九十六石余、左右人家あり、多からず、二丁計行、江のくし川石をならべて渡ス、川を越間なく左右人家多し海辺也、左ノ山にそひ行、十丁計人家五六軒あり、下り石橋あり、左山きは高き所に武留路（ムルロ）村あり、六丁計行下り海辺也、一丁計行石の小橋二丁計行、石橋三間計、江ノさし村、松原村の境也、二丁計行、右しかの島、鹿大明神の社あり、陸より一丁計はなれ小島也、冬木しけりたり、五六丁行、郡村の内松原村、高六百七十石余、村へいり

日宇村

早岐村
人家並ひ町めきたり

五月廿五日

松浦家の家老

大村家との境
役人多く並居たり

眺望至てよし　川棚村

右ニ冬木しけれる社地なとあり、四五丁行、茶屋の原、日宇村之内大野原といふ、右ノ松林中也、小屋のさま至て手を尽せり、三丁計下り谷川を渡り一丁計田地有、又小坂を上る一丁計、下りハ三丁よ也、険しき所あり、谷間を五丁計行、左より右へ流るゝ谷川、広さ四間計渡り、此辺より広し、左に田地多し、右ニ入海見ゆ、日宇の本村也といへり、所々に人家多し、十丁余行、日宇川あり、十二間計右へ流る、此所より五六丁行、小坂を上り、こかのこえ、日宇村の内、右ニ御休所有、下り人家あり、小川を渡り左の山にそひ行なとし、又右ニ入海を見十五六丁行、並木松の坂を上る、札の辻、二丁よ並松の道を上る、峠に御休所あり、早岐村の内、下りて三四丁行、谷川を渡り小坂あり、上り二丁余、けはしからす、下り二丁計、早岐村也、人家並ひ町めきたり、村へいり右へ曲り三十間計行、東へ曲り一丁計行、左ノ小路へいり大念寺也、早岐村、平戸領彼杵郡、高、家数四百、早岐村ハたて町、中町、東町、西町、しつ町、出来町なと町名あり、西ハ入江に近く三方とも山に近し、本陣浄土宗大念寺、仮亭主升屋仁兵衛

廿五日

朝より晴たりしか、午より時々くもり、朝より南風ふきたれとあつし、辰中刻早岐村出立、本陣を出て町を左へ曲り一丁計右へきれ、廿間計左へきれ一丁よ左へ曲り十間よ行、橋あり、右へ曲がり五六間、入江の端に出る也、右の入江にそひ二丁計ゆき左へ一丁計、入江続きの川也、くもり川といふ、此所に松浦家の家老なと出て居、土橋、くもり川に渡せり、廿間計、いと高く作れり、早岐村と広田村の境也、橋より一丁計行、右ニ住吉明神の社あり、道はたに石ノ鳥居有、広田村の内也、四丁計行、きぬ田川、石を並へわたす二間計、三丁計行、此辺より谷間也、されと右ハ田也、左の山根にそひ行、松並木あり、茶屋の辻、御休所あり、広田村の地也、早岐より三十丁計也、少シ下り又上り茶屋の辻迄三丁計行、番所、松浦家の番所也、大村家との境、大かた矢倉沢・横川なとに似たり、此所に松浦家の役人多く並居たり、番所を過れば大村家の役人並居たり、此所を袖の峰といふよし、番所より三十間計あり、宮之村の地也、是より大村丹後守殿領内也、二丁計下り御立場あり、宮之村の地也、四郎丸といふ所のよし、左右人家あり、田畑もあり、四郎丸川橋あり、大宮峠、松並木あり、上り十丁計、険しからす、坂の上右に石ノ鳥居あり、観世音と石の額あり、二ツ石観音道也と云り、一丁計上り頂き也、一丁計下り一里塚あり、宮之村・川棚村の境也、二丁計下り一盃水、御休所あり、道ノ傍右岩間より清泉なかれ出る、いとひやゝか也、名水也、いさゝか下れは右入江目ノ下に見ゆ、左虚空蔵岳見ゆる、此辺にてすくれて高し、四五丁下り少し上り又下る、此辺眺望至てよし、いたゝきより下り十五六丁計也、川棚村、千五百廿六石余、左右人家多し、昼食、御本陣を出て三

（六三）

一ノ瀬村

相神浦　田畑も多し

五月廿四日

松浦郡　彼杵郡

を渡る、此所高岩といへる所、御休所有、高岩ハ谷川をへたて大岩高くそひえ、実に高岩ともいふへきさま也、此辺より広き谷間、左右田地二丁計行、川をわたる、此所の下二ツに分レあり、こゝハ枝川也、四間計、五六丁行川を渡る、三間、一丁計行川、六丁計行川、此辺より狭き谷間也、されといさゝか田地あり、二丁計行川、三丁計行川、一丁計行、此辺より川ハ右の深き谷より落る、二丁計行小溝を渡る、此わたりの所水下左ニみか月石とて丸き石の上に三日月の形なる石あり、人のあやまちて上りなとする時ハ忽ち変事ありと語れり、誠やしらす、此辺より左右並木松なり、ゑり峠上り五六丁計、坂の中程田あり、一ノ瀬村の地之由、御休あり、三丁計下り田あり、谷川を渡る、右の山にそひ下る六丁計、かまくら川、右道より一丁計はなれ鎌倉明神あり、社木しけれり、左に川見ゆ、佐々川なり、佐々村松川屋治左衛門方御休、造酒屋にて頗富家に見ゆ、二丁よ行、佐々川、川はゞ十四五間、吉田川ともいふ、たど村、左高き所三社権現社有、石鳥居あり、口石村、左右人家あり、小川を渡り田地又は人家の前を通り三四丁行、溜井を左に見て右の山のをさきを廻り、はん坂に上り始る也、はん坂上り十四五丁、並木松しけりたり、険しからす、峠に御休所あり、此所より相神浦の人家目ノ下に見ゆ、此坂上り下り共頂近く迄田地あり、下りハ十五六丁、険しき所ニあり、下りて谷川をわたり二丁計行、小川を渡りいさゝか坂を上り二丁計にて下り、小川をわたり三丁計行、中里川、川はゞ廿間計、右へ渡る、一丁余行相神村也、右高き山あり、頂ニ森あり、愛宕ノ宮也といふ、相神浦、小庄屋敬右衛門、仮亭主賎津浦坂本屋甚右衛門、相神浦ハ東より西へ長き広き谷也、田畑も多し

廿四日

朝より晴しか終日くもらす、午より南風ふく、誠に暑し、申より風やミ夜あけ猶あつし、辰下刻相神浦村出立、五丁計ゆき左ニ川あり、広廿間計、石橋あり、右より落る枝川、四丁計行石橋あり、坂を上る、三丁計並木、四丁計行下り又小坂を上り二丁計下り川端ニ出、是迄大かた右ノ山にそひ行也、左ハ高き山の七合迄田畑也、右家三軒あり左ハ川也、家よりさき道ノ右ニ大岩四ツ五ツあり、其さま奇なり、四丁計行左へ曲り、谷間の田ある所を右の山にそひ行、六丁計にて境木、御休所あり、此所右の山に上りて通る、かち道あり、石門あり、二ツ並ひあり、道より見ゆる、境木、松浦郡・彼杵郡の境也、相神浦より此所迄一里余、させふ、日宇村之内、右春日の社あり、本社と拝殿の間石橋をかけ、社内古木しけれり、小川を渡り右の山にそひ並木の所を行、又田地中を通りなと十丁計行、此辺右ニ入海見ゆ、こざき坂、上り一丁余下り二丁松並木也、左へ曲り上る也、谷へ下り谷川わたり一丁計、小坂あり、なきり坂といふよし、並木道上り二丁余、下り二丁計也、少シ谷間を通、松木坂、上り一丁、人家左ニ有、

眺望至てよし
中野村
赤坂村
平戸城下入口
五月廿三日
乗船
城ハ南に高く
名高き古鐘　家中屋敷
家作大きく
田ひら（田平）
よき家多し
江迎村

へ上る、十丁よ険しき坂を上る、並木松あり、大こへ辻となつく、大こえ坂とふいふよし、峠に新たに小屋を造りあり、昼食、眺望至てよし、惜いかな、今日所々雲かゝりなとして分明ならぬ島山多し、平戸城下子丑に当、五丁計下り右田あり、夫より三丁計下り谷川、左へ流る、三間計石を積て渡ス、中野村、左右人家有、黒岩坂、四五丁上り立場あり、此所より左りいきつき島よく見ゆ、夫より二丁計上り峠也、坂の左右並木、又下る、小引村、右ニ二三丁はなれ山高く左ハ入江、目ノ下に見ゆる所多し、小坂四ツ五ツあり、赤坂村、人家左右ニあり、小坂あり、二本松、一丁よ上り御立場あり、此所よりいさゝか下り二丁計ゆけば平戸の城下目ノ下ニ見ゆ、左右かなたこなたに家見ゆ、平戸村のよし、平戸城下入口右高き所誓願寺、浄土宗、頗大寺也、門前の石橋太鼓橋めきたり、同じ並びに報恩寺、浄土宗、誓願寺より小し、門前の橋同じ、善積町、吉野町、天神町、安富町、安富町脇本陣谷村屋三右衛門、平戸城下町名、大吉町、富江町、富の町、幸町、戎町、善積町、吉野町、天神町、安富町、本町、宮ノ町、福寿町、延寿町、常磐（盤）町、大福町、祝町、平戸城下ハ南北に町長し、西より北へかけ山あり、城ハ町より東ノ方山ノ上にて、東より北へかけ入江にて西ハ平戸の町、南ハ白浜村にて木しけり所々矢倉なと見え高し

廿三日

朝間小雨、辰中刻より次第にはれ行、くもらす風もふかす、いとあつし、辰中刻出立、波戸場より乗船、舟を廿艘計ならへ、其上に板をゆひ付て橋のさまにしたり、舟をこき出見れは、城ハ南に高く櫓二ツ見ゆ、西ノ方町ノ上に寺々見ゆ、普門院真言宗、光明寺浄土真宗、此寺殊に高く物見やうのもの見えよき寺也、観音院真言宗、集古十集鐘銘の（数字分空白）に見えたる世に名高き古鐘あり、北ノ方山上に家中屋敷あり、東一方海也、入江にて南北に長く平戸城の東ノ方十丁よ海中に東西に長き小島あり、弁天あり、石の鳥居あり、九六島木しけりたり、此辺より白浜浦西南に見ゆ、城の南也、漁猟を渡世の里のよし、されと家作大きくよく見ゆ、平戸と九六島の間より大島見ゆ、東北ノ方ニ当ル、日ノ浦に着舟、田ひらともいふ、家七十軒よ有と、入江めきたる所也、日の浦の村中を通り一丁計行、右に曲り一丁計行、左へ小坂を上る、左右人家よき家多し、坂を上れは田地多し、こて田村小川あり、三間計石を並へ橋とせり、かゝる所平戸領至て多し、今日小川を渡ると書しハ皆石を並へし也、五丁計行坂を上る、並木松也、十四五丁行、少し下り三四丁行下り又上る、是より左右大石所々多し、吹上、田ひら村の地内也、右並木松の内御休所あり、五六丁行びわ石坂、田ひら村の内五六丁計、さゑん坂、上り五六丁険しからす、長坂、下り十二三丁けはしき所あり、右入江見ゆ、江迎村、長坂の中程より入江の辺なと所々に家多し、小川あり、右の江へ流る、川はゞ八間計、二丁計行、川あり八間計、二丁計行、川あり、同じ川二つに別れし也十間計、三丁計行、川

（六一）

平戸島
志自岐浦
第一の高山

着船
松浦家の役人
鍋島・小笠原両家の船
古田村

五月廿二日

人家多し　田地あまた

池内村

はなれ、右江ノ島二三り南に見ゆ、ひら島より小さし、同し方ニたての島、大ならす、江ノ島より遠し、宮ノ浦、志自岐山の戌亥の方入江の奥に村あり、平戸島の西の出さき也、宮ノ浦人家五十軒余ありと、此所にしゝき山の鳥居ありと見えす、志自岐浦、しゝきの人家ハ所々に散在せり、本村ハ山陰に多しと、家数三百軒計ありと、浦志自岐ハ八十七軒也と、志自岐山ハ右の方ニあり、平戸島の西の出さきにて上り一里ありと土人語れり、平戸島第一の高山也、海中にて遠く見ゆる也、船中にて見し所にてハ一里ハなきやと見やらるれと、かゝる山ハ上り見れは思ノ外遠きものなれは誠なるにや、半よりうへハ樹木繁り、頂に烏帽子のさましたる大岩見ゆ、其岩下に宮ありと、遠くよりハ真黒に高く見ゆる山也、祭神ハ（一行空白）

志自岐ハ入江一里計也、入口廿丁計広し、廿丁よいり、松ある出さきを廻り左へ廻りしゝき浦也、午下刻着船、波戸場、北より南へ一丁よ、石を畳ミてつき出し、其さき船十艘計並へ橋とせり、未下刻上陸、松浦家の役人多く出て待ち居たり、鍋島・小笠原両家の船より荷物不残請取事なれは、時うつりいと忙し、志自岐浦の人家の中を通り土橋を渡り入江の辺に出、左へ曲り田地を通り土橋をわたり並木松の所を過廿丁計、田畑の所ニ出、小坂あり、中山村、古田村の枝郷也、小川又ハ土橋を渡り山きはに至り右へ曲り坂を一丁よ上り本陣也、古田村、高、人家、古田村ハ南北ハ山にて、東西に長く、西北ノ方海に近し、田畑も多し

廿二日

朝間くもり、辰中刻より小雨ふり出て下刻頃やミしが、巳下刻より又ふり出て強く、未下刻やミ、申中刻日出しか快晴ならす、辰中刻出立、古田村左右人家多し、田地あまた見ゆ、右ハ山近く左ハ田地中を小川なかれ五六丁行て入江になる、これ池内浦也、橋をわたり小坂を越、中つら村左ノ方田地多し、右の山根にそひ行、小坂二つ三ツあり、橋も二ツ三ツ渡り左ニ宮あり、うしろニ高き山あり、右ノ山にそひゆく左田也、小川五間計をわたり二三丁行又渡る、八間計、右ノ山にそひ行、大木の並木あり、左右田多し、小橋あり、並木松の小坂あり、下り、橋をわたり田地中を通り左右山根に家見ゆ、草すミ村といふ、中つら村の枝郷のよし、小坂を上る、上り一丁よ、古田村より此所迄の水ハ西へ流る、池内村よりハ両山高く谷間広く田地多し、下り六七丁、此所より水東へ流る、小橋を渡る、左り眼下に田地見ゆ、右ハ山也高し、坂を下り、石原田、御立場あり、右ハ山、左ハ田也、二丁計行、小川橋あり、左ノ山にそひ行、下方村、人家多く見ゆ、右紐指村、入江あり、□坂を下り小川を渡る、土俵を積て渡ス、右へうつりしゝ村、並木の坂を上り、へこのはる村、左右人家あり、左ハ山、右ハ田也、並木あり、谷川広三間右へ流る、土俵を積て渡、七八丁並木を通り谷へ下り谷川を渡り坂あり険し、一丁計行、小溝を渡り一丁計ゆきて坂

五月廿日

平島の燃土見物

燃石

日本人と思はれぬ

眺望あくへくもあらず

曳船と艪のちから

はらみの瀬戸

らに有、左は草山也、人家のうしろ、北より東かけ高く大岩石峙ち立り、入江の奥右ノ高き所に瀧あり、船中よりハ見へす

十九日

朝より雨を（ママ）やみなし、されとつよからす、朝より東風ふく、強からす、未時やミたり、雨ハ夜半やミたり、風雨ニ付船出さず

廿日

夜あけ、しはしありて雨ふり出しか巳よりふらす、日かけ見ゆ、されと快晴ならす、朝より東風ふく、強からす、今日風あしく船出さず、午下刻より同勤之者大勢同道にて平島の燃土見物ニ行、北ノ方の海浜より上陸、人家の中を通り石の上を伝ひ上り、五間又ハ三間くらひの石と石との間を上る所も多し、五六丁上り右へ上れは石を掘出せる所也、七八丈も高き大岩、木の下に四尺四方計の口なる穴二ツあり、此穴の奥より堀取出る也、当時穴の深さ凡七八十間計と百間計とありと語れり、燃石のさまむくめありて、かた炭を打砕きたるか如し、穴近石ほりの家六七軒あり、岩下又ハ別に作りたるもあれど、藁屋いぶせく其人も日本人と思はれぬ風俗也、其のうへ、七八丈又ハ十丈余の大岩石の下にいさゝか露凌くへき小家つくりて住居る、蝦夷人なとやかくもあらんとおしはからるゝ也、世中にかゝるわさして世を渡るものもある事かなと、そゝろに涙くまれぬ、心ある人に見せまほし、此燃石をほる所より右へ、左の山の根にそひ回れは、東ノ方山間の水の流る所あり、奇観也、惜いかな、水多からさる事を、此辺より帰り、石を堀取の下より岩を伝ひに上り、又ハ草をわけなとして上りゆく事六七丁、此山の頂に至る、五島・平戸の島々近く見ゆ、眺望あくへくもあらず、この島いはゞ大岩石のさまなれと、真砂の所ありて十丁余高き所迄所々畑よほと有て田もいさゝか見ゆ

廿一日

朝間くもり、辰より次第に晴しか、未より雲出て空のさま雨けつきたり、辰上刻舟出ス、平島村の湊を出て右に島につき廻れは、やがて志自岐山見ゆ、今朝も東風なれば帆をあけず、曳船と艪のちからにてゆく也、左ニともすみ見ゆ、五島の内地方黒く岩二ツ入江の口に見ゆ、松もあり、人家ハ見えす、はらみの瀬戸、ともすミより東ノ方山の出さき一ツあり、島と島の間広からす、此島にてしゝき山丑寅、はらミせと酉、ともすミ申酉、竹島午、平島を

家作至て貧し
景色至てよし
岩瀬浦

五月十六日
舟出さず

出船

入会持　鯛ノ浦

り、尾村とて出崎をへたてゝあり、家数六七十軒、大なりをハ廿軒計見ゆ、うしろの山高き所をも畑に作りたり、家作至て貧し、さを崎より岩せ浦迄の間、左の島根にそひてこき行也、山ハ木しけり高し、磯辺に鳥に似たる岩、魚に似たる岩なとあり、十丈余も高からん、岩窪いくつといふ事をしらす、景色至てよし、富士山のさましたる山もあり、岩瀬浦、人家、申酉へ十丁計入たる湊也、寅卯に向ひたる奥に磯辺の形に随ひ人家あり、家作あしく、家のうしろ瀧あり、両山の谷より流れ落合てひとつの瀧となれり、島の入江よりよく見ゆ、奥へいりてハ至て少し見ゆ、此瀧の水上三四丁奥に池あり、其池よりさき樹木しけり日影も見へぬ計にて、人いる事なしと語れり、あなかちにいるものハ帰る事なしと語れど、信用しかたし

十六日

朝よりくもり、雨いさゝかふりつやミつす、巳より雨やまさりしかつよからす、暁より東北風ふき烈しからす、夜半東北風一しきり吹て猶やます、暁七つ時出船の積りなりしか、雨風心もとなしとて舟出さず

十七日

朝間、村雲おほひたなひき、日出しがまなく陰り、未時より晴たり、朝より東北風吹てやまず、夕くれやう〳〵やミたり

十八日

朝間くもり、辰上刻頃より雨ふり出て夜かけしばしもやまず、されと強からす、辰上刻より東北風ふき、同しく夜もやまず、六ツ半時頃出船、岩瀬浦の出口より志自岐山丑寅ニ見え、平島卯ニ見ゆ、幸ノ浦、岩瀬浦より一里地続き左ノ方也、湊ノ入口丸く小き島あり、十丁計奥ニ人家ありと、船中よりハ見へす、家数凡廿四五軒ありと云り、鯛ノ浦、幸ノ浦より一里、湊の入口丸き小島あり、幸ノ浦入口の小島に似て高し、一里と云ど入口にてハわづか十丁計ニ見ゆ、家数四五十軒ありと、入口より人家迄十四五丁奥也と云り、竹島、たいの浦より少シさき右一丁余沖に見ゆ、大かた丸き島にて人家も樹木もなし、五島家と大村家と入会持也と云り、鯛ノ浦より一里余行、大浦村いさゝか入江めきて家見ゆ、平島、大村丹後守領分、彼杵郡、高拾弐石、家数百五十軒余、西より東へ入たる湊也、入口小島あり、松木あり、人家ハ北より東かけ、浜辺に並ひ地形に随ひ高く低く人家立ていつれも貧し、大かた巳午より未申に向ひたり、此島周り三里計、畑もあれと多からす、湊奥迄六七丁、入口一丁計の広さ也、右ハ松まは

五月十五日
福江
上船場　見物雲霞
汐ゆき至て早し
江豚魚

【表紙】

自五島福江
至長崎

〔西海道日記　四〕

十五日

朝より空はれ、終日くもらす、朝より東風吹しが午よりやミたり、昼より冷気なりき、辰上刻福江を出立、城主の上船場より乗込なり、波戸場に家老・用人其外諸役人の出し事例の如し、海岸通り并屋敷内ニ見物雲霞の如し、福江を乗出し左ニ戸楽（トラク）の出崎、一丁計はなれ見ゆ、右ニ島見ゆ廿丁よ沖、一里よ乗出て瀧かぶらの瀬戸とてあり、汐ゆき右へ流れ早し、二里計ゆき中瀬戸あり、是も島と島とのあはひ十丁計の間汐ゆき至て早し、三十丁計左へのり上て渡りし也、おのか乗し舟ハさまて恐しとも思はざりしが、前後の舟を見れは、流るゝさま早川を下る小舟の如し、またゝく間に一里計ながるゝなり、此辺左ニ小島二ツ、右東西に長き島あり、島の形四所はかり高き所あり、若松瀬戸を左に見、去し十日乗出し所なり、さを崎のはなを左に見てのり行、さを崎の辺、海浜に岩石そはたちしら浪よするさま、奇観也、此辺江豚（ウルカ）魚多く出たり、長サ二三間計に見ゆ、舟より遠きハいふも更也、三四間計はなれて浪の上に出て忽ち沈む、いくたひとなし、奈良尾村、左の方入江の奥、東に向ひ人家二所あり、大ならず小な

福江の諸役人

幸田村

家老の宅美大なる事

五月十三日

風雨猛烈

五島

船出さず

よほと高し、海辺十丁計行、田ノ江村、左右によからぬ家廿軒計見ゆ、地蔵坂、上り五六丁にていたゝき也、坂の頂にて左ノ方高き山の少しひくき所也、下りも又五六丁下りて谷間の田ある所を通り、谷を横きり通る也、広さ四十間計もあらん、又小坂あり、左高き山の腰を二丁計上り、又右の山ねにそひ行なとして下る也、険しからす、下れは石橋あり左ハ田也、坂を下り田尾迄二丁計、ふくの竹坂、左、高山の出さき、海近くいさゝか低き所を越る也、上り五六丁、これより左の山のはらをゆく事十丁余にて右の谷へ下る也、小川あり田あり、領分境、此小川の辺迄伊賀守殿人馬おくり来、東ノ方□福江の諸役人、医師なと多く出てまち居たり、御休茶屋、小川より一丁計いさゝか坂を上り左ニ小屋新たに修補ひたり、長サ十四五間を四ツはかりにへきり、疊を敷てあり、是迄になき御休所のもふけ也、此所をしうしといふ、御休あり、昼食、両家の役人出居て人馬代り合致ス、一丁斗下り小川を下り、小川の石を伝ひ一丁余行、左より落る川と川の落合の所を渡り、水浅し、東ノ小川を一丁よ行、右へ上り畑原を廿丁余ゆき、田なとある所を経、左ニ幸田村を見て御休所あり、幸田村の内畑中也、しうしと同様也、畑中を通り六七丁行、吉田村、人家多く見ゆ、一丁よ田場を過左へ上り畑ある所へ出五六丁行、昨日の道に出、大円寺坂を下り、家中町を通り城門前を通る、家中町の二ツ目より右へ三四丁行、右馬場あり、田四五十間へたてゝ家中町あり、左ハ城也、南へめくれは表門前也、一丁計広く表門前堀あり、広七八間あり、蓮を植、橋を渡せり、塀下を通れは石垣□く二丈余、堀あり、堀を隔てゝ屋敷あり、橋を渡せり、竹いと繁りて見えす、夫より田場一丁余過家中町を経、酒屋町に出たり、家老の宅美大なる事大国主の万石以上の家老宅に劣らす、午下刻福江着、旅宿過日と同じ

十三日

朝間くもり、辰下刻より雨、次第につよし、朝より南風ふき出て終日風雨やます、夜ニいり、風雨猛烈にて、雨ハ篠をつくか如し、いさゝかよわりし時ハあれと終日やます、今朝、空あしくとて見合候うち、雨ふり出けれは御乗船なし、御本陣にて源治なとゝ共に五島、二島の内の湊々の図を写したり

十四日

あかつき雨ふり雷鳴しか強からす、辰上刻ころ雨やミしか午より雨また降出しか、夕くれやミたり、朝より東北風ふきつよからす、朝より雨風やまねは船出さず

五月十一日

福江

田畑多し

町方家作

大浜村

富江着船

家作よき多し

男女の衣服

美しく新しく

五月十二日

十一日

朝より快晴、終日いさゝかくもらす、辰より南風吹たれとはけしからす、いと〳〵あつし、夕くれ風やミたり、辰下刻、曽我様御本陣へ御供致ス、近藤様も御出、五島左衛門尉殿為御機嫌伺御出、早速立返り、福江、土人フカエと唱ふ、五島城下ハ寅卯の方海にて、西南北三方一里余一里余にて山高し、山より内ハ田畑多し、西南の山も樹木なく、山のいたゝき近く迄畑となしたり、城下町、家三百軒余と語れと、六七百軒余ハ有へくおほゆ、家中町居宅多し、町方家作存外よろし、畿内近国の城下に劣らす、心おとろかれぬ、唐人町、江川町、上町（ウヘ）、酒屋町、奥町、夷町、祇園町、外ニ浜松町、巳中刻福江を出立、酒屋町より本町通り三尾野村、家廿軒計、大円寺坂、右ハ低く田広く見ゆ、左ハ一円畑也、坂も一丁余、けはしからず、左、大津村道筋よからす遠く見ゆ、家数四五軒計、右、本山村、本山村ハ総名にて吉田、たかのす、堤、のゝきれなと名つけ、枝郷村々名おほし、総て家三百軒余ありと、大円寺坂より大浜迄畑続き也、左ハ高き山の半腹を畑になしたり、大浜の入口いさゝか小坂を下り村也、大浜村、西ノ方入江にて海にそひ家並ひ立り、家数八十七軒ありといへと家居よ□□らす、御三方様□銘々に御休の本陣もふけあれと御休なし、大浜より富江へ一里十丁、大浜より富江一筋の入江を□たせしのミ也、富江の人家見ゆ、いと近し、大浜より未申に当ル、船中より左ニくろ島、高八十石、家数三十軒余、樹木なし、家ハ見えねと畑ハ見ゆ、廻り一里余もあらんと見ゆ、外ニ小き島二ツ三ツ見ゆ、未上刻、富江着船、富江波戸場ハ石にてたゝみ、海へ築出しあり、番所あり、見付めきめきてよし、家老、中老、用人なと始めつらなり□ゐたり、富江、肥前国松浦郡五島、家数百廿七軒、人別九百九拾人、浜百五拾軒余、人別、御本陣、今村瀬兵衛、下宿、橋本屋善之丞、同　伝七、富江ハ丑に向ひ□丁の通りあり、土地ハ亥子、丑寅ハ入海也、戌ノ方陣屋あり、辰巳午より戌の方迄畑多し、家作よき多し、男女の衣服、存外に驕りたり、村役人抔も大かたちゝミの帷子を着、絽紗なとの羽織等也、女ハ帷子、又ハゆかた何れも美しく新しく、余国にも勝れしはかり也、福江より富江迄三里、福江より大浜迄一里八丁、大浜より富江へ一里十八丁といへり、されと海路にて三里ハなし

十二日

朝より快晴、終日いさゝかくもらす、朝より南風強く吹しか、申上刻やミたり、夜半雨ふりしか、あかつきやミたり、辰下刻本陣を出立、西ノ方へ行、家中町を通り陣屋を左に見、陣屋も石垣にてたゝみ、凡二丁もあらん、小大名の陣屋にハまされり、浜辺ニ出、左山きはに宮あり、次ニ宮あり、霊神社と鳥居の額あり、此社ハ山の半腹にて

五月十日
快晴いとあつし
野崎島
大かた田畑
鯨
若松村
五島城下

し、かく山野まで畑になしたる所よそに見す

十日

朝間雲たなひきたれと日出たり、辰より快晴いとあつし、暁より東風強く吹しか、未下刻やみたり、辰上刻宇久島を出船、まなく帆をあけたり、宇久島と野崎島の間をのりゆく、野島ハ南北一里半計あり、野崎の大島、小島とて二ツあり、大島ハ山高く、北ノ方松繁り、小島ハ低く畑よほと多し、いつれも人家なし、左をちか（小値賀）島見ゆ、島至てひきく大かた田畑なり、是又福島也、船ハ宇久島出しより、野崎島を左に見て未をさして行、二里計行、右をしか島の内くしき島見ゆ、左ハ野さき島をいさゝかへたてゝ、五島の内にて島続き、若松の十丁はかり前迄此島を左に見てのり行、右ハくしき島よりさき小き島二ツ三ツ見ゆるのみ也、宇久島より七里計行、なたらに高き山あり、なまといふ、人家山かけにあり、夫より一里計、あひ川、魚のめなと云る所あり、皆鯨をとりて世をわたる所也、此島右に東西廿丁計の島あり、家二三軒つゝ二所あり、島の名しれす、御本船ハこの島の外をこき行、われらハ内をのりゆくなり、此島の出はなれ戌亥の方対州幽ニ見ゆ、いひの瀬戸の少しまへ左ニ奇しく目とまる岩あり、いひのせと、こせと、大せととて二ツあり、こせとを入、両山高く一丁計のせとをのり行也、遠くよりハ此入江見えす、大せとハ見えす、二丁計行、左の入江に家十軒余あり、此瀬戸入江より若松迄三里也と、巳午さして入也、十丁余行辰へ転ず、是より若松迄広さ二三丁、広き所五丁位の所あり、左右ハ山高く所々入江あり、此入海を三りのり行也、二里廿丁計行、左へ十丁計いり若松村也、若松村、五島左衛門尉殿領分、高弐百六石七斗三升九合、外ニ新田九十石余、家八十軒、外ニ寺壱ヶ寺、御小休、大和屋茂助、若松ハ西へ入江にて、三方ハ山高し、人家ハ東に向ひ海にそひて並ひ立てり、よき家多し、未中刻御乗船也、十丁計もと来し海をのり、南の方へ転しのりゆく、右ノ方也、左右ハ高山也、一里計にて左の島をはなれ広し、右の島も出崎ありてここより右へをれて又広し、此島ハ西島なり、出さき大岩のさま奇景なり、岩屋の出さきの下、石門ともいふへきさまのあなた迄通りたる穴なと有、右、くだ村、左ニ島々あり、此辺より見れば申酉に真向ひの海の右により、いたゝきのうへ平らなる山あり、此山の南のはつれ城下のあて也、海の真向に左より右へなたらに高き山見ゆ、是五島城下のうしろいさゝか南へ□□る山也、夜ノ五ツ半時、五島城下福江より七丁まへ、石にて十間余つき出し船橋十間余かけたり、此所に番所有、いさゝか坂を上りて下り、左ハ海也、石橋をわたり左右田畑の所を三丁計行、左ハ入江川也、石橋を渡り唐人町、夫より板橋十間余をわたり、左へ上り右へ転じ二丁計ゆき、又左へ一丁計ゆき旅宿御本陣、酒屋町大賀駒吉、宇久島より福（フカ）江迄廿壱里七丁、宇久島より若松迄十四里、若松より福江迄七里、上陸場より本陣迄七丁

五月七日

肥前国松浦　的山村浦

よき湊にあらす

生月島　瓦葺土蔵

名高き又左衛門　富家

松浦城下

五月九日

宇久島

浪高からん

五島左衛門尉

大かた田畑

七日

朝間小雨ふりしか、辰中刻ころ風やミはれ行けはひなりしか、巳中刻又いさゝかふり、次第にはれしか、快晴ならす、巳より丑寅風ふきしか、申上刻やむ、巳上刻郷ノ浦出船、未下刻肥前国松浦の内大島の的山(アッチ)村浦に着て舟泊、大島ハ南北に長く一里余もあらん島なり、入江めくれるよき湊にあらす、未申に向ひ家数二拾軒余見ゆ、郷ノ浦より大島迄十里

八日

朝間雷、辰上刻より晴たりしか、とかくくもりかち也、朝より東北風吹てやまず、強からす、夜半雨いさゝかふりてやむ、辰上刻大島を出船、子丑さしてこき行、大島をはなれ生月(イキツキ)島の内いちふ浦と云る所、瓦葺土蔵なと多く見ゆ、此所に世に名高き又左衛門と云る富家あり、家も七八十軒見ゆ、此辺左ハ総て平戸島也、廿丁計隔てゝこきゆく、いちふ浦にて平戸の城下戌亥の方、山のたをりのかけに当るよし船人語れり、大島より此所迄四里計也と、未下刻池ノ内浦着、舟泊、池ノ内浦ハ丑寅より海入たり、松浦城下の一ツ、島続き也、両山高く右の方の山そひえ奇景也、奥に人家弐拾軒余あり、貧しき家共也、丑寅へ向て住居せり、大島より池ノ内浦迄九里

九日

早天くもり、終日はれす、東北風ふきたりつよからす、辰上刻池ノ内浦出船、池ノ内より宇久島申酉に当ル、池ノ内浦の出口より一里余沖に小島二ツあり、右の島の島かけに当る小島なれば、島の南方より宇久島見ゆ、午中刻宇久島の内、たひら浦といふ、家数弐百軒余ありといふ、うしろハ山にて前ハ海にて、入江の左右山さし出たれと高からす、上陸場石にてたゝみ、つき出したり、上れば右ニ神島宮石にて高く築立て小宮あり、鳥居あり、村へ上り左へ二丁計行、小橋をわたり右ノ方へいり本陣也、家亀屋栄次郎、池ノ内浦より宇久島迄九里、池ノ内より宇久島までの海路、横浪にて至て乗にくき所也と語れり、今日大かた順風なれと浪至て高く、船のゆれ甚し、呼子より壱岐へ渡り、壱岐より対馬へゆき、かへりの渡りにもこよなくまされり、逆風ならばいかばかり浪高からんと思ひやらるゝ也、宇久島ハ平(タヒラ)村、大田江(ヲ、タエ)村、木場(コバ)村、飯良(イイラ)村、寺島村と五ヶ浦ニ分ル、右ハ本家五島左衛門尉殿領分、寺島村ハせとあり湊よし、高弐千七百石、島ノ竪壱里廿六丁、横壱里、総家数八百軒余、総人別三千六百人余也と、神(コウ)ノ浦、分家伊賀守殿知行、南ノ方也、湊至てよし、宇久島ハ、山高からす山林なく、大かた田畑にて福島と云へ

道いとよし　宗家役人
府中

朝鮮江差遣

五月三日

乗船　宗家諸役人

五月六日

出船

日高く風もよし
郷ノ浦着

ゆ、今日ハ道いとよし、戸石渕ニ宗家役人両三人出たり、館門前家老一人、諸家中大勢出て下座、家中屋敷毎ニ侍一人宛門前ニて平伏、其外大概前月の如し、府中、番所前、町入口迄凡十七間、町屋凡弐丁、家中町凡六丁五間、家老、用人等の居宅多し、左ニ八幡社なともあり、同家中町、六丁三二間、橋を渡り道ノ中程水流し、桜なと植し所也、館門前、凡四拾間、同塀下通、凡二丁七間、戸石渕迄凡七町三十四間　右谷川、左ハ家中屋敷、〆弐拾五町廿五間、家中八百竈、扶持人八百竈、町屋千軒、此千軒之内、六十軒は格式免許之もの、右之もの当時は凡弐百竈程、朝鮮江差遣置候人数、番頭壱人、官士壱人、馬廻り八人、裁判人壱人、足軽中間五百人

三日

朝より晴しか、辰上刻よりくもりたり、辰上刻より南風吹しか、未時やミ、まなく雨ふり出てやます

四日

朝間くもり、辰よりはれたれと、時々くもりれり、辰より西南風ふきてやます、されと烈しからす

五日

早天くもりやかて晴、辰よりくもりかち、未上刻より日出てはれ行しか、申より又くもる、朝間西北風也しか、巳時南風となれり、つよからす、申時やむ、午下刻乗船、宗家諸役人の出し事大□、着船同様なれは略す、府中浦、船泊

六日

朝間雲たれひきわたりたれと日かけ見え、終日とかく陰りかち也、あかつきより東北風吹てやます、巳時頃つよし、未中刻風やミ、酉下刻頃より雨ふり出てやます、つよからす、暁八ツ時頃より船支度し、七ツ上刻、原口弥左衛門・本吉治部右衛門来て出船可申旨断り有之、七ツ下刻出船、府中の湊口をはなるゝ時日出たり、壱岐の方を遠望すれと海面くもらねと見えす、七里計もこき出つらんと思ふ程次第に見え、辰上刻頃より東北風次第に烈しくなり、いさゝか開□なれと船早く、午上刻壱岐の内浜近く漕行しか、日高く風もよし、池ノ浦さして行まほしく、殿様ハ思召候へ共、外様方の御本舟おくれ、とかくする間に未上刻風やみけれは、帆さけ艪にて未下刻郷ノ浦着、舟泊、府中より壱岐国郷ノ浦迄五十三里

仁位村
田畑少なからず

五月二日

乗船
佐志賀村
景至てよし

鶏知村

眺望絶景　たましひ飛揚
朝鮮酉戌に当り

浪も高からす

村迄一里十六丁半、三根村より吉田村迄一里十丁、吉田村より田村へ一里一丁半、田村より仁位村迄一里十丁半、瀬田村より仁位村迄七里一丁半、仁位村、対馬国、高百三石、人家四拾軒余、仁位村ハ未申入江にて、丑寅さして長く広き谷間也、田畑少なからず、仁田村と同じくらひに見ゆ、近年追々田地出来るやうに見ゆ、和坂へ壱里也と云り

二日

朝より快晴、終日いさゝかくもらす、辰時より南風ふき出しか強からす、巳よりあつさ強し、六ツ半時出立、宿を出て廿間計ゆき、右に川を見て二丁計下り石橋を渡り、此辺両岸石にてたゝみたり、左へ一丁計上下し、左ハ山右ハ入江二丁計行、波戸場也、辰巳の方より乗船、辰上刻出船、入海二百間計也、仁位ヶ浜と云、左海神の宮とて小祠あり、左佐志賀村、入江の海辺に小家並ひあり、出さきの岩石高からねといと好景也、貝鮒村、入江の奥也、人家見ゆ、此辺右大海の方也、浪高し、左へのりゆく也、左右岩石至てよし、左島山村、入江の奥に人家見ゆ、右竹敷村、島陰より家いさゝか見ゆ、此辺島いくつもあり、入江縦横に有て景至てよし、しらたけ島の上見こして、いと高く見ゆ、樽浜、鶏知村の地也と、上陸場也、入江のとまり出さき也、左右海いりこミたり、左ハ一丁余にてつきとまり、右ハ入江、左ハ岩山にそひ一丁計行て橋を渡り、左の橋より上も入江也、此入江追々田地につくりなすやうに見ゆ、右の山にそひ、左右田地過しころ通りし道に出て、きり通しめきたる所を過ぎ、樽浜より九丁にて鶏知村、御小休ニ着、仁位村より樽浜迄船路、左右村々、左、仁位村より佐志賀村迄舟三十丁、湊一里十□丁、佐志賀村より嵯峨村迄舟十八丁、陸廿三丁、嵯峨村より貝鮒村迄舟廿三丁、陸十二丁、貝鮒村より糸瀬村迄舟廿八丁、陸一里、糸瀬村より濃部村迄舟一里弐丁、陸三十丁、濃部村より大山村迄舟十八丁、陸一里八丁、右、仁位村より卯麦村迄舟十八丁、陸廿八丁、卯麦村より佐保村迄舟廿丁、陸十三丁、佐保村より貝口村迄舟十五丁、陸一里九丁、貝口村より島山村迄舟一里五丁、島山村より竹敷村迄舟三十丁、仁位村より樽ヶ浜迄舟路四里三丁、右之船路ハ、左右ハ山々又ハ浦里ありて大海にハ出す、浪も高からす、眺望好景なる所おほし、殊ニ四里余にハ近し、午上刻鶏知村出立、廿三日の日記にあらまし記したれは略ス、廿丁計行鶏知村之内、弥次郎てハ御立場あり、此あたりより一曲り〳〵坂を上る毎に入江、遠山なと見え好景よし、上りて年ふりし松左右ニありて並木めきたる所十丁余過、峠ニ至る、此辺樹木もなく萱原也、眺望絶景、誠ニたましひ飛揚する計也、此所にて仁田たけ子丑、しらたけ戌亥、朝鮮酉戌に当り見ゆるよしなれと、今日ハ見わかちかたし、其外諸山、諸島記するに暇あらず、此所より十文字御休所迄八丁計あり、十文字御休所、左ハ七曲り峠にて府中へ下坂也、右へゆく道もあり、七曲峠、前月の日記に見

仁田浦　田畑多し

朝鮮見ゆ

いと〳〵くやし

新田よほと見ゆ

吉田村

二丁計行、枝川の橋をわたり右ハ大川左ハ山也、左へ川をはなれ一丁より、又川はたに出、いさゝか川はたへ下り又上る、川を右に見一丁計行、此辺より入江右三丁計に見ゆ、仁田浦といふ、瀬田辺より此辺迄田畑多し、昨日の深山村辺と此あたり程田畑多きハ当国にてハ見す、畑中に御立場あり、是より谷間也、二十丁余次第に上る、両山高く木しけりたり、谷川をわたる事十二三度、左の谷へ上る、弓坂、上り五六丁、いたく険き所ハなし、峠に御立場あり、山のせ伝ひにゆき、それより十丁計下り谷合也、谷川を六たひわたり畑に御立場あり、ふるのさいといふ、小橋をわたり、鹿見村、海辺也、人家三十軒、左ハ山高く右ハ海にそい廻る、なか坂上り一丁下り三十間計、海の出き熊野権現、八幡なとの社のよし、鳥居見ゆ、久原（クハラ）村、人家廿五軒、入江の辺也、村の出口御立場有、新兵衛川といふ、畑あり、谷川九たひわたり五丁計左へ上り右へ曲り谷川を渡る、渡る所の下に小き瀧あり、くろちやう瀧といふ、黒鳥坂、上り十丁余、峠に御休所あり、いと高き所也、遠景眺望よし、申酉に朝鮮見ゆ、わに浦辺にて見しよりハいとかすかに見ゆ、此山の申ノ方出さきに木坂八幡あり、凡壱里半計ありと、山へたゝり、社地の森いさゝか見ゆるのミ也、此社辺海辺の石悉く八ノ字ほりたるか如くありと、一字あるもあり、二字三字のもありと、此石を拾ひ帰る時ハ、かならす煩ふ事也とて、当国の人さへ恐れて取ものなしと、他国のもの此石を持ゆく時ハ種々の災難ありと、土人恐れていひ聞する也、其石ひと目見まほしけれと所持せしものもなく、おのれもやん事なき旅にしあれは、行見る事もならす、いと〳〵くやし、山のせ二丁計通り二丁計左へ坂を下り、右三丁よ又上る、峰伝ひ一丁余行、左ノ谷へ下る、左右山高し、谷川十四五度わたる、此谷のさま三折坂に大かたにたり、畑あり人家ある所に出、廿五丁計也、橋を左ニそひ行、川はゝ十間位、三根（ミネ）村、三根村いと長し、御立場あり、その前いさゝか上下の坂あり、左右人家おほし、北より南へ長き村也、高、人家五十五軒、同村之内左山、右ハ川にていさゝか上下す、此辺新田よほと見ゆ、海を埋めし也、近来の事と思はる、右二丁計遠く村ノ下に入海見ゆ、左の谷にいり坂を上る、大屋峠、上り十丁よいと険し、黒鳥とハたかへり、上りて御立場あり、おほや峠の穴竹といふ所、山のせを十丁よゆき下り、吉田村也、下り坂より右ニ人家見ゆ、吉田村、人家、左右人家あり、谷間の杉山の坂を上る、八わり坂、上り六七丁、けはしといふ迄□なし、峠に御休所あり、下り七八丁さかし半より下ハ杉山也、谷へ下り麦畑田もあり、田村、谷間也、人家三十五軒、通路ハ人家の多き所迄ハゆかず、左へ橋を渡りて行也、御立場あり、左ノ谷間三四丁、谷川五六度渡る、右の谷へ転じ一丁計行、左へ曲りまなく坂也、十善寺坂、上り五丁計、峠のうへ御立場あり、下り坂五六丁、谷川九たひわたり十たひめ、右よりおつる小溝を渡り、三度かち渡りに小川を越、右の方へいさゝか上り下りす、此辺畑也、三丁計行、橋を渡り六丁計行、左へ橋をわたり旅宿也、うしろ南ノ方ハ山にて前ハ田あり、川なかる、瀬田村よりし、見村迄一里廿八丁半、鹿見村より久原村へ六丁半、久原村より三根

朝鮮見ゆ

安芸、周防辺の如し

当国一の高山

仁田郷

五月朔日

り一里半計、次第に上り来ければ急ならす、かつ格別高くも覚えす、伊奈坂といふ、一にハ□□□坂といへり、峠に御立場あり、朝鮮見ゆ、下り十丁、内五丁計坂険しく五六丁ハ畑なり、谷広からす、したる村入口に御立場あり、したる村ハ入江の辺なり、未申より入海也、したる村を右に見、左の方へ坂を上る、くひり坂といふ、二丁計、まなく谷間に下り三丁計にて畑あり、伊奈村、高、人家、入江の辺也、申酉より入海也、東ノ方の海辺へさし出たる岩山十余丈もきり岸高く一大石の如し、美観也、小祠あり、海辺御立場あり、村中を通り右へ小川の橋をわたり、谷にいり坂を上る四丁計、あいの坂といふ、峠に御休所あり、下り二丁余、いと高し、坂を下り畑あり、海辺へ出たり、左の山に住吉明神の社地あり、森かう〳〵しけれと小社也、海辺御立場あり、越高（コシタカ）村、高、人家、海辺也、村中を通り小川の橋を三たひわたる、谷間なれと広く田畑もあ□□□へ高き山のいたゝき迄畑になしたり、安芸、周防辺の如し、当国にハめつらし、村より坂の上り口迄三丁計、しをりのだん、此峠むつごうといふよし、しをりのだんハこれより海辺の山のいたゝきを越るなるよし、いとけはしけれは今の道につくりかへたりと、いたゝきに御休所しつらへあり、上り十五六丁もあらん、さかし道の左右樹木すくなく暑さ堪かたし、眺望至てよし、朝鮮酉戌亥、御嶽、寅の方近く見ゆ、ミたけハ土人ハにたんたけと云り、仁田郷の山なれば、仁田嶽なるへし、山のかたち富士に似て真黒に木しけりたり、頂に蔵王権現を祭れりと、宮ハなく石に幣をおさめたるのミ也と、案内のもの語れり、当国一の高山也、ふるさと峠辺にて見しとハ、山のさま大きに違へり、此所にて府中ハ午に当ル、有明山幽に見ゆ、山のせを午さして六七丁行、此山のせより右山間入江の方にミそ村の人家目下に見ゆ、左ニ仁田郷の村も目下に見ゆ、左へ下り坂いと険しく長し、両山の間也、十丁よ下りてより谷水の流れを五たひ計下り十丁計、此辺より畑も見ゆ、都合廿丁計、五六丁よりハ谷間広く仁田郷の居村也、田畑の多くある所を過小川の橋をわたり、川十間二丁計ゆき、未上刻瀬田村着、恵子よりしたる村迄二里二丁半、したる村よりいな村迄十三丁、伊奈村よりこしたか村迄十八丁半、越高村より瀬田村迄一里、深山村より瀬田村三里三十四丁、瀬田村、高六十一石五斗、人家、瀬田村ハ仁田郷也、宮原村、樫滝村、世田村、中くるす村、右四ヶ村道より見ゆ、山陰に下里村、会所村、右六ヶ村仁田といふ、伊奈郷内也

天保九戊戌年五月　小

朔日辛丑

朝より晴れしか、終日いさゝかくもらす、巳より南風吹しかはけしからす、いとあつし、暁よりおき出て支度し、六ツ半時出立也、宿より二丁行、左より流るゝ枝川の橋をわたり、大川ハ右也、川はゝ十二三間、右に大川を見て

対州家の屋敷
役人多く詰

坂路多く険しき

深山村

閏四月廿九日

伊奈郷

又東へ曲れは内の門あり、冠木門也、左ハ塀にて対州家の屋敷、右ハ百姓家なり、門より内、東西一丁半南北一丁計り、南向に北ノ山下五間三間くらひの番所あり、役人多く詰居たり、同し並ひに六間ニ弐間くらひの家一軒、七間ニ弐間くらひの家一軒、西向門ありて其中に家あり、何かしらす、役人五人、徒士拾人、足軽弐拾人出て下座、番所の前ハ入江也、此所より大海ハ見えす、出崎番所見分ニこの所より舟ニて御出也、入江ハ西より居村の東迄ふかく入たり、番所の辺にてハ百間も広からん、海をへたてゝ向に九尺四方計のねすの番所とてあり、番所のうしろ向の山共高し、五六丁もあらん、うしろの方□山の中にも高き山の海へ出はりたる所に遠見番所あるよし、七八丁ありと、此所より見へす見分なし、もとの道を帰り村中より右へ曲り、左人家右ハ入江の辺を通り、橋をわたり二三丁ゆき左右畑なり、坂を上る、五六丁険し、御立場あり、峠より右の山にそひ二丁計下り、両山の間を下り廿丁計谷川水の小橋を十たひ余わたり右へ上る、坂なし峠、十丁余いと険し、右へ上り少シ左へ上りはてゝ峠也、御休所あり、左右深谷にて未申さして山のをゝいさゝか上り下りしてゆき廿丁よ行、御休所あり、三四丁行、深山村目下に見ゆ、此辺より下り坂也、大(オヽ)とうそね峠といふよし、つゝらをりに下る、いと〳〵さかし、此坂にて見わたすに、深山の辺一郷、東西に長サ一里計横も広き谷にて、田畑うち続き見ゆ、当国へ入しよりかはかり開けし里を見ず、申上刻深山村着、今日も坂路多く険しきに村雨強くふり、誠に難義したり、道も遠し、豊村より鰐浦迄廿四丁半、鰐浦より大浦村迄一里七丁半、大浦村より河内村迄七丁、河内村より佐須奈村迄一里廿二丁半、佐須奈村より深山村迄二里十二丁、〆六里一丁半

深山村、対州上県郡、高九拾国、人家、深山村ハ今ハ六ヶ村に分郷したり、その中に上下とわかちたるよし、上三ヶ村深山村・仁(二)田内村・恵(三)子村、下三ヶ村井(四)口村・友(五)屋村・湊(六)村、湊村ハすなはち海辺也、六ヶ村合高、人家弐百

廿九日

朝間くもり、辰上刻よりはれ、終日くもらす、風もふかすいとあつし、辰上刻田子村を出立、二丁よゆき川をわたり、川わたりと書しハ土俵を積て渡せし也、右に流る六七間也、又川二度渡、前に渡りし水と一丁余下にて合流したり、川はゝ六七間、両水合してよりハ十間よの川となれり、二丁計ゆき川のわかれめ、両川をわたり、を越へ左の山にいさゝか上り又下り、川を渡り二丁計行、川、是より三丁計山間也、川一丁計行、此所より右の谷へいる、五丁計の間ニ川五たひわたり、少シ上り又下り、右へ転し深山の谷間を行、一丁計行、よほと広く川三たひ渡り、伊奈郷の境とて案内代ル、此所右の谷と分レあり、水勢右の谷強くわかゆく方よわし、四五丁行川を四度わたり右の谷へ入三丁計行、右ハ萱野にて広し、されと両山都て高し、三丁計行小溝二ツわたる、是より坂五丁計、恵子よ

朝鮮見ゆ

か、未時より又やみし時おほし、巳より東風ふく、烈しからす、辰中刻出立、門前の橋を渡り、十間余にて又橋を左へ渡り、田畑なと有て左右に大松ある所を過、二丁計行橋を渡り一丁計行く、右ノ谷に入、両山高き谷間を、流れを左右に橋又ハかちわたりし、次第に上り三四丁行、左右ニわかれ道あり、なんべかさいといふ所、右へ曲り上り、一丁余にて又一丁計下り、いと狭き谷を右さして次第に上り、一丁計険しき坂を上り峠也、此所より朝鮮見ゆ、もとこえ坂といふ、谷間へ下り鰐浦村ニ至る、峠より二丁計ハ坂也、二三丁ハ麦畑あり、されと谷間いと狭し、広き所にて十間余、鰐浦、入口右ニ御立場あり、人家の中を通り右へ橋を渡り一丁余行、番所ニ至る、外門の前一丁計横廿五六間あり、門外左高札あり、門をいり一丁計ニて又門あり、右山下に番所有、前ハ入江也、此入江西より人家の辺迄入たり、広さ百間計、両岸の大岩削り立たる如くかつ高し、中ノ門の際より遠見番所見分ニ上ル、細き道を屈曲して上ること二丁計、それより西さして山のいたゝきを一丁計行、遠見番所有、二間ニ二間半計、板屋根也、海へ出張たる所、番所の北ノ方大松一本あり、此山樹なし、朝鮮ハ此所より申酉戌亥ニ当り長く見ゆ、鰐浦、高四拾八石六斗、人家

鰐浦

遠見番所

朝鮮へ渡海

朝鮮へ渡海之儀、大かた佐須奈浦より出入するよし、なれと里数の近きハ此所第一ニ見ゆる也、昨日の所にもいひし如く二十里計と思はる、前年、測量御用伊能氏此所にて見わたせし時、朝鮮迄廿六里十丁余ありといはれしと、対州家の中老ひそかに語られたり、さも有べし

測量御用伊能氏

もとの道に帰り、なんべがさいのわかれ道、右の谷間ニいり両山高し、三丁計小橋三ツ渡ル、左ノ谷へ曲り三丁計行坂あり、上り三丁計、遠望するに山計にて海見へす、亀坂と云坂を上り右山にそひ左ハ谷、三丁計、両山の間四丁計下り畑もあり、大浦村、高弐拾石、人家廿八丁軒、村の入口弓立松とてあり、人家の中を通り左の谷間へ曲り上る、まなく下る、上り二丁下り四丁計也、小川をわたり、河内村、人家廿軒余、河内村ハ入海の辺也、小川の橋を渡り畑あり、道ノ左平地に椿明神とて椿しげりたる森あり、この椿の社地へ入しものハ帰りし事なしと人夫のもの語れり、虚実はかりかたし、されと下総国葛飾郡八幡しらすの藪と同日の談なれは、暫く記しおく也、左右高山の谷間にいり、小橋六たひ、右の山にそひ険しき坂を上り四五丁、山の背を通り坂を上り三丁、つや峠といふ、又ハ茶屋くまともいふ、御休所あり、いさゝか上り峰伝ひを左さまにゆき谷間に下る、三折（ミオリ）坂といふ、下り廿丁計にて畑ある所ニ出、いさゝか畑ある谷間を下り段々広くなり畑多し、佐須奈村の地也、佐須奈村、高、人家八十軒、村にいり橋を渡り、左へゆき観音寺といふ寺にて昼食、佐須奈村ハ西南入江の辺より北東の山下かけ家多く、其外散在してもあるよし、朝鮮の渡海此所に限れりと、されと鰐浦より此所海上遠きやう也、番所、入江に向ひ北をうしろに立たり、村中を通り高札場あり、外門あり冠木門、門より中にも民家右ニ並ひたてり、つきあたり右へ曲り

佐須奈村

朝鮮の渡海

田多く見ゆ

比田勝村

誠に険し

対州上県　朝鮮

朝鮮見ゆ

閏四月廿八日

豊村

二丁計にて坂、上り二丁余下り同し、大増村、東より入海、海辺に人家あり、三丁計村中を通り又海辺也、右ハ入海左ハ岩石の山の腰也、御立場有、左山きは右ハ海、二丁計ニて左の山にそひ、右ハ畑也、いさゝか森を通り田畑のある所ニいづ、右ハ入江也、二丁計行、左山右は入江なり、十間計岩間の道を通り、又海辺ニ出づ、左ハ山右ハ入江なり、浜久須村、入海の端也、左山ノ根、右ハ小川にそひ二丁計行、橋をわたり一丁計川を左にして行、左山右田畑、御立場あり、一丁余にて浜くすの村中を通る、右に田多く見ゆ、是ハ入江を埋めし新田也、今の道八九丁もあらん、なれど海はたを通れば一丁余也、右ハ入江、左山を一丁よ行、切通シめきたる所なと過、田畑ある所ニ出小川を渡り、植野原昼食、畑中ニあり、一丁余行、右の谷にいり坂を上る、山上に御立場あり、山のせを通り下り坂也険し、八丁計谷間の畑なとある所を行、橋を渡り、左熊野宮の社あり、石花表有、橋を渡り御立場あり、比田勝村、村中を通り入江の端を過坂を上り又下る、上り二丁下りも同し、人家あり、ふるさと村、ひたかつ村の枝郷のよし、左ニ山王権現の山あり、いと高き山也、山の中腹よりハ木しけれり、真黒に見ゆ、海へさし出たる山也、此山の出さき西泊村あり、浦あり、道より山かけにて見へず、ふるさと村ハ、家、小川にそひ左ノ谷へ上る、左山□□四五丁行、谷の奥より右の山へ上る、誠に険し、めくしり峠といふ、ふるさと峠ともいふ、上り七八丁、四方眺望よし、御立場あり、辰巳に仁田ヶ嶽見ゆ、対州上県ニ並ひなく高し、申ノ方山合より朝鮮いさゝか見ゆ、左ノ谷へ出る、二丁計ハ険しけれと谷間を次第に下れは険しからす、右へ転して下り畑なとある所を四五丁ゆき、小橋をわたり、和泉村、入江の端也、海ハ丑寅より入たり、村はつれより坂也、坂の上り口御立場有、右の山にそひ上る四五丁、山のせを三四丁行、それより険し□丁、梶ヶ曽根峠、土人ハかにがそね峠といふやうに聞ゆ、訛れるなるへし、ふるさと峠より高きやう也、申酉ノ方山間より朝鮮見ゆ、ふるさと峠よりハ増りて見ゆ、此立場よりいさゝか上り頂迄ハ至らず、いたゝきを右に見て行左も高き所あり、一丁計下り朝鮮国、誠に鮮明に見ゆ、酉戌亥ニ当ル、未申より南ノ方ハ当国の山々にさゝへられて見えす、其見ゆる所いと長し、誠に近く見ゆるなり、廿里はかりもあらんかと思はる、下り坂十丁計険し、坂より豊村目ノ下に見え、其外当国の出崎又ハ島々なとも見え景よし、下れは豊村也、琴浦村より舟志村迄二里六丁半、舟志村より大増村迄廿丁半、大増村より浜くす村迄廿丁、浜久須村より比田勝村迄一里半、比田勝村より泉村迄一里一丁半、泉村より豊村迄廿一丁、琴村より豊村迄、合六里十五丁半、豊村、上県郡、高四拾五石五斗、人家四拾五軒、豊村ハ入江の奥に村居あり、子丑より入海也

廿八日

夜あけ、しはしありて雨ふり出たりしか、いさゝかふりつやみつせしか、辰下刻より降まさり巳下刻より強かりし

谷ふかく峰高く
小鹿村
琴村
閏四月廿七日
いと暑し
領主の書上
船志村

山水桶あり御休、坂を上る事十丁計、四丁計ハ次第上り、六七丁ハけはし、櫛の峰といふ、左右谷ふかく峰高く狭く長し、遠景佳興也、例の幕引廻し、毛氈なと敷てあり、峰通り二丁計にて山のを谷間なとを廿丁余と思はるゝ、計下り、畑ある所へ上り、谷間を右に行、小川三度計渡□□、小鹿村に至る、小鹿村（ヲシカ）、南北山□て西ノ谷の方畑あり、東ハ入江、村の辺迄いり来たり、御立場有、村はつれ海辺也、大石の平らなるを三ツ敷て御駕すへ所に拵へおけり、人家の辺より上り小鹿坂上り二丁計、右に海を見て左の山にそひ行て下る、二丁余入江の端也、左ノ谷間を行、右の山根にそひ上る、けわしき所あり、上り十丁よもあらん、峠に御立場あり、谷間を下る也、十丁余下り海辺也、御立場有、二三丁行、一重（ヒトヘ）村、入江に近く人家有、海辺にハ屋並せす、家見くるし、村中小川あり、橋を渡り間なく上ル、地蔵坂、さいのかミ坂ともいふよし、上り三四丁、下りも同じ、葦見（アシミ）村、人家、入江の辺ニあり、道より村ハ右也、海を一丁余はなれて通る、左へ田畑ある所を三丁計ゆき、右ノ方へ曲り六七丁上る、ひわくり坂といふ、いはつ島対州の黒島なとも見ゆ、御立場あり、いさゝか上り左の山にそひ五丁計行てより、右の山の根を八丁計下る、坂の中程よりハ琴村目ノ下に見へ、入江もくま〳〵迄見へて景よし、海の出さき入江こしに琴崎明神ノ森、鳥居なとも見ゆ、此坂やがてきん坂といふよし、佐賀村よりしたか村迄一里三丁、したか村より小鹿村迄一り三十丁半、小鹿村より一重村まで廿八丁、一重村よりあし見村迄八丁、葦見村より琴村迄廿丁半、佐賀村より琴村迄合四里廿丁、琴村、上県郡、高四拾石九斗、家数三拾五軒、当村江教寺と云る寺の門前、小社の辺に銀杏の大木あり、九抱半、枝のわかれめにて十三四抱もあらん、当国一の大木也、惜いかな高サ一丈もなく枝にわかれたり

廿七日

朝間くもり、辰中刻より晴たれと、とかくくもりかち也、されといと暑し、辰より南風ふく、つよからす、辰中刻琴村出立、村中を通、右の小川にそひ上ル三丁計り、小川を渡り、右の山にうつり谷間の水を左に低く見て、次第に上り四五丁、谷間三四丁、右の山に上る三四丁左右杉木、どう坂といふ、峠に御立場あり、谷間に下る六七丁、谷川の流れを六たひ渡り、杉山の中を通り少シ麦畑有、左よき竹薮見ゆ、橋三ツわたり左より流るゝ谷川の橋をわたり、又橋を四たひ渡り畑も見ゆ多からす、峠よりこなた左右山高く谷ニいくつといふ事なく谷水流れ出たり、御休所あり、幕毛氈なと例のやう也、琴村の内中原村といふ所のよしいへと、領主の書上并案内等ハ舟志村の地也と云り、いつれならん、中はるハ人居少シ、左半丁計ニ見ゆ、御休所の辺より谷川広し十間計、橋二ツ渡り、左よりなかれ出る谷川左へ曲る、御休所より一丁、右に船志村、入江の辺にあり、舟も多く見ゆ、右の谷へ入坂を上る、こます峠上り三丁計、右のせ通りを行、御立場あり、下り坂険し、二丁余、右ハ入海也、人家なし、田畑のある所

やい川坂と云、五六丁下り御立場あり、山水桶あり御休なし、半丁計下り左へ谷を行十丁計いと狭し、大ひら峠、三四丁の上り鑓川村の地也、御立場あり御休、二三十間行、山の背を通る、左右に海見ゆ、八丁計下り険しき所あり、右ハ山きは左ハ小川、川は丶四五間、山下七八丁行、御立場有、曽村の入口也、村水桶あり御休、橋をわたり、曽村、左ハ家近く入江めくり、かなたこなた家よほと見へ、田畑もきのふの道にハ見えぬはかりあり、村中より左山間へ入り、五六丁行坂を上る三四丁、山のせを通る、右入海眼下に見へ、島々崎々いくらも見え好景也、四五丁行御休所あり、例の幕なと物してあり、御休あり、いこひ曽根と云、十丁計山の背を行、櫛のは崎といふ、左の谷へ下る、四丁計の坂也険し、左右田、二丁計行小川の橋を渡る、橋より下ハ入江にて広し、櫛村、人家廿軒、両山のあはひにて一方ハ入海也、家ハ道ノ左右ニ有、右ノ谷間ニ入、村水桶あり御休なし、右の山へ上る、上り五丁下り三丁計、右一丁よはなれ入海見ゆ、広からず、左ノ山間を行、いと狭く両山高し、ざりご峠、上り六七丁、至てけはしき所二丁計あり、左ノ山にそひ上る坂也、峠の上右ニ大海并入江目下に見え、佐賀の人家も浦も足もとのやうに見おろさるゝ、海中廿丁計沖に釜蓋瀬とて見ゆ、浪の上に小く丸く黒く釜蓋のさまに見ゆ、うき島也と土人ハ語れり、信しかたし、遠望よし、山のせを二丁余行御休所有、村水桶あり御休、下り坂険し四五丁もあらん、右入江近く左ハ畑、坂を下り土橋をわたりて海と畑との間を行事一丁余也、しなへ峠、上り屈曲して二丁計高からす、上りはてゝ左の山にそひ一丁計平らなる所を行、坂三四十間下り、又左ノ山の腰一丁計行てより次第に下る也、下りて橋を渡り佐賀村也、大山村より小船越迄十九丁半、小船越村より和坂村迄一里三十五丁、遠し、和坂村より曽村迄一里廿七丁半遠し、曽村より櫛村迄廿五丁、櫛村より佐賀村迄三十四丁半、此間わきて遠し、大山村より佐賀村迄都合五里三十三丁半、佐賀村、上県郡三根郷、高六拾一石弐斗、家数三拾五間

曽村

遠望よし

佐賀村

閏四月廿六日

畑なとなし

廿六日

朝間くもり辰上刻より晴たれと時々くもり、いとのとか也、巳より南風ふきたれと烈しからす、辰上刻佐賀村を出て東北さして行、左右田畑、小川八たひ渡り右の谷間ニいる、是より畑なとなし、二丁計ゆき坂を上る、しかま峠、上り三四丁、峠より一丁計下りさまに山のせをゆく、御立場あり山水桶あり御休、右ニ海見ゆ、七曲坂、四五丁険し、下れば谷合也、御立場あり村水桶有御休、したか村、人家弐拾軒余、東南海辺也、田畑もあり、左右人家あり、橋を渡り二丁余行、右の谷ニ入、此所左右に谷あり、水も左右より流れ出る也、川は丶四間計、右ノ方水勢強し、一丁よ行橋あり、両山の間を十丁計行く、左ノ山にそひ上る、七八丁上り少シ下り、小川の橋を渡り右にそひ上る、此辺四方高き峰いくつも待ちたてり、いつれも松繁りたり、いささかハ下りさまの所もあり、四丁計行御立場あり、

大山村

閏四月廿四日

土用干の如し

閏四月廿五日

小船越村

よき家なし

与良郷　仁位郷

けわしき坂

大船越村より大山村迄一里廿二丁、此間大かた山のせを伝ひ行、坂いくつともなく有て、道路難所、それのミならす至て遠し、今日の行程及はん限りハ詳記せんと兼て思ひ構へしに、風雨甚しく、衣服通りて肌さへぬれし程なれは、途中採筆せん事及ふへくもあらす、されは、大山村の旅宿にて思ひ出つゝかはかりも記ス、大山村（オヤマ）、対馬国下県郡与良郷、高弐拾石、人家廿三軒、御本陣、郷士小田金左衛門宅、仮亭主横瀬源左衛門

廿四日

朝間くもりしか、辰中刻より日出て快晴、未上刻より時々いさゝかくもり風もふかす、誠に暑し、今日出立すへき所なれと昨日の大雨、一同の荷物悉くぬれ通りけれは、衣類并諸道具ほしたり、土用干の如し

廿五日

朝間雨やみしか、辰の上刻より又ふり出て次第に強く、午よりよわり、未申時頃空はれやかて日出しか、とかく陰りかち也、朝間東北風、午より南風となれり、烈しからす、暁よりおき出て支度せしか、辰中刻出立也、昨日来りし道に帰り、本陣□り三軒目の家の脇左へ上り、あくたかん坂と云、上り一丁余下りも同、左ハ入江右ハ山の腰、田なとある所を通り一丁半計、さいのかん坂、あとより険し、上りはてゝすくに下り一丁半余の上りにて下りも同し、谷間より左右長き谷の田畑ある所を横きり、谷間より坂を上る、二丁余、筆松峠といふ、山のせ五六丁行下り坂あり、下り坂のうへ籠立場あり、三丁計下れは小舟越也、小船越村、右ハ入海也、海辺に家なみ立り、多からす、よき家なし、左の谷間へ二丁計ゆき坂を上る、小船越峠也、上り一丁半計、坂を上れは右ニ入海見ゆ、五六丁行、左ニ海あり、島々多く見え山間へかなたこなたより入江あり、景よし、一丁計行、右海目ノ下ニ見ゆ、山間少シ計也、山のせを通り四十間計坂を下り一丁計行、坂を上る、凡三十間ほと、一丁計行、又小坂を下る、御立場あり、村水桶あり御休、此所をさいの神といふ、いさゝか下り、左に海見ゆ、間なく坂あり、上り五十間計、右高き山の峯、左ハ谷深きを、右の山ノ腰を一丁計ゆき、三四十間下り左の山にそひ五六丁行、下り坂あり二丁計、左右田、三丁計行坂を上りやかて下り、左入江の辺を通り、入江のはた三十間計、右ハ田にて東の山の根にそひゆく、五六丁行、左の少シの谷間に御休所あり、小屋をしつらへまくをはり、毛氈なと敷てあり、此所を長そねといふ、一丁余行、左ノ谷間に入て上る、二丁斗、峠より一丁計下り、左右高き山の狭き所を行、与良郷と仁位郷との境あり、境より三四丁行、右高き所に小き宮あり、小橋を渡、和坂村、小川六たひ渡り左右山也、川端に御立場あり、村水桶あり、御休、夫より川十二たひ渡、内村四所あり、谷間を左へ一丁計いりけわしき坂を上り、一丁半計又下る、

城主の上屋敷

険しき所多し

鶏知村

大船越村

堀切の橋

大かた山間

尺、其溝の右の水辺に桜を植続けたり、左右共家中屋しき、次ニ城主の上屋敷とてあり、古を上屋敷と唱へ又ハ館とよへり、南岳院の隣りなるを城とよべり、門前ニ家老并家中等大勢出て下座、上屋敷を右ニ石垣の下を通り、間なく川端に出たり、川を右ニ見て六七丁行、谷二つにわかれ、川も二つにわかれたり、此辺をと石渕といふ、此川ハ上屋敷の東を流れ海におつ、左の谷より出る川の小橋を渡り川を右に見、次第に上る、岩伝ひ落る水のさま佳景の所々あり、府中ハ湊より此辺迄東西ハ山高く、南より北へ谷間の形に随ひ家並立り、廿四五丁もあらん、東西ハ四五丁又ハ一丁余の所もあり、七曲り峠、なゝまかりと唱へたれと、五十曲りもあらん、左の高き山の腰をあやかけに道をつけたり、樹木しけれり、上り廿丁計もあらん、険しき所多し、上りはてゝ野原に出、平なる所に御休所しつらひおけり、十文字といへる所也、此所南宝村、高麗村、妙村入会地之由、小屋三軒造りあり、こゝに至りし頃、風雨の強き事言語に述かたし、小屋の内も外も替りし事なし、六七間前後は見え兼る雲雨也、上り下り凡三十丁計、十丁計ハ上り下り也、此辺眺望至てよしとなん、廿丁計ハ下り也、並木めきたる所もあり、左右深谷、此下り坂を亀坂といふ、十文字より三十丁計行御立場あり、小屋もなし、山水桶あり、大雨ニ付暫し立て息をつきしまゝにて行、又下り七八丁計、いと狭き谷にをりたり、いさゝか行ば右ニ田あり、左の山にそひ、又ハ谷間の溝にそひ、左右に田地を見て行、此辺両山の間田場凡一丁計也、鶏知村の人家所々に有、けち村の入口御立場あり御休なし、小川の橋を渡り、道より廿間余左、吉野伝三郎方ニ而弁当、谷間通り此所迄十丁余、鶏知村、人家五十軒余、伝三郎宅を出て一丁余行、左の山と山の間へ転し山のかたそは左ニ田を見て行、此所帰路の道と岐路あり、右へ行、十丁余行、右谷間、畑なとある所を行、左右山高く細き谷間へ三十丁計行、椎坂とて有、上下二丁計坂ノ上御立場あり御休なし、椎坂よりさき坂二□あり、上下二三丁、険し、堀切ノ橋、橋十五六間、平生ハ舟渡のよし、巡見ニ付あらたに仮橋を造りたるよし、延宝中ニ領主の存寄を以て、堀切たれは今もほりきりと唱ふとなん、橋より右ハ一丁計にて大海也、海岸左右岩山にて古松繁り、宮も有へく思□□左ハ入江也、されと此所より一里計ハ格別広からすと語れり、橋をわたり左ニ御休所しつらひおけり、小屋二三軒、幕なと打廻しあり、売菓子と有、御休、大船越村、堀切の橋を渡り一丁計行、左ニ大船越村を見、船越村ハ水辺に並ひつゝけり、まづしき家也、右の山にそひいさゝか上り五六丁ゆき坂あり、坂ノ上御立場あり、御休なし、上り二丁余の坂也、山のせ通りを行、左所々山間に入江見へ、右にも入江見ゆ、入江の辺に人家見ゆ、くすぼ村といふよし、山上十丁余行、坂を下り海辺にいづ、わづか畑ある所十間計にて又上る、少しつゝ上下いくたひとなく谷底迄下る所もあり、大かたハ山の背を通り行也、所々左右に入海見ゆ、右ハ大海に近し、島もあり、府中より鶏知村迄二里廿弐丁半、府中を過れは七曲峠、亀坂なとにて鶏知村近く谷間平地十丁余、鶏知村より大船越村まで一里十丁、坂も三つあり、近く覚ゆ、大かた山間也、

朝鮮信使　以酊庵

林木うるはしさ

対馬守殿使者

朝鮮書契

以酊庵由緒

閏四月廿三日

に国分寺見ゆる、是文化度朝鮮信使を御請被遊候所也、本堂額大きく高く見ゆ、地形ハ町より少し高し、南ハ以酊庵ニ隣り、北ハ一丁余を隔て城也、城ハ谷間にて南岳院より低し、櫓なと見ゆ、東一方ひらけて三方高き山也、そか中に西より北かけいと高し、有明山ハ西ニ当ル、城中も古木繁り三方の山ハ古松しげり、林木うるはしさ画も及ひかたき迄也、以酊庵ハ前ハ石垣二丈余高く築立、府中の町眼下に見おろさるゝ也、境内至て狭く普請美麗にあらす、今日来りし人、松平肥前守殿付添原口弥左衛門・本吉治部右衛門・田代道碩・納富松入、小笠原佐渡守殿付添村田与一右衛門・金藤六左衛門・倉持求甫・長尾良育、宗対馬守殿付添乾一郎兵衛・幾度小四郎、人馬下知役早田安賀之助、人馬役小田喜一、米田惣之助、対馬守殿使者樋口源左衛門、右京太夫殿使者樋口監物、家老杉村右馬之助、中老格多田采男、医師妻瀬正斎、以酊庵等也

以酊庵の手札

朝鮮書契

御用蒙仰当地　京東福寺

以酊庵へ被下居候　航長老

以酊庵由緒

対馬国与良郷府中以酊庵、往古は当国より住職候所、当国之家老柳原（柳川）豊前朝鮮国之内何之筋有之、御不審を蒙り流罪被仰付、以酊庵も同罪ニ被仰付之、其後寛永十年大猷院様御代深思召を以、京都五山より輪番被仰付、朝鮮之書簡掛り相勤候由、朝鮮図書簡到着之節、封之まゝ以酊庵え請取、開封之上国主え相渡候由、又此方御用向、国主より被申聞候趣を、以酊庵ニて取調差出候由、当所は御目付と申も無之ニ付、朝鮮国并当国之政務等之儀、品ニより老中え直々及言上候由、国主より百石給候由、此以酊庵、宗家取扱之儀家老より手重の之由、今日、中老多田采男と玄関ニて出会候得共、采男方ニて上席ヲ譲候

廿三日

夜あけしはしありて雨ふり出、辰時やみしか、又ふり出て時々よわりし時ハあれと、終日いと甚し、辰より東北風ふき出ていと烈し、風雨共強弱の時ハあれと甚しき時ハ歩行なり兼る計也、辰上刻曽我様・近藤様と御同道南岳院ニて御待合以酊庵え御出、辰下刻御出立、南岳院より下り番所前より左の方、町を通り橋を渡り、左右家中町、家老中なと多く居宅広く構へたる多し、左八幡宮、道はたに石鳥居あり頗大き也、八幡宮と額あり、宮ハ道より一丁計山にそひ、少シ高き所にあり、小橋三ツ渡り、左右同しく家中宅也、□より□□、道の真中を水流れ、はゞ八九

大概赤土
領主の勧農

閏四月廿一日
鍋島家

小笠原家　対州家
松浦家　群集

閏四月廿二日
御本陣南岳院

着舟　府中浦

勝本迄の間大概赤土也、壱岐国ハ南ノ方海辺より勝本ニ至迄目路のかきり大かた畑になしたり、高き山といへと七八分迄ハ畑なり、田ハすくなきやう也、山林を畑になしたる精功ハ他国にすくれし事、称するにあまれり、領主の勧農思ひ知れたり

廿一日

朝より快晴、申よりいさゝかくもるようなれと、大海中のしほ煙りにや、朝より西南風よき程に吹しか、午より酉ノ方ニ風まはり夕かたやみたり、未明よりおき出て支度す、六ツ半時頃、鍋島家付廻り原口弥左衛門、船奉行本吉治部右衛門来て、今日も順風ニ無之出船無覚束旨申聞候、然所、今日は快晴ニも有之、既ニ乗舟之心組、夫々支度致居候間、真向之逆風ニも無之候ハヽ出船頼入度旨申談候所、右様迄被思召立候義ニ候ハヽ、是非出船可申付候、乍去天気風向共見分兼候間、様子次第海中より漕戻ニ可相成哉も難計旨申聞候、出帆之上模様次第乗戻候共少も不苦候間、早速乗舟可致旨懸合致し、其段近藤様等えも文通致ス、右様押て出船懸合候所、追々風も宜敷、夜分迄ニ渡海候事、鍋島家之もの共一同感服仕候旨、明日申聞候也、五ツ半時、御三方様御乗船、鍋島家、小笠原家、対州家、松浦家等より付廻役人并医師等参ル、出船之節、山々海辺一面に見物之もの群集、龍ノ島を出はなれ帆をあけ間なく対州の高山雲かと思ふはかり幽に見ゆ、四五里出しより次第に山嶽のさま分明に見え行也、海中にて見れは国の南北短く見ゆ、かつ東ノ方はなれ島所々見ゆ、さらに対州近く成行に随ひ、島にハあらて続きたつ国内にしらるゝ也、島と見えしハ高き山々也、海と見えしハ低き所也、海より見れは西南の方山高く、東北ノ方山低く見ゆる也、昨日若宮島にて当国戌亥に見しか、東北の方低き方ハ見へねは、北ニ当るなるべし、壱岐にて見ゆる所ハ西南ノ方にて国ノ四分計也、此事壱岐人なとも心付て咄すものもなかりしが、決して相違ハあらじ、海中より当国遠望の図あり、見るべし、対州より十里計沖にて見し所也、対州へ七八里近くなり日暮たり、風あしく夕暮よりこき舟ニて行、夜ノ九ツ下刻、府中浦ニ着舟、八ツ半時御上陸、本陣に至り、彼是するほとはや夜明たり、府中浦ハ南より十丁余深くいり、南山高く、岩石樹木其さまいとうるはし、夜分なれは分明ならす、帰路の時を期ス、此湊のさま図したれは見へし

廿二日

朝より誠に快晴、終日いさゝかくもらす、朝より南風吹たれと強からず、未時やむ、暁近く御着なれは枕とるひまなし、早朝より使者多く来たり、御本陣南岳院ハ東に向ひ、いと高く城下町目下に見おろさるゝ也、真向ひの山下

閏四月廿日

壱岐

勝本浦　田多し

【表紙】

自肥前呼子
至五島福江

〔西海道日記　三〕

（※閏四月十日以降の日付は廿日の後半より始まる。呼子～壱岐の巡見部分は欠損。製本する時、すでにその間の記事を記した部分は紛失していたと思われる）

所也、出さきより少シ奥へいり魚釣山あり、頂に松林ありて黒く見ゆ、竹ノ辻に次たる当国の高山也と語れと、さのミ高からす、をろ島　卯辰、五島　西、大ふたかみ　酉、こふたかみ　戌、おぼのはな　酉、本宮のはな　申、壱岐ハ長島、大島又ハ沖の島と云、はる島と三島あり、いつれも人家又ハ畑なとあり、外ニヒラ島、ツクエ島とて小島二ツ三ツあり、高サ六七尺より一丈迄の島也、人家樹木もなし、冬の浪高き頃ハ島の上を浪うち越と語れり、はる島より沖ノ方ニ有、武生水村より勝本浦迄の内、物部村より布気村までハ見渡す所田多し、畑ハ勿論なり、布気村よりハ左右松林のミにて田畑ハ遠し、可須村よりハ畑多し、呼子より渡りし時見通し浜辺の畑、郷ノ浦より勝本まで之道筋ハ国中（クニナカ）とよべど、左ノ方海へ近し、出さきハあれど廿丁位にて海也、西ノ方ニよりたり、武生水より

閏四月八日

風あしく

鯨をとる道具

八日

朝間くもり、辰上刻いさゝか日かけみえしか、まなく陰りたり、午よりはれ、未上刻より天気よし、朝より西風ふく、はけしからす、今夕にも乗込べしとて荷物積入しか、八ツ時頃ニ至り、沖あひあしくとて断りありけれは乗ず

九日

朝よりくもり、巳より晴たれと時々くもり、朝より西北風吹てやます、昼より夜かけいと冷気也、今日も風あしくとて船出さす、午下刻鯨をとる道具を取よせ、御覧あり、其くしらとるさまを尋ねしに、其事実別に書つめ置べきよし、和田氏の申さるにつき、一小冊を書集めたり

十日

朝より快晴、終日くもらす、朝より西南風ふく、つよからす、今日も冷気なりき

畑多し

佐志村　田畑広し

いと険し

馬部村

朝鮮征伐

谷間に田地

打上村

名古屋の城山　呼子浦

町いと狭し

閏四月七日

いみ日　滞留

ツ見ゆ、物見なとにや、海へさし出たる石垣のさま、城主にも似す、広大也、船を上れは御立場あり、幕引まわしあり、御三方御待合のうへ順々御出立、新堀町、大石町、魚屋町、京町、此町より見付を入、中町、刀町、新町、右は城下通り筋の町名也、名古屋口の見付を出て唐津枝郷、此枝郷左右ニ家いさゝかあれと至て貧し、畑多しむきを植、双子、人家少シあり、右ハ海辺也、松長く続き並木のやうニ見ゆ、道より二三丁隔りたり、左へ一転し、中山峠ニ上る、坂の中程迄ハ田ニなしたり、中山峠、上り七八丁計、下り八九丁もあらん、山間を下る也、険しからす、佐志村、右ハ山近く、左ハ田畑広し、村の中程ニ御休所しつらひあり、御昼食、領主より幕□□回しもふけおけり、浜崎より此所迄二里十三丁、此所より呼子迄二里十八丁、佐志村の出はなれ右ニ並木の広き道あり、さしの本村并とうぼう村なとへ行道のよし、まへ坂峠の中段より小家数百目下ニ見ゆ、これさしの本郷のよし、あらひら峠、一名まへ坂□□、さし村より田地一丁計を過、坂を上る也、上り五六丁いと険し、上りはてゝ御休所あり、馬部（マノハマリ）村、前坂峠を上りてより平地、畑多し、まのはまりよりしやうふ村もいはゝ山の上也、地形尤高し、されど畑ハ勿論田もあり、此辺平地、文禄中朝鮮征伐の時、軍馬揃有し所也といふ、馬部村ハ名古屋のわかれ道あり、左へ行也、名こや道はいさゝか高し、此所より呼子迄一里廿九丁、名古屋迄一里廿三丁、高野（コウノ）村、大久保村、菖蒲（シャウブ）村、此村々人家まはらに有ていさゝか高下あるのみにて、記すべき程の事もなし、谷間に田地みゆ、まるの峠、下り三四丁もあらん、一丁余田地の谷間を通り、さくた峠、二丁計上り也、険しからす、赤土の坂也、打上（ウチアゲ）村、谷間めきたり、人家少々有、□高き所に御休所あり、此所より呼子迄廿八丁、三四丁行ば横竹村也、横竹村、横竹村を過て少し田のある所を通り、畑中を通り呼子ニ下るなり、呼子の下り坂屈曲していと険し、坂の上よりかべ島の内、片島ハ人家呼子の向ひに見ゆ、此所にてハかへ島地続きのやう也、名古屋の城山なとも見ゆ、松浦郡呼子浦、小笠原佐渡守殿領分、高三百一石、家数四百廿九軒、呼子町中町、御本陣庄屋啓右衛門宅、仮亭主芳蔵、呼子浦ハ申酉ハ海岸にて丑寅卯ハ皆山也、町ハ巳午より亥子に立続き□□、町いと狭し、そか中にも少シ□□□□位の所あり、□□中程右ニ天満宮の社あり、町より右高き所に呼子権現の祠あり、両社とも大木の松あり、社地も隣れり、鳥居に日の丸の額あり、右おなし続き高き所に浄土宗西念寺あり、啓右衛門宅ハ左側波戸場の右也、海に臨めり、座敷の縁より海上眼下に見え、好景至極の旅館也

七日

朝間くもり、巳上刻より雨ふり出て□頻にふりしが、未時しはしやみ、ゆふ暮より雨ふり夜半やむ、巳より東風吹しか、夕くれやミたり、今日ハ船人のいみ日也とて、舟出せぬ積りなりしに、まして雨ふり出けれは滞留

浮嶽山
鹿家村
国境
虹の松原　眺望美景
終日見まほしき
浜崎村
対州領
閏四月六日
唐津道
両家の役人
鏡大明神
群書類従
人家よからす　唐津の城

怡土郡吉井村の内也と、浮嶽山久安寺ハ聖武帝の御祈願所、怡土郡十坊七ヶ寺の内、天正年中破却せらる、今ハ枝郷の小名ニ相成、十坊の内清水坊、浮嶽山の麓ニ有之、白山権現の山伏ニて差配之、此辺第一の高山、峠、右愛宕の小宮あり、左鹿家村との境の由杭あり、□□は鹿家村也、谷間の村にて北ノ方海近し、左へ転し右へ険し□坂二三丁上る、せと坂といふ、是鹿家村の地也、此所より左り、高き山の半腹を、右は海を見て七八丁行て海辺に下る也、下りさま、左例の御立場あり、御休、古ハ鹿家村の内長須隈といふ所之由、東海道のさつた峠のさまにほゞ似足り、海より四五丈も高からん、海浜を一丁余行て又坂を上る、是をつゝみ石峠といふ、この峠の上り口の浜ノ際に、つゝみ石とて石をかさねたる上に大きなる石あるをいふ、左ノ方、山のふところを段々に田畑に開きたるが水の流れをこたに川といふ、つゝみ石さして落る也、是筑前国怡土郡、肥前国松浦郡との国境也、まへのせと坂より此坂迄の間姫島、高島、大島なと始め島々、ひれふるやま、唐津ノ城、虹の松原なと遠く近く見え、眺望美景、言語に堪たり、こなひの旅行過日迄にいかばかりの景色をみす、終日見まほしき地景也、つゝみ石峠を下り左にそひ廻り、渕上村に出て玉島川を渡る、渕村ハ通り道に家四五軒あり、本村ハ左の川上に見ゆ、玉島川ハいはゆる松浦川也、川より二丁計行は浜崎村の入口也、浜崎村、対州領、肥前国松浦郡、高七百八拾九石一斗六升、家数百廿五軒、浜崎浦、同、高四百五拾三石六斗六升、家数百五拾一軒、御本陣常吉籐右衛門泊、曽我様、専六、近藤様、江口万太郎、対州領、筑前国怡土郡に八ヶ村、肥前国松浦郡十一村、都合十九ヶ村、高一万六千石、対州御手当地

六日

朝より誠に快晴、いよ〳〵暑かりしか、未下刻よりいさゝくもりたり、西風終日ふきたれと強からす、浜崎村より呼子浦まで四里三十一丁、辰上刻浜崎村を出立也、村の中程右諏訪社あり、村を出て分レ道有、真直に行は長崎道也、此村より三十六里、右へ曲り行は唐津道也、浜崎村より水島村迄一里余の松原を虹の松原といふ、廿丁余行、対州領と唐津領の境あり、両家の役人待居たり、比礼振山、領分境の辺より十丁計左ニ見ゆ、南ノ方也、東西に長き山也、長しといへと丸さまのいさゝか西東へ長きにて、頂より少シさかり松二所はかり有て、青ミわたりたる芝山に見やらるゝ也、高さ二丁ハ有ましく思はる、うしろの山よほと高し、はなれ山也、鏡社、鏡大明神とて此比礼振山の西の麓ニ在すよし、本社神功皇后、二ノ宮廣嗣を祭れるよし、鏡宮の本縁ハ、塙氏の群書類従の神祇部に入たる漢文の縁起、いと〳〵めてたく廣嗣の上書の文ハ尊□感服すべき文意也、今思ひ出るまゝに記せり、このひれ振山ハ唐津領也、水島、唐津の入江を隔たる計也、人家よからす、此入江五丁といへど近きやう也、船中より唐津の城の石垣近く見ゆ、一丁余も隔りたらん、寅卯の方海へさしいて木しけり、いと高き所の木のまより屋根二ツ三

前原村
神在村
深江村
実入至てよし
閏四月五日
深江村を出立
姫島
大入村
高浪の音のみ
吉井村

志摩郡、此村も田畑の中也、高田を出て一丁計にて池田川、十間計の板橋あり、池田の居村ハ通り道にあらす、左御立場あり、御休、潤村（ウルウ）、浦志（ウラシ）村、此両村も田畑の中にあり、赤土也、前原村、宿駅なれどめたつ家もなし、家数七八十軒有と、問屋場なともあり、姪浜より前原迄三里、御立場あり、御休、此辺右ニ高き山あり、加也山（カヤサン）とてあり高き山也、一名親山といふとし、荻ノ浦、荻ノ浦も通り道に家少々あり、たけ川とて小川あり、橋を渡せり、此所黒田家と奥平家の領分境也、黒田家ハ石、奥平家ハ木にていと大きく□シあり、怡土郡と志摩郡の□□、神在（カミアリ）村、本村にハあらす、村ノ入口右ニ御立場あり、御休、領分境より五丁計奥平家領也、かみ在村を出て、一丁余行、橋をわたり小川に添て左の堤を上り行也、田中村、浜窪村なと居村を通る、田畑の中を二十丁計行、三四間余の土橋、六間計の石橋を渡り深江に入也、此橋の辺迄入江也、今日の行程、姪浜より深江村迄、田地大かた田麦又ハ菜種也、いつれも実入至てよし、福岡辺より深江辺まて海辺弐里、一里、又半道くらひはなれ、高山一つゝきにそひへ見ゆ、屏風を立たる如しともいふべし、深江村、怡土郡、高三千石、家数三百三十軒余、御本陣緑屋嘉十郎泊

五日

朝より誠に快晴、少しもくもらす風もふかす、いと〳〵暑し、未より西南風いさゝかふく、辰上刻深江村を出立、嘉十郎の家の隅に大きなる石の常夜燈あり、宰府天神の燈也と、宰府迄此所より十二里□、左へ曲り宿中右宝満天神宮有、村はつれより右へ転じ、橋を渡り程なく海近き松原を右ニ見て、左高き所に鎮壊石八幡の社あり、道の辺出さき山の四五丈も高く古松の内にて、宮ハ至て小社也、道はたに石の花表あり、大ならす、此所より海辺にて左の山にそひゆく也、右の方は浪あしもとにゆすり来る心地すれと、大かたハ八九尺も高けれハ危き事なし、此辺西北ニ姫島見ゆ、志摩郡の内なり、岐自（志）浦より西ノ方ニ当り、三里沖ニあり、島の周り廿七丁計、東西八丁余、南北十二丁余、大かた丸き島也、田畑もありと、人家六七十軒ありと、遠見番所あり、右深江の方の山の出崎を□□□といふ、是より東北の方筑前の海を玄界なだといふよし、佐浪村、村ノ入口御立場あり、御休、深江村より廿一丁、此所より二三丁行ば右ハ海辺にて左ハ田地見へ、さなみの本村あり、並木を通り、山の出さきを横に一丁余上り下りして又海辺ニ出、こゝにも右御立場あ有、御休、おふにう村の地のよし、大入（ダイニウ）村人居多からす、村を過て中津領と対州領の領分境の石二ツ立て、両家の役人衆待居たり、此所より福井迄の間並木にて海近けれと、左高浪の音のみ聞ゆ、福井村、福井浦、いさゝか家あり、海辺の方浦也、吉井（ヨシイ）村、吉井浦、小橋をわたり、吉井の右ハ吉井浦、左ハ吉井村と分るゝ也、家頗多し、松の並木を通り右ニ山を見て左へ曲り□□ゆき坂に上り始る也、橋崎□□、上下廿丁計の坂也、深江より二里、坂の中程左御立場有、御休、右一里くらひに、うきたけ山見ゆ、高一里十八丁、

（三五）

とりかへ（鳥飼）八幡宮
黒田光之建之

愛宕山

姪浜村

閏四月四日

いとあつし

平田篤胤　生ノ松原

残島（能古島）

しか島（志賀島）

魂も飛揚

遠賀郡遠賀川　水上ハ嘉麻、穂波、鞍手三郡并豊前国田河郡四郡ノ水皆流レ落、川は、あし屋にて百間、鞍手郡下境川豊前田川郡より流レ、嘉麻川と一ツニ成、川は、六十間、同飯塚川　宮田川　通元川　遠賀郡大渡川　上座郡上座川　那珂郡那珂川　比恵川　早良郡早良川　粕屋郡多田羅川　志摩郡板持川　宗像郡江口川　同西郷川

（数丁ほど欠か）

右ノ方八幡ノ宮あり、とりかへ八幡といふよし、領主より寄付百石、右ノ方同く八幡ノ社有、もみち八幡といふよし、領主より寄付百石、石の花表あり、筑前国主源姓賜松平氏黒田光之建之、貞享二年歳次乙丑夷則十一日、社地の前右ニ御立場しつらひあり、福岡ノ町を出て左右田の有所を過、藤咲川あり、水すくなけれは土俵にて水をせきとめ舟行するなり、渡船場、角石の飛石をおきて供の者を渡らしむ、五丁計行橋本川、此所も船にて渡す也、左仮橋ありて御供のものをわたらしむ、右ニ愛宕山あり、山高く木しけれり、遠く□□宮見ゆ、はしもと川を渡り二丁余行、右に上り坂あり、坂の中程に石の鳥居見ゆ、申中刻姪浜村着、姪浜村、早良郡、高二千三百石余、家数七百間余、鉄屋与七方御泊、曽我様、御茶屋守彦右衛門、近藤様、紙屋太右衛門

四日

朝より快晴、終日くもらす、いとあつし、風もふかす、いとのとか也、辰上刻姪浜出立、姪浜より六七丁行、石にて小戸宮参詣道と、今年四月立たる石あり、宮の立せ給ふといふ山ハ、海辺近うよ程高く見ゆ、祠ハ出崎の低きところ一間半四方計の小社の由土人語れり、かの伊弉諾尊のみそきし給ひにし小戸ハ日向にハあらず、此所なるべしと、貝原篤信翁のいはれしを、平田篤胤なども同意せられたりき、一丁余り左右松山也、古松多し、此所を生（イキ）ノ松原といふ、生神社左ニあり、石の花表有、額三神社とあり、相神ましますにや、此所神功皇后の三韓御征伐の時祈誓し給ひ、こころみにささせし、さかさ松とて、道より二三十間奥に有と、おのれあとにて聞たり、同行のうち見し人多し、長垂山、海辺近く高し、此山のふもと磯部二三丈高き所、又ハそれより低き所を六七丁行也、道はた左ニ岩間に出る清泉あり、くすり水と称し太閤水ともいふよし、こゝより玄界島戌の（ママ）亥三里計沖に見ゆ、今津の浜崎より一里余も隔りたらんと見ゆる、おなし方近く見ゆるハ残島、島の周廻二里余、南北に長き島也、人家田畑ありと、しか島、残り島ニならひて有、いさゝか小し人家畑なとあるよし、太閤水より少し福岡ノ方、早良郡と志摩郡の堺あり、長垂山のはなを左へめくりて平地に下る也、生の松原を出しより磯辺の岩石、島々の眺望なと天景、誠に魂も飛揚する計也、今宿迄の松原もいとうるはし、坂を下り今宿の地にて御立場、御休有、今宿、村ふたつにわかれたり、福岡より行て取つきなるハ新田のよし、周船寺（シユセンジ）、怡土郡、此村も田畑の中也、人家多からす、高田（タカタ）、

筑前十九神

怡土郡雷山　同深井山　鉢伏山　志摩郡玄界島　同芥屋大戸　今津　那珂郡迹驚岡　裂田溝　早良郡背振山　御笠郡大宰府跡　同都府楼跡　同学業院跡　同四王寺跡　同国分寺跡　同国分尼寺跡　同横岡　崇福寺　同続命院跡　同天拝山　粕屋郡顕孝寺跡　同聖母屋敷　同日守石　同胄塚　同鎧塚　同馘塚　同御島　皆打浜　同独鈷水　遠賀郡名籠屋崎今ハ名古屋　洞海　山鹿岬　河斗島　同資波橋　嘉麻郡安楽寺跡

筑前十九神

一宮　那珂郡今粕屋郡箱崎一座　宗像三座　織幡一座　住吉三座　粕屋郡志賀三座　怡土郡志登一座　御笠筑紫一座　同竈門一座　上座郡麻氏良布一座　下座郡美奈岐三座　夜須郡於保奈牟智一座

旧記ニ出候神社

早良郡生社　同飯盛社　怡土郡高祖社　御笠郡天満宮　同松峡　粕屋郡産宮　香椎宮　同若杉大祖権現　同旅石八幡宮　遠賀郡高倉社　鞍手郡天照宮　穂波大分八幡宮　那珂櫛田社

志摩郡姫島　岐自浦より西ノ方ニ当り、三里沖ニあり、南北十二丁余、東西八丁余、人家・田畑少シあり
同玄界島　南北十丁、人家田畑あり、未申ノ方釈迦牟尼島あり、間七八丁程、小島也
同小呂島　西ノ浦より亥ノ方ニ当り十三里沖ニあり、島廻り二六丁、横五丁
烏帽子島　野北より西戌ノ方ニ当り八里沖ニあり、人家田畑なし
早良郡残島　福岡より西戌ニ当り二里沖ニ有、島周り二里二丁余、南北長三十丁余、横十五丁、人家田畑あり、村前大船弐三拾艘掛
粕屋郡藍島　龍宮浦より戌ニ当り三里沖ニ在、島周一里十四丁余、東西十六丁、横十丁余、人家田畑有、村前大船百艘掛ル
遠賀郡白島　山鹿崎より子丑ニ当三里沖ニ有、島二ツ、を島、め島、田畑人家なし、小島也
宗像郡地島　鐘崎より戌方ニ当一里沖、島周り一里十八丁余、南北ニ長シ、十四五丁、横八九丁、人家田畑あり
同大島　幸橋より西戌ニ当三里沖ニあり、島周三里三十間余、東西三十丁、南北三十丁、人家田畑あり
同勝嶋　幸島より申西ノ方七八丁沖ニ有、南北七丁、東西四丁、人家二軒
澳島　大島より乾ノ方ニあり、廿三里余沖ニあり、荒磯、湊なし

名所旧跡

志摩郡　三七ヶ村
外拾壱ヶ村　甲斐守領分
下座郡　廿六村
外拾七　甲斐守領分
怡土郡　弐拾三村
□四拾六村　御料并中津領
合　拾五郡　村数六百六拾三村
総社数　千四拾九社
総寺数　七百七拾五ヶ寺
右之内、領知付置候寺五ヶ寺社
社　十九社　寺　三拾壱ヶ寺
高弐千石より五石迄

名所旧跡

早良郡　生ノ松原　千賀浦　草香江　能古浦　也良崎
志摩郡　韓泊　立石崎　可也山、親山と申　引津
那珂郡　博多　住吉　袖湊　蓑島　志賀　荒津　濡衣
御笠郡　竈門山、御笠山共申　湯原　鎮西　安楽時　幸福　流川　石踏川　思川
大野　大城山　水城　刈萱関　御笠森　白川　漆川　城ノ山　蘆城、野山川駅　原山
粕屋郡　産宮、宇弥宮と云　香椎、宮潟浜　箱崎　千代松原　阿恵島、今ハ藍島又ハ相島共云
宗像郡　大島　荒舟御社　御屋形山　鐘御崎　有千潟　海中道　名児山　蓑□浦　澳島　宗像山
上座郡　朝倉山　木丸殿　織面湊
夜須郡　安野
遠賀郡　蘆屋　鶉沢　岡湊　大川渡　垂間野橋　浪掛岸

旧跡

な島（名島）

箱崎村

問屋場　御茶屋　上下に御召替

八幡宮

敵国降伏

美事　千代の松原

松平美濃守（黒田長溥）

筑前国

右な島とて、小松の平らなる山あり、金吾中納言の城跡也と云、よくも□へ□□、松崎村□□□左に御立場しつらひ有、右へ曲り土橋有、長サ四十二間、こゝをすのさきといふ、多々羅村の枝村のよし、しめた川三四丁行土橋あり、十四五間、まなく箱崎村になる也、四十間余の土橋あり、箱崎、宿をいり間なく左へ曲り、東西に長し、宿の中程問屋場の所より右海辺近う行、右ニ御茶屋とてあり、御三方様こゝにて御待合、上下に御召替、御歩行也、再ひ問屋場の所に帰り本道を行、八幡宮、往還の左也、当国ノ一宮、社地古木多し、社地より正面海浜に至り、水辺に石の花表見ゆ、道はたに大の石の花表あり、八幡宮と真字の額

豊臣黒田筑前守長政建立

于岩慶長第十四大歳舎巳酉季秋中旬如意宝日座王坊乗清、敬白

と左右にゑり付たり、外の玉垣、右廿八間、左廿六間、石灯籠ハ内外共何百共かそえ尽しかたし

楼門額　敵国降伏　真字

其下に横額、在茲、隷書、日東文武憑誰カ長使蒼生仰帝猷

本社、回廊、左右六間つゝ、本社共奥十四間計、但、七八尺間、右、神木の枯木、いかきして有、右ノ隅鐘楼あり、高く戸さして銘文見えす、末社数多し、御朱印五百三十石、内百石別当五知院弥勒寺、内四拾八石大宮司田村常陸介、残三百八拾石社□□□寺、社家三十六人配当の由、八幡の瑞籬の通り道、右ニ粕屋、那珂の郡境の石の傍示あり、箱崎を出れは、左右並木いと美事也、千代の松原といふ砂地也、右ニ福寺あり、黒田家代々の菩提所、領主より三百石寄付の由、普請今様めかす、いとめてたき造りさまなり、博田、百八町、縦横に小路あり、いとにきはし、町の入口橋をわたり、呉服町御茶屋守大賀甚之丞方江曽我様、近藤様と御三方一同御出、午中刻、松平美濃守殿并諸役人来ル

筑前国

早良郡　四拾七村　那珂郡　六拾三村　志摩郡　四拾四村

粕屋郡　六拾七村　宗像郡　五拾八村　席田郡　八ヶ村

御笠郡　五拾六村　上座郡　三拾壱村　穂波郡　五拾八村

遠賀郡　七拾四村　鞍手郡　五拾七村　夜須郡　拾四村

外ニ三拾ヶ村　甲斐守領分

閏四月三日

たち花山

家ならひ立り

香椎宮

香椎廟鐘銘

三日

朝間くもりしか、辰上刻より晴、いと暑かりしが未よりくもりがち也、辰より南風吹、つよからす、未時やみたり、辰上刻、青柳出立、青柳宿を出れば左右田場にて橋あり、十丁余行、青柳の本村あり、三代村、家少シある所を下り左ニ太閤水とて井あり、石にてたたみやねあり、いさゝか上り、左御立場しつらひあり、青柳より此所迄よほど高下ハあれど、田畑ならぬハなし、青柳より一里、下原野、坂の左ニ御立場しつらひあり、例よりハ其さま替りてよし、坂を下れば下はる村なり、いさゝか町めきて家並立り、左に高き山見ゆ、いたゝき三ツにわかれ、東ノ方なる中にも秀てたり、たち花山といふ、下原村よりいさゝか上り、山の背伝ひ道あり、右、なだ浦遠く見ゆ、人家もあり、島のやうにて景よし、下ればしもはるの本村、左右に家あり、浜男村（ハマヲ）、通り道に家いさゝかあり、香椎村（カシヒ）、道ノ右ノ方、海をうしろに片かわに家ならひ立り、よからす、古ハ香椎村の枝郷也と、香椎の本村ハ香椎宮の辺にあり、海辺の坂一丁計上れば、左花表あり、香椎宮、道の左に石の鳥居有、頗大き也、額、香椎宮と篆字

筑前国主従四位下行左近衛権少将源朝臣継高建立

寶暦二年歳在壬申八月二日

と左右にえり付あり、花表より左へ八丁入、宮あり、左右小松の細道也、近し、社地より前に石橋二ところあり、二ノ花表石也、香椎宮、篆字、鳥居前左常夜灯、神主居宅なとあり、石階五段、三段、十一段、十六段上り、御庭なり、□□□□□あり、末社多し、御朱印高百六十石、内三十五石別当神、山護国寺内三十五石、神主大宮司武内遠江守、残り高八拾石社家十六人、社僧并郡代両人配分乃由

香椎廟鐘銘并引

香椎神廟在于筑前州糟屋郡其監僧光海嘗鳩壇資鋳一銅鐘簾之廟前以警□昏頃者因奈剃度師光公而求銘余不能固辞輟綴蕪辞以應其請銘曰

神之為徳　體寂周隆　鐘之為物　内虚聲洪　暮穿山雲　暁入海風　聞者自省　福在其中

元禄二年十一月念五日

洛西菩薩沙彌光謙撰

宮のうしろハ山高く古木しげりいと神さひ尊し、もとの道を花表迄帰り二丁計行て下れは海辺、左右松原也、左右六七間くらいつゝ、香椎の花表の辺よりこのあたり入江并島々なと見へ景よし、しか島、むかふ島なと見ゆ、道の

よく実入たり　赤間

福岡への継場

閏四月二日

陵厳寺村

田麦多し

原町

畦町

内殿　田地多し

東宗像郡

青柳村　太宰府

人居よからす

水をきりたり、峠、笠松より次第に上りゆく也、もじくち峠といふ峠ノ左ノ方ニ石ノ傍示あり、西遠賀郡、東宗像郡と石二ツ並ひ立り、傍ニ小く木にて、西上畑村抱、東武丸村抱と記しあり、一丁計下り、右御立場しつらひけり、二丁よ下り、谷間田地十間計を過、また峠ニ上りゆく也、まへの峠より高きやうニ覚ゆ、右高き山あり、蔦か嶽といふよし、古城跡のよし、樹木しけれり、蔦かたけの麓竹木を伐払ひ菜を蒔たりしか、よく実入たり、赤間へ下り坂の左右の墓所の石塔おほき所一丁計もあらん、木ノ枝なともて囲ひかくせり、巳下刻あかま御着、赤間宿、宗像郡、高三百石余、人家百五十軒余、赤間ハ田畑もあれと海へ三里計也、四方遠近ハあれと山也、家ゐよからす、福岡への継場村也、御本陣、仮亭主仙兵衛、曽我様、吉田六兵衛、近藤様、善十郎、今日使者等、花房平助・関真平・宮崎助太夫・棚橋又之進・桑原栄蔵・建部孫左衛門

二日

□辰中刻頃よりやミ、午中刻より小雨又ふり出しか、未時やみ、やかて日かけ見へたり、辰上刻、赤間宿出立也、赤間の村はつれ二丁計行、道橋有、四間、橋を渡れば右陵厳寺村の地先也、此辺左右田也、黒土に赤ミ有て肥たり、田麦多し、徳重（トクシゲ）村、道より左ハ田也、右ハ山にそひたり、並木松有、田久村、通り筋にハ家なし、少シ上り坂あり、下りて田地有、間なく又坂を上る、宮田峠と云、下り険し、さやの峠よりハ高し、右曲（マガリ）村、左浅川、右光（ミツ）岡、左野坂、右原（ハル）町、左右に家並ひ立て町めきたり、村を出て一丁計いさゝか上り、右に御立場しつらひあり、左右なみ木、松おほし、筑前のいひならはし、原（ハラ）をハルと唱ふ也、原町、はるまち、だんの原、だんのはる、新原、しんはる、其外村名にいとおほし、大穂（オヽボ）、道の左右に家少々有、右八並（ヤツナミ）、坂を下り村あり、右このみ山とて高き山あり、木しけれり、右王丸（オヽマル）、左本木（モトキ）、左溜井、太閤水、左御立場しつらひおけり、畦町（アゼマチ）、町の入口、左高き所に天満宮の社あり、古松しけれり、あぜ町ハ長三四丁あり、家も多し、赤間にハまさるやうに見ゆ、左内殿（ウチトノ）、田地多し、右に山をなし□□□上る也、うちとの坂といふ山の背伝ひ通る事十丁余にて、左に丸く高き山の腰をめくりて上る、その山をはなれ一丁計下り、だんのはる村也、だんのはる村、左右に家あり、家と家との間一枚並ひの石橋あり、此所左郡境の傍示杭を石にて立たり、東宗像郡、西粕屋郡と有、其側に東上西郷村、西蔦野村とあり、此人家ある所をだんのはるとよべと、実ハ小名にて西郷村こもの村の内也と云り、右御立場しつらひおけり、一丁余行て坂を下る也、青柳迄五六丁左右田也、青柳村よりこなた、左宰府道と記シあり、太宰府天神へちか道也といえり、道いと細し、青柳宿、粕屋郡、高弐千四百六十石余、家数三百軒余、町ハ八十軒余にて所々散在せりと云り、人居よからす、戌亥より入りて未申に曲り、家並たてり、御本陣百姓勝平、赤間より三里三丁四丁

あしや（芦屋）

山鹿村

絶景至極

土砂肥て

御着船

閏四月朔日

芦屋御立

左右畑あり　はぜ・うるし

糠塚村

御立場

海老津村

筋なと有べしとも思はれぬ所おほし、左浅井、通船の所よりハ奥に見ゆ、此辺左右山近き所を出ぬれば、右ハ山遠からず、左ハ一里余田地に見わたさるゝ也、此所よりあしや見ゆ、一里計もあらんか、四五丁いけばわつか堤のやうにて高からす、萱原めきて十丁もあらん、そをへたてて入江也、細き江をこぎ行つきあたり、三四丈高く宮あり、こゝより左へおれてあしやの方広き入江にめくれは、水辺に白山大権現と石の少き花表の額あり、是前にいふ宮の鳥ゐ也、同じ山つゝき平らなる山あり、古城跡也と聞すとも見やらるゝ也、山鹿村、前に記せし白山の社地・城跡より大海の浜辺迄山かの村のよし、海辺にも弁天の宮なとあり、古松まはらに生たる山なと有て、出崎の景色なと絶景至極也、この山鹿ハ日本紀にも見えていと古跡也き、家数三百四五十軒有と云り、人家ハよからず、芦屋と入江を隔てゝ水辺近く並ひ立り、百間計もあらんか、大船の泊り多し、若松より芦屋迄目の及ぶかぎり山野といへど土砂肥て樹木成生せり、備前・備中・備後・安芸の海辺とハ雲泥の違ひ也、芦屋村、遠賀郡、村高千百九十石、人家七百軒余、あしやハ入江の東の岸に軒を並べたり、縦横に小路ありて家居もよく繁花の里と見やらるゝ也、巳下刻御着船、蛭子屋佐市郎、曽我様、田原屋利七、近藤様、丸尾屋籐七、今日来しハ、花房平助・棚橋又之進・寺西蔵太、手代滋賀栄蔵、黒田家より須田栄助

天保九戊戌年閏四月　小

朔日　申

朝より誠に快晴、終日しはしもくのらす、風もふかす、暑さつよし、暁かたより雨ふり出たり、芦屋より赤間へ三里八丁、三里八丁といへど四里余もあるやうニ思はる、朝六ツ半時芦屋御立、あしやを出ていさゝか下り左右松山なり、右海ハ見えねど浪の音近く聞ゆ、大城のこなた迄殿様御ひろい也、大城（タイジヤウ）、あし屋の枝村のよし、家わつか也、こゝに一里塚あり、あし屋よりこの村迄田畑見えす、大城より左右畑あり、畑のやなハいふもさら也、畑中にもはぜ・うるし多く植たり、三四尺位迄大きなるあり、あしやよりこなたざり砂なり、かの道はかとらぬ、越の長はまとよミし歌思ひ出らる、松原いとうるはし、十丁計ゆき、芦屋村と糠塚村の境あり、此辺より左低く村居見ゆ、道より十丁計もへだゝりぬらん、糠塚村、左右ニ人家あり、大城よりハあか土也、ぬか塚よりハ田多し、村の入口より段々ニ下る也、田ノ辺左り庄屋の門前に新たに御立場しつらひおけり、二丁余行山田村との境あり、石橋の際也、山田村、左右田地、それより居村を通り少し上り並木の間に右に立場あり、ぬか塚とおなしさま也、御立場より二丁計行境あり、少し行て土橋あり、海老津村、右ハ山近く住居あり、田畑あり、□□辺田麦よ程見えたり、笠松村、□□□の枝郷のよし、家は二三軒あるのミ也、此辺右ハ山にそひ左ハ田也、ぬか塚より笠松辺迄、苗作の外田毎に

有馬家の舟
黒田家
松平美濃守（黒田長溥）
四月廿九日
若松滞留
四月晦日
若松より芦屋へ
黒崎の古城
田地広く見ゆ
太閤水

有馬家の舟也、河岸より御本陣迄ハ若松の人足にて、黒田家より役人又ハ才領なと出されたり、御上り場舟共目印、曽我様ハ黄印、近藤様ハ浅黄印、わか方ハ赤印也、是ハ黒田家よりの定め也、御本陣下浦屋作蔵、外ニ下陣一軒、曽我様、百性久五郎、近藤様、下浦屋理右衛門也

今日使者大概

松平美濃守殿領内案内花房平助、留守居建部孫左衛門、用人棚橋又之進、付回り宮崎助太夫、有馬家より辻小兵衛・小倉忠平・細見勝左衛門、黒田家舟頭役置鮎治郎助、船方元〆役山路仁助、有馬家牛島隆庵・藤野周泰・平木安正・岡野半右衛門、松平肥前守殿付廻役本吉治部右衛門

若松、筑前国遠賀郡、高五拾七石、家数弐百七十軒余

廿九日

朝間くもり、辰上刻雨いさゝかふりてやミ、巳よりくもり、日かけ見えし時ハあれとくもりたり、朝より東風吹、烈しからす、今日ハ朝間雨天、汐合あしく相成り候由にて若松滞留

晦日

朝間くもり、辰中刻、やう〳〵はれしか、誠に快晴、若松より芦屋へ船路五里、五里といへと四里ハなきやうニ思はる、此入江いと細き所ハあれと海より海に通せり、辰上刻若松を出船、大久保様分曳舟共都合廿五艘、若松より十丁計行、右領主の御蔵有、一里計行左ニ高き山あり、帆柱山といふ、左川近く讃州や島のさまなる、未申より丑寅へ長く頂平らなる山あり、黒崎の古城跡也、松もあれと多くハ畑也、左黒崎村、入江より少シはなれ家数多く有よし、帰路の滞留村也、右ふた島村、二島村の辺小島二ツ、二子島といふ、廻り二三十間くらいの島也、西ノ方なるに花表有、弁天の祠也と、雑木しけり黒く見ゆ、此辺ときわといふ葉の広きかやあり、入江の端通り打つゝき植たり、田畑の浪よけ也と語れり、若松より二里近く行、左ニ石の小宮あり、一丈四五尺の松三本あり、此所より忽ち狭くなり三十間くらゐになりたり、左鴨田、小宮有し所より五六丁、本城の枝村、此辺左ハ入江埋て田ニなしたるとそ、田地広く見ゆ、ほんじやうひらきといふ、払川、左右両岸に家あり、右ニ新たに御休所なと修理おけり、右塩屋、同あますみ、右とりゐ、左太閤水、鴨田より太閤水の辺迄舟道屈曲いと多し、甚せまし、今度深く浚へるやう也、太閤水ハ酒屋の傍にあり、名水也、太閤秀吉公名護屋へ御通行の時呑給ひしとそ、高須村の内成るべし、右高須村、払川村の辺より此高す村の辺、わきて川せばく両山もわづか廿間はかりにて前後をかへり見すれば、川

（二七）

下ノ関

四月廿八日

岸柳島（巌流島）

小倉ノ城下

小倉侯の番所

若松

遠賀郡

泊り船多く見ゆ

也、辰巳に向へり、此社別てつき立たる如く高く眺望至てよし、未下刻より雨ふり出けれは、下ノ関の町の下八幡より一丁計西に舟掛りして見合しに、雨やまねは下ノ関船泊

うつきよりすくもへ二里　すくもよりむかふへ三里

向より花かへ三里　花香より岩屋へ三里

岩屋よりまるおさきへ二里　丸尾崎よりみさきへ三里

三崎よりもと山へ三里　本山よりへさきへ五里

へさきより田ノ浦へ一り　田ノ浦より下関へ一里

〆廿七里（ママ）

廿八日

朝より小雨やます、未時やミ、風ハきのふより打つゝき東風なれと烈しからす、午時やミたり、夜あけて下関出帆、曳船有て行、下関より半里計行、岸柳島あり、小島也、赤間か関の方より見れは山の出崎□打たるやうに見ゆ、近く見れははけ岩多く、年古たる松まはらに見ゆ、左ハ内裏の人家見ゆ、与次兵衛灘水の上にせ少し出て与次兵衛か石塔あり、舟より右也、此辺右ハ引島とて大きなる島有、所々浦あり、三里行小倉ノ城下、町屋一里計長くつゝき、町の中程ニ城見ゆ、海中へ石垣つき出しよき所也、小倉より半道計行海辺高き所番所あり、是豊前・筑前の国境にて黒田侯・小笠原侯の領境にて小倉侯の番所也、此辺より北ノ方ニ長州のはいとまり・もつれ島なと見ゆ、もつれハはい島より小なれと高く見ゆ、若松ハ遠賀郡の内山鹿の崎迄五里計、長き島の豊前の方より入江の出さきなり、大海をうしろに、入江を前にして町あり、海江右に宮あり、鳥居あり、入江ハ広からす、入江を少しこきいり右の岸に人家並ひ立り、豊前地よりこき行は海中へ出さきありて、崎を廻れば若松右ニ見ゆ、豊前境より此出崎迄海辺大木の松並ひ立り、両岸の出崎くひ違ひに出はりたり、左ノ地方のでさきを過て若松のてさき也、此辺左ハ名におふ玄界なたの始め也、十丁計入ば、右若松村也、若松ハ入江にさし出たるやうなる所なれと、ふたつのてさきあれは入江近くこきいらねは人家見へす、卯辰巳に向ひ入江に添て村居せり、縦横に小路あり、家数すへて三百軒余ありとなん、うしろハわつかにて大海、前ハ入江、西南ハ十丁もあらす、山高く南の入江にそひたる方畑つゝき也、此辺江の左右遠賀郡也と、若松の入口に中島とて周廻り二三丁に見ゆる小島あり、木立見え人家もあり、此島陰に泊り船多く見ゆ、若松の御上陸場、御三方共二丁計はなれしつらへ置り、石又ハ土俵を以て御一人に三所つゝ拵えたり、五ツ半時、若松に着たれと、荷物をあけ、曽我様の上陸の遅きを待て、午上刻やう〳〵御上り也、はしけハ

定芝居
家数多く
うつき

四月廿七日

中ノ関

豊前・長門の山
長府の城

家多く並ひ立り
田浦

壇浦村

木並立て家十軒余あり、長七八丁もあらん、此所に定芝居の小屋あり、笠戸村より五六丁さきの出崎と宮のすの出さきとわつか廿間計のせと也、此瀬戸を過ればくた松の本村見ゆ、いと遠けれと家数多く見ゆ、土人ハ二千軒有なと語れと偽りなるへし、此せとハ申酉に向、過れば、左辰巳へ曲りのり行也、うつき、うつきの島ハ二り余もあらん、人家もなく湊もなし、かなたの方に里ハ有なるへし、うつき船泊

池ノ浦より上関へ一り半　上関よりさうし瀬へ二里
雑子瀬よりさこうへ一里　佐甲より室積へ二里
室積よりかさ戸へ三里　笠戸よりうつきへ二里
〆十一（ママ）里、

廿七日

朝より晴たりしか辰より陰り大かたはれす、辰上刻より東風つよく吹てやます、未時やみたりしか、未下刻より小雨ふりやまず、夜ニいり風雨也、夜ノ八ツ時うつき出船也、すくも向ふの間にて夜明たり、すくも［　　］く見ゆ、次ニ同し並にうま島あり、小し、向（ムカウ）、右ノ方也、東西に長き島也、むかふの人家ハかなたに有よし見へす、向のさきに中ノ関也、中関ハ入江の奥にて海中の舟ぢよりハ見へす、家数二千余ありと、花か岩屋なと右の地方也、よくも見へす、丸尾崎、海辺小高く見ゆ、松なとあり、みさき、海へさし出て松原見ゆ、み崎よりさきハ大きなる入江也、本山、海へさし出て松見へ、畑も多くあり、其中に木戸・刈屋なと云る村々ありと、此辺の船中にて見れは豊前の山々正面に見ゆる也、申に高く彦山見ゆる、酉ノ方とのうへ権現の山、妙見山なと高く、豊前・長門の山々見へ、其名尋ぬるにいとまあらず、へさき、豊前の国内也、子丑に向ひたる出崎也、へさきハ家いさゝかあれと至てわろし、右長府の城見ゆ、裏手の塀のよし、海へ出はりたる所也、町屋ハ山かけにて見えす、こゝよりてまへに干珠・満珠の二島あり、丸く小く木ありて黒く見ゆ、田ノ浦、へさきハ一里ハなし、子丑寅に向ひ海辺に家多く並ひ立り、小倉侯の茶屋・蔵なとあり、うしろハ山高し、茶屋ハ土蔵の並に陣屋のさまに有しか、ちか頃蔵のうへ山の中程に新たに茶やを修理し給へり、此入江眼下に見ゆる所也、九ツ下刻、田浦にて船一同を待合せ舟懸り、八ツ中刻出船也、曳船にて行、廿丁計行、左ニ豊後はやとも瀬、神ノ社あり、社地ハ未申に向ひたる出崎也、宮大ならす、はやともの所せといとせはし、はやともよりまへ、右壇浦村あり、家数多く海辺に並ひ立り、うしろハ山にて木しけりれり、阿弥陀寺、赤間ヶ関を一丁計行て奥へ入也、少シ高き境内也、寺ハ見えす、亀山八幡、海辺に石の花表あり、石坂あり、七分はかりのほり左右に石灯籠あり、楼門あり、回廊あり、宮も桧皮

（二五）

になひ島

四月廿六日

池浦

上ノ関

有様絶景

室積

天ノ橋立のさま

宮のす

小松のせとなと云るをへて行と云り、さんしやう島よりこゝ迄大島郡一島也、いと大きなる島也、荷（ニナヒ）、になひ島ハ西と東と二ツ島あり、わつかめくり七八丁の小島也、人家なく樹木もなき芝山島也、西ノ島のいたゝきに松一本あり、此西ノ島を左に未申の山と山との間をのり行也、戌亥方ハ地山の崎也、すやかはなといふ、半り計さきの出崎をせんばか崎といふ、すやかはなとせんはかさきの間に、すや□とて海辺に少シ家あり、畑も見ゆ、此所を池ノ浦といふ、湊にあらす、人家もなし、山下の浜に舟泊り

家室よりになひへ四里　　荷より池の浦まで一里半

〆五里半

廿六日

朝間うすくもり、辰より晴たり、午よりいと暑し、午時南風吹しか、まなくやみたり、暁七ツ半時、池浦出船、せんばが崎、池ノうらより半里余也、海へさし出たる所岩石絶壁いはんかたなし、右にしら浜村あり、上ノ関、卯□に向へり、長州侯の番所あり、人家至てよし、上ノ関入口せと廿間ハなく、いと狭し、左右の出さきの岩石、松ノ木まはらに有て其有様絶景也、上ノ関のうしろの山高からす畑也、所々大木の松有、上ノ関よりさきに山高き所あり、上の関ハ惣名長島と云、長島の内の一村也、上関より下関迄周防灘といふ、西国船の風待する所也、上ノ関のはなわを廻れば右ノ方入江にそひて人家あり、多からす、室津村といふ、畑多く見ゆ、此村の方にかゝり舟多く見ゆ、上ノ関に向へり、さとか島、東西三十丁もあらん島也、右に見ゆ、雑子瀬、ぞうしせハ海中に一丁はかり、岩そはたちつゝける所あり、東西一丁はかり、岩の高さ七八尺、草木もなし、此辺より未に牛島、南北に長く丸く高し、西にいはみ島、辰巳より戌亥に長し、畑あり家もあり、はこ島・うま島右に見てゆく、いつれも小島也、ざ（佐）こう（合カ）ハ地方にて人家見えす、うま島の外をのりゆくゆへ也、うま島より室積迄の間右ノ山下海辺に村々あり、左ハ伊予と豊後の間に当り島なとも見へす、室積、むろつみハ人家至て多く、家作もよし、辰巳午に向ひ入江をめくりて立り、卯ノ方入江いとせばし、天ノ橋立のさまにゝたり、中ハ丸く広し、西南より東ノ入江までをり廻したる山ハ岩にて、汐風にもまれたる松見へ、人作の如く実に天景也、午ノ方高き山かけに世に名高き普賢の堂ありと見へす、室積ハうしろも低し、播磨よりこなた湊、ことにうしろハ高かりしに、此湊のみめつらしくひくし、前に云るをり廻したるさまの岩山ハ廿丁余もあらん、辰巳午の外海のかたハ屏風を立たる如く岩かねこゝしく奇景也、笠戸、風戸村ハ左入江奥子丑に向ひ家なみ立り、三十軒計もあらん、住居いとあしくうしろハ山高く木もしけれり、されと畑もあり、此島いと大きなる島にて村々有、右、宮のすとて出さきあり、こゝも天の橋立のさまにいと狭く、松

四月廿四日

周防国大島郡

長州侯より漕船三拾艘

四月廿五日

家室

廿四日

夜あけて暫し有て日出たり、辰より時々陰り、朝より西風烈しく、午よりよわりし□、未下刻より西風又はけしくなる、夜ニいり雨いさゝかふりてやミ、風もよわる、日出て津和を出船、丸島、三四丁の島にて松もなく人家もなし、是松山領と長州領の堺也、さんしやう島、此島ハ周防国大島郡、一にハやしろ島共いふ、さんしやうよりゆうようづかむろ、其外此大島郡也、いと広く大き也と、丸島の南にさや島あり、人家なし、此三島右に見て行、左に二上島一里も長からん、人家あり、畑あり、大木の松なとも多く見ゆ、由府（ユウ）、巳午に向たる入江に軒を並へたり、頗人家多し、畑おほく見ゆ、ゆうの東ノ方丸く高く海にさし出たる山あり、ようづ泊、ゆうより二里余あり、巳午に向へり、家多からず、よふづの向ふに廿間計もあらん、松生たル島あり、其さきに丸く小く塚ともいふべきさまの小島四ツならひあり、島の上に松一本つゝ生たる、人作の如き島也、大こん島と名づく、其さきに島一ツあり、木もなし、芝原にて美事なり、ようつハ家ゐ皆あしく数もすくなし、家室（カ）、かむろハ地ノ家室、沖ノ家室とて二ツあり、沖のかむろハ四五丁海をへたて東北へ向て人家あり、土蔵なと多く見え家並もいとよし、島ハ辰巳より戌亥に長く、辰巳の方いと高き山あり、此島多くハ麦畑にて、畑にならぬ所ハ成木の松多く繁れり、四五丁へたゝりたり、地のかむろのこなた辰巳にさし出たる松山あり、海辺のさまいと佳景也、いさゝか家も見ゆ、地のかむろ、東に向ひて海辺に家ならひ立り、いとよし、南方さとはつれ大石の海にさし出たる所宮あり、景よし、地のかむろのうしろ□き山おほく畑になし、他ハ松しげれり、長州侯より漕船三拾艘、水船六艘、薪舟三艘おくられたり

伊予津和より丸山へ一里　　周防丸山よりゆふ府へ三里

由府よりかむえ三里

〆十里

廿五日

朝間うすくもり、日誠に赤し、辰より晴たれと未よりくもり、朝より西風吹しか、未よりいと〳〵烈しく夜ニいりよわり、夜ノ九ツ時頃西風又はけしく吹出しか、一時もなくやミたり、六ツ半時家室を出船、此辺地の家室の続き、高き山を半服よりひくしき迄畑となせり、かむろより二り計行てかむ□□□村あり、あけの庄（安下庄カ）より一里余行て山の出崎峰通り松なみ続けるを、大波崎（ダイハ）といふよし、左にへくり島有、此島ハ此辺に並ひなき大島也、周廻三里斗也、大波村ハかむろ辺より見えたる、出さきより前の入江也、人家ようつにハまされり、大波の出崎を過れは、右ノ方海路あり、これ安芸国の方へ行ておんどのせへ出る船路也、きんたい橋・宮島なとへ行にハをはたけのせと、

（二三）

四月廿三日

蒲刈

唐琴

人家多く領主の蔵やしき

津和　松山侯

鞆よりあぶとへ一里　阿伏兎より院ノ島へ三里
院ノ島より山伏瀬戸へ二里　山伏せとよりめかりへ一り
和布刈よりのうじへ二里　能地よりたゝの海へ一り
忠ノ海より高崎へ一里　高崎より上いかりへ二里
上碇よりとうせんへ一里　唐船より下碇へ二里
下碇より横島へ一り
〆十七里

廿三日

朝より快晴、終日くもらす、朝間しばし東風吹てやみ、辰中刻より南風吹出てやます、日くれより烈し、夜八ツ時比雷鳴してより風猛烈也しか、暁かたよわりたり、夜明て横島出船、左大きなる蒲刈島也、麓の海辺にたどつ村、其外村々あり、横島より二里計行、左ノせとへ乗入也、此所左ハ蒲刈島、右ハのみ島也、正面に乗行はねこのせといふ、せとの内いさゝか右へよりねこ島有、ねこ島松あり、いと小き島也、此辺右ノ地方□海辺、山高く所々に村あり、数丁高き所に麦を植あり、蒲刈、かまかりせとハ一丁計の瀬戸也、右のみ島の方村あり、芸州家の番所あり、海水をへたて蒲刈島のふもとの海辺に蔵屋敷あり、蔵ハ十あまり、蒲刈と青島の間、右に遠くおんどのせの人居見ゆ、青島、右高き島也、こなたにハ人家見えす、かなたにあるよし、亀が首南北に長き島也、南ノ方入江にて巳時より風まち致ス、唐琴（カラコト）、亀かくひと同し続きの島也、されと亀か首とから琴の間山きれ、畑計の所有、唐琴ハ南に向へり、北迄家つゝきの所あり、此辺左に惣名くず名島あり、島南北一里余村々あり、伊予の国内也、津和、伊予の国内也、松山侯の領分、西に山を負て東に向ひ海辺に軒をつらねたり、人家多く領主の蔵やしきもあり、つわの東にぬわ島あり、つわとぬわの間を舟ハ行也、家ゐ至てよきもあり、夜ノ五ツ時津和に着て舟泊、松山侯より漕船三拾艘、水船六艘出されたり

横島より蒲刈へ三里　蒲刈より青島へ一里
青島より亀か首へ二里　亀か首より唐琴へ二里
唐琴より津和へ三里
〆十一里

鞆
絶景なり
家数二千軒
遊女屋
四月廿二日
阿伏兎
院島（因島）
尾ノ道
高崎の水
横島
芸州侯より漕船三拾艘

〆十三里

廿一日

朝より晴たりしか、辰よりくもりかち也、昨夜より西風烈しく吹て終日やます、鞆ハ人家至てよし、西南に向ひ海辺長く軒を並へたり、東ノ方高き所に阿部家の番所一段高き所に時ノ鐘あり、絶景なり、番所の下一丁余長く石にて堤のやうにつき出したる出崎にからかねの同（ママ）籠一ツ立り、古ハ東より西に向へり、北より西に向ひて堤の如くつき出したるあり、其間一丁計ある所を舟乗入也、町の西より北かけ山高く、北より東ハひくし、当所家数二千軒ありなといへと偽りなるへし、遊女屋二軒、引出茶や五軒ありと、にきはしき湊也

廿二日

朝より快晴、終日いさゝかくもらす、あかつき北風烈かりしか、夜あけてやミ、辰より西風ふきてやます、暁八ツ半時鞆出船、阿伏兎（アブト）、あふとハ地方の未申に向ひたる山の出さき也と、夜中なれは堂も見えす、観音の燈明ほのかに見ゆ、絶景の事ハいふ迄もあらぬ所を遠目にたに見ぬか口をし、田島、未申より丑寅に長く二里余もあらんか、あぶとゝた島の間を舟ハこき行へきを、夜中なればせと心もとなしとて、た島の外を院ノ島さしてこき行ぬ、されば塩やにハかゝらす、た島ハ島の中ほとに入江ありて陣屋めきたる家なとも見ゆ、院島、巳午より戌亥に長く、子丑申に向ひ人居二所あり、糸崎、右の山きは少シの村あり、八幡あり、糸さきよりこなた寅ノ方山間遠く、入江の奥に尾ノ道いさゝか見ゆ、糸さきとすなみ山の間の入江の奥に三原の町見ゆ、城ハ矢倉見ゆ、砂見村、村のうしろすなみ山、尤高し、人家多からす、左、いはき山、いはき山こなたに湊有と、こちハうしろ也、せつた山、いはき山・せつた山、いさゝか山のねきれしのミなり、麓は麦畑あり、右能地（ノウジ）、高き山の麓の海辺に家あり、多からず、辰巳に向へり、左にミ島あり、大島也、忠海（タダノウミ）、のうしとおなし続きの海辺也、家すくなく其さま能地とおなじ、うしろの山高からず、はけ山也、麦畑あり、此辺左ノ方一里余遠く岡室の瀬戸見ゆ、是ハいよの地方の島也、今ゆく高さきの方ハかま刈せとさしてゆく海路也、高崎、たゝの海のつゝき、山のさし出たる所の陰也、家よほと見ゆ、此村に高崎の水とて芸州領海辺無双の名水あり、上碇（カミイカリ）、右ノ方低きせと也、家もなし、上いかりとと□□んの間右ノ山下海辺に吉名と云る村あり、唐船（トウセン）、□し名のまへの小島也、松なと生て人家なく、一丁もあらぬ瀬戸の島也、下いかり、せと也、家なし、右の方也、横島、右山ノ下海辺に人家あり、多からす、夜ノ四ツ時横島ニ着、船泊、とうせんの辺にて日暮たり、芸州侯より漕船三拾艘、水舟廿四艘出されたり

日比　岡山侯

にかゝり舟多く有、十丁四方計もあらん、高からす、夜の六ツ時下り、日比ニ着て舟泊、岡山侯より漕船廿艘、水船五艘出されたり

室より奈波へ一里　奈波よりさこしへ一里
坂越よりあかふへ一里半　赤穂よりあふこ崎へ二里
あふこ崎よりおふたふへ一里　太田府（備前）よりたてへ一里
楯よりよふづ泊へ一里　羊頭泊より牛窓へ二里
牛窓よりよもき島へ一り　蓬崎より犬島へ一り
犬島よりでさきへ三里　出崎より京上薦へ一里
京上薦より日比へ一り
〆十七里半

四月廿日

廿日

早天いさゝかくもり、まなく晴たり、朝間順風也しか、しはしありてなきたり、巳より西南風ふき烈しからす、未中刻雷一声して申上刻より日出てくもらす、西南風夕くれよりふき夜半より烈し、暁七ツ上刻日比を舟出す、左に大づゝこづゝの両島あり、大つゝハ海中に、小つゝハ讃岐の地方也、二里計行て左り遠く四国の小富士見ゆ、右、備前ノ田ノ口・下村なと見ゆ、入江也、家多く見ゆ、大はゞ、田ノ口より半り、大はゞより山の出さきを廻れば下津井、此せと左ハばいら島也、至て低く小松生たり、下津井の辺より左五六里遠く象頭山見ゆ、こゝにて殿様始諸役人一同遥拝し、真木に参銭を付て流し献ず、象頭山午未ニ当ル、備中水島、右ニ見ゆ、島大ならす、人家見へず、三郎、右ノ山下海辺、人家すくなく麦畑あり、此辺十里ばかり水島灘といふよし、白石、左ノ方島也、赤土山に大きなる石と松と有て、白石ハ入江の奥也、此島いはゞ築山の様なり、島の長サ一里余もあらん、亥子に向ひ湊二所あり、此島の□容関に画かける如し、午中刻より白石に船かかりせしが、未下刻より空はれての□舟出ス、西ノ方入江広く見わたさる、此□福山城下也と見えす、左り島々多かれと日くれけれは、問ず、夜ノ五ツ下刻鞆着、舟泊、

象頭山

福山城下

福山侯より漕舟

福山侯より漕舟・水舟出されたり

日比より下津井へ三里　下津井よりむくちへ一里
むくちより水島へ二里　備中水島より三郎へ二里
三郎より白石へ二里　白石より鞆へ三里

四月十八日

室津

姫路侯

家数凡千軒

室出船

赤穂　塩浜

牛窓

〆五里

十八日

朝間くもり、辰上刻晴しか、まなく陰り、午上刻より雨ふりやまねと、風ハやミたり、申より雨わきて強かりしか、夜半やみたり、辰上刻赤石浦出船、沖に出れは播磨の山々右に見ゆ、左方ハ一里余出てよりハ幽に山見ゆるのミ也、淡路と伊予・讃岐の間遠く隔りし故也、八九里行、亀島、左三四丁に見ゆ、樹木もなくいさゝか頂に草生たり、東西に長し、一丁余、一里計行、たんげ島、此島も東西に長きやう也、一里もあらん、樹木ハ少し人家なし、左り十丁余遠く見ル、十丁計はなれ家島あり、上下に分たり、此島にて雨ふり出けれ□室津へ着、室の入口、右の出さきひより山といふ、此山おほくハ畑に開きて麦を蒔たり、高き所に番所□□□□、五六丁入ば右の方さき室津の社あり、冬木しけれり、其中に宮居見ゆ、社の下に姫路侯の番所あり、見付ともいふへく大也、社地の出崎を廻れは室の町見ゆ、室津船泊、室の辰巳より戌亥の方海にめくりそひて家並立り、家数凡千軒ありと云り、四国・九州の大名の乗船ハおほかた此津也、いと繁花の湊也、室の町のうしろ高き山也、其山を大かた開き、畑になしたり、本田畑ハあらぬやうなり

上明石より江ヶ崎へ一里　江ヶ崎より高砂へ三里

高砂より福泊へ弐里　福泊よりしかま津へ一里

飾摩津よりなけ石へ三里　投石より室へ弐里

〆十弐里

十九日

朝よりくもり、巳下刻雨一しきりふりてやみ、やかてくもり、終日日かけ見えす、朝より東北風吹しか時々やみ、はけしからす、辰上刻室出船、からみ島を左に見てこぎいづ、太田府（オヽタ）のまへより左に近く小豆島見ゆ、此島□□余、沖をこき行ければ右の方湊など分明ならす、赤穂なとはしめ遠く見ゆ、赤穂ハ□□塩浜なと見ゆれは□遠からす、開けたる所にあらす、未中刻牛窓にて船泊り、牛窓ハ辰巳へさし出たる崎也、でさきを廻りて浜辺に人家並ひ立り、三四百軒もあらん、長サ四五丁の町也、町より高き所に八幡の社、又堂なと見ゆ、景よし、牛窓より五六丁海をへたて島々あり、牛窓を半里計こぎ行、左方午未に讃州のや島、やくりかたけなと島の間より遠く見ゆ、やしまハ山の上たいらに、いはゝ家のやのむねの様に見ゆ、やくりハ山そはたあたり、大島、左島二ツにわかれ見ゆ、東の湊

四月十六日

遠景いはん方なし

天保山

兵庫浦

四月十七日

景色いとよし

淡路島

明石浦

一　雁小早　六挺立
水主　六人
船手頭　辻小兵衛　御用達　細見勝右衛門・小倉忠平
中小姓　岡野半右衛門　目付役　国友与左衛門　本道　牛島隆庵　鍼治　藤野周泰
外科　平木安正　御賄方料理人　栗山元右衛門・中野弾七・大藪虎八

十六日

朝より快晴、終日くもらす、暁より東風吹しか、未頃北風となり、夜すからやます、されと、はけしからす、朝間御三方様御懸合向有之、それより汐間ニ付出船延刻、申中刻やう〳〵出船也、西北より東□け、六甲山、勝尾山、伊駒山、金剛山始諸山見え、遠景いはん方なし、大東筋凡十丁計左ノ方石垣にてつきたり、いはゆる安治川口也、左ノ方出崎に天保山あり、古ハ天保元年新見伊賀守、当所町奉行の節川浚の土を以て築きたれは、天保山と名つけしよし、東西三丁計、川所ハ狭きやう也、小松繁□せり、此辺よりハ海也、海へ出て帆を揚たり、今夜北風なればいさゝかひらき也、夜八ツ時兵庫浦に着て船泊、今日尼崎侯松平遠江守より引船出されたり

大坂川口より尼ヶ崎へ二里　尼ヶ崎より鳴尾崎へ一里
鳴尾崎より西ノ宮へ二里　西宮よりあふきへ一里
あふきよりみかけへ一里　みかけより脇ノ浜へ一里
脇浜よりかんへへ一里　神戸より兵庫へ一里
〆船路十里

十七日

朝より快晴、終日いさゝかくもらす、朝より東北風吹しかつよからす、夜ニいり南風烈しく吹しか、まなくやみたり、天気よし、日出て兵庫を出船、船中より山々また和田の崎など見たる景色いとよし、和田の崎を廻ればいさゝか家のときれ見ゆ、駒ヶ林村也、一ノ谷、須磨、舞子浜などを右に詠め、左に淡路島を見、其間一里ハなし、左右の眺望誠にいはん方なし、巳上刻明石浦ニ着、□□□阿波侯より曳船、今舟播磨灘、漕行兼といひて赤石湊、舟泊兵庫より一ノ谷へ二里　一ノ谷より鳥崎へ一り
播磨、鳥崎より上明石へ二里

近藤勘七郎様
御乗船

普請方　壱人　椀方　壱人
板前働　壱人

御附舟
一　稲妻　八挺立
水主　八人
〆

近藤勘七郎様
御乗船
一　住吉丸　五拾八挺立
水頭（ママ）　弐人　水主組頭　弐人
水主　五拾八人　舟大工　壱人
料理人　壱人　側足軽　壱人
普請方　壱人　煮方　壱人
飯方　壱人　戸棚方　壱人
椀方　壱人　板前　壱人

御乗替
一　二徳小早　廿四挺立
船頭　壱人　水主　廿人

御供舟
一　大天狗丸　四拾六挺立
船頭　壱人　水主組頭　壱人
水主　四拾六人　側足軽　壱人
普請方　壱人　椀方　壱人
板前　壱人

御附舟

曽我又左衛門様
御召舟

御召替舟
一　小浪割　弐拾六挺立
船頭　橋本虎吉
水主　弐拾弐人

御供舟
一　柳葉丸　四拾六挺立
船頭　古賀富太夫
与頭　原宗兵衛
水主　四拾六人

小使舟
一　小雀小早　六挺立
合四艘

曽我又左衛門様
御召舟
一　金翅丸　六拾二挺立
水主・与頭　弐人　船大工棟梁　壱人
水主　六拾弐人　舟大工　壱人
料理人　弐人　側足軽　壱人
普請方　壱人　煮方　壱人
飯方　壱人　戸棚方　壱人
椀方　壱人　板前働　壱人

御供舟
一　一葉丸　五拾挺立
船頭　壱人　水主組頭　壱人
水主　五拾人　側足軽　壱人

大久保勘三郎様
御召船

弥永気次郎
与頭　津田良右衛門
同　北峰忠吾
水主　三拾八人
一　辛崎小早　拾弐挺立
与頭　牧太蔵
水主　拾弐人
使船
一　町小早　壱艘
御後乗舟役人中医師共ニ
一天神丸　五拾六挺立
船頭　坂田金平
与頭　津付左蔵
水主　五拾八人
使船
一　町小早　壱艘

大久保勘三郎様
御召船
一　台鴎丸　五拾八挺立
船頭　月貫保之進
同　田中敬蔵
与頭　北村喜平
園田久吉
水主　五拾八人

四月十五日

九州大名蔵屋敷

有馬家の家紋

【表紙】

自大坂
至肥前国呼子

〔西海道日記　二〕

十五日

朝間くもり辰上刻より晴しか、大かたくもりかち也しか、未中刻より雨ふり出て夕くれかけやます、されと強からす、朝より荷物取しらへ船積致ス、未中刻本町御出立、備後町一丁目河岸より御乗船也、左右の河岸・橋々の上、見物雲霞の如く也、天神橋の下へ出て大川筋御通船、九州大名蔵屋敷前御通りの節ハ、足軽又は侍以上の者待居て皆下座、右蔵屋敷門前ニ水桶并箒を出シ有、申中刻御本船ニ御乗移也、台鴎丸五十八挺立、張子まん幕回シ、紅地有馬家の家紋◇を白く染ぬきたり

覚

御先乗

一　泰平丸　　三拾八挺立
　　船頭　　辻小兵衛

小笠原佐渡守殿
細川越中守殿
島津飛騨守殿
松浦肥前守殿
相良壱岐守殿

門、覚書壱通、□書壱通、書付八通持参、小笠原佐渡守殿より野部又右衛門、松平大隅守殿より永井清左衛門、根本善左衛門殿より手代八木与兵衛、細川越中守殿より早川十郎兵衛、有馬玄蕃頭殿より板垣軍太、松平伊予守殿より高尾助太、堀伊賀守殿より石川要右衛門、細川越中守殿より島田次兵衛、島津飛騨守殿より伊集院一作、内藤能登守殿より山名十左衛門、玄蕃頭殿より国友与右衛門・星野十左衛門、秋月筑前守殿より石井和太郎、松平主殿頭殿より羽田喜太夫、池田岩之□殿より宮部孫八郎、五島左衛門尉殿より中村作兵衛、玄蕃頭殿より牛島隆庵・原木安正・藤野周泰、松浦肥前守殿より葉山佐内、石野新左衛門殿より貝谷升兵衛、跡部山城守殿より、□谷仙蔵、小笠原大膳太夫殿より杉生六左衛門、松平但馬守殿より小林三郎右衛門、大村丹後守殿より冨永十左衛門、伊東修理太夫殿より田北魯兵衛、掘伊賀守殿より鈴木与市、松平肥前守殿より相良官左衛門・本吉治部右衛門、相良壱岐守殿より内藤秋太郎、松浦肥前守殿より柴山作右衛門・宮本芳蔵、松平美濃守殿より長岑久米次

草津宿

四月十三日

大津御代官

伏見

御乗船

大坂

四月十四日

大坂着船

西国筋大名衆の使者

東西町奉行

立花左近将監殿

吉郎右衛門、横田川端へ竹内又兵衛出ル、田川すし屋善六御休、石部宿小島金左衛門御休、梅木村是斎彦十郎御休、八ツ半時草津宿御着、田中左衛門、曽我様田中□□、近藤様大黒屋弥助、大坂御本陣之ものとも罷出ル、座敷向絵図持参、御本陣大坂本町二丁目月行事冨田屋庄助、同炭屋要助、下御本陣本町一丁目丁代勇助、同三丁目丁代三平、酉上刻、本多下総守殿徒士目付山田彦六・林寛一罷出ル

十三日

朝間くもれり、辰よりやう〳〵晴しか、終日くもりかちなり、巳より北風吹しか、申時はやみ、申中刻より雨いさゝかふり出しか、夜半やミたり、辰上刻草津宿御立、勢田橋を渡り、石山追分松屋清左衛門御休、善所本多家より先払同心弐人出ル、町奉行宮崎次左衛門出ル、大津御代官石原清左衛門殿使者鈴木松三郎、同人組京橋覚左衛門、同人家来柴山吟之丞、竹田屋伊右衛門御昼也、時はつれ松平土佐守殿御行違通ル、逢坂□、追分御休、勧修寺門前大黒屋伊兵衛御休、藤松文珠四郎御休、八ツ時伏見御着、濱町丹波屋伊兵衛方ニ而乗船之御支度也、有馬玄蕃守殿より小倉忠平、松平肥前守殿より本吉治部右衛門・相良官左衛門、伏見問屋壱人出ル、東海道筋先払、人馬賃□金并先触持参也、伏見奉行加納遠江守殿与力棚橋兵左衛門・重田栄十郎・黒田孝之助・木村惣左衛門、使者高木瀬兵衛、角倉為次郎殿使者井上平蔵、加納遠江守殿同心目付武井才助・熊谷喜十郎、過書座役人寺沢忠次郎、京橋山崎町北国屋新右衛門、伏見京橋水揚方年寄庄兵衛、申下刻、伏見南浜町より御乗船、番所ニて下座、淀川通り稲葉丹後守殿使者井村策馬、町奉行剱持仁右衛門出ル、両岸の名前見まほしけれと、夜中なれは時々さしのそき見しのミ也、枚方より下ハいねて大坂近くめを覚したり、今夜大前斎輔、幕内平六などゝ同船、大前氏とわきて何くれと物語かはし、長途□□なくむ□ひかはせしが、今夜同船そ、奇縁のはしめなりける

十四日

朝間くもり、辰上刻よりやう〳〵晴たりしか、誠に快晴、風もふかす、いと〳〵あつし、暁六ツ時大坂着船、本町二丁目冨田屋庄助方え御着、辰より夜分かけ西国筋大名衆の使者等来たり、繁忙かきりなし、未上刻曽我様御旅宿ニて近藤様と御待合、御三方御一道ニて御城代中屋敷、間部下総守殿此節江戸御下向御留守也、東西町奉行え御出、跡部山城守殿ハ御面談なし、堀伊賀守殿ハ御面談一時計御物語有之、日くれ御旅宿迄御帰り也

使者等のあらまし、立花左近将監殿より山上九左衛門、松平美濃守殿留守居南部七郎右衛門、同家使番建部孫左衛

四月十日

勢州桑名

有馬玄蕃頭様

四日市

四月十一日

四日市

鈴鹿峠

四月十二日

十日

朝より誠に快晴、終日しはしもくもらす、辰より西風いさゝか吹、午未のころ烈しかりしか、申中刻やミたり、辰中刻佐屋より御乗船、佐屋川端尾州家より御番所有、右番人□同□格、御乗船場、□□陣屋船掛吟味方服部作助・小川又兵衛、佐屋湊付同心肆矢佐十郎乗組、中村万蔵、佐屋川西南にたと山見ゆ、勢州桑名領也、北伊勢大神宮御鎮座、左ニ尾州海東郡、森須村庄屋沢右衛門方ニ藤有之由、此藤の花長七尺程有之由、立寄て見す、尾州領也、巳中刻桑名着、松平越中守様町奉行林権之右衛門、同家人馬差配役笹川慶四郎・酒井柳兵衛、丹羽善九右衛門昼御休、同所え旅中為機嫌伺、林権之右衛門来ル、同所え有馬玄蕃頭様御使者、使番役古庄中吾来ル、旅中御見舞口上書持参、町屋川、仮板橋、百間余と六七十間と二ツ渡せり、朝明川、土橋百間計。東冨田新屋東五郎御休、羽津村ニて有馬玄蕃頭殿ニ行違御互ニ御会釈有之、家老・用人中下座有之、四日市宿入口より多羅尾鐵之助殿足軽二人先払出ル、申上刻四日市御着、帯屋七郎右衛門御泊、曽我様、清水屋太兵衛、近藤様、岡田屋庄九郎

十一日

朝間いさゝかくもりしか、辰よりはれたれと時々くもれり、巳時西風吹出しか、午時やミ、申上刻東風吹出しか、ゆふ暮やミ、酉下刻よりあめふり出てやます、つよし、夜あけしはし有て四日市を御立、山田追分鍵屋長四郎御休、四日市より追分迄五十丁、此所より山田迄十六里、石薬師宿入口、鐵之助殿足軽一人先払出ル、岡田市左衛門御休、庄野宿鐵之助殿足軽二人出ル、亀山宿、石川日向守殿城下也、城ハ右ニあり、先払同心三人出ル、桂屋弥次郎兵衛昼御休、大手前町奉行平井嘉兵衛出ル、関入口、同家より同心二人出ル、伊奈平兵衛御休、同宿立場へ目付役市橋左太夫出ル、宿中程左ニ関地蔵あり、堂額大き也、日本第一の地蔵尊也と云り、坂ノ下鐵之助殿より先払足軽一人出ル、大竹伝左衛門御休、鈴鹿峠、立場伊勢屋喜兵衛御休、峠の上近江の国界あり、土山宿入口より鐵之助殿先払足軽壱人出ル、土山宿堤忠左衛門御泊、曽我様、土山平次郎、近藤様、辰巳屋孫四郎

十二日

朝間小雨ふりしか、辰中刻頃雨やミ、しはし有てやふ〳〵日出て快晴となれり、されと時々いさゝかくもれり、巳より北風吹、未時わきてはけしかりしが、夜ニいりやミたり、暁七ツ時より支度し、夜明て出たり、水口、加藤能登守殿城下也、城ハ左ニあり、先払同心二人出ル、大手前町奉行岩谷長、問屋場へ徒士目付竹村周吉、町与力杉田

四月八日

藤川宿

尾州様

四月九日

熱田

田畑の美良なる事

尾州御船手役

八日

朝よりくもり、巳午の間、時々日かけ見へしかくもり、未下刻より雨ふり出て、大浜村の辺次第につよく、夜半やミたり、朝より北風吹しか時々強弱ありて、申時やミたり、今日の寒さわきて甚し、不順至極也、暁正七ツ時赤坂宿を御出立、中山口宝蔵寺門前にて夜あけ、鈴木新助御休

（三行分の余白あり）

藤川宿二丁計□山中村、山中社左方ニ有、藤川宿森川久左衛門御休、本多上総介様より先払同心二人出ル、岡崎宿服部仙左衛門御休、岡崎ニては都合拾人計先払出ル、大浜茶屋丸屋清吉御休、池鯉鮒宿、土井大隅守様町奉行藤井東十郎、先払同心弐人、其外人馬目付市川半左衛門出ル、木綿屋嘉十郎昼御休、鳴海宿大和屋佐兵衛御休、日くれて宮宿御着、南部新五左衛門御泊、六ツ半時尾州様より旅中為御尋、番頭格以下と申御役名、為御使御出也、小十人頭と申御役名、御朱印為御改御出、曽我様、森田八郎右衛門、近藤様、小出佐兵衛、尾州様御使熱田奉行改役朝田小太郎、御朱印改江崎清左衛門

九日

朝間小雨、辰下刻より雨やみ□やくはれ、□きいさゝか□か□も□未中刻より再ひ雨ふり、申上刻頃やミ、夕くれかけ陰れり、申上刻西風はけしくふき出しか、下刻やみたり、早朝荷物船積せしか、雨ふりけれは見合せて刻を延しぬ、昼飯後佐屋廻り之御相談ニ相成、先触出シ、未下刻宮を御出立也、熱田中程より左ノ方、津島佐屋道と石立たる所をいり、並木あり、宮よりまん場へ弐里半、上十五日ハまん場にて継立、下十五日ハ岩塚にて継立なり、まんは川を半里と立ぬれは岩塚・まんば川一筋にて半里、たかひあり、かす森立場也、岩つか、まんは宿よりかもり迄壱里半　九丁、すなこ村、長十五間の板橋あり、右ニ世に名高き眼医馬島村馬島氏へゆく道あり、道より七丁有よし、石のしるし有、袖竹村、下田村、かもり村より佐屋迄一里半有し、こし津、つば市、日光、五六十間の□橋あり、□川、もろく□、追分□行は津島道也、左ノ□行□津島ノ方鳥居有、□屋、へき村、佐屋、社竹を出る頃日くれけれは、凡三里計夜行したり、かもりとさやの間ニ穢多町有てぬけたれは、壱里半十七丁ありと云り、今日の行程平地なれど雨後かつ夜ニいりし故にや、道遠く覚ゆ、田畑の美良なる事日本第一と称せらるゝも、今日其実証を見たり、今日過し村々尾州の内にもすくれし土地なるへし、まんは村溝口友九郎、かもり村大坂屋千蔵、佐屋宿加藤五左衛門御泊、曽我様、岩間権右衛門、近藤様、市川次郎兵衛、酉中刻尾州御船手役大塚豊太郎来ル

藤枝宿

大井川

四月六日

掛川宿

浜松入口

四月七日

賀茂翁

新居宿

所より先払、同人衆二人差出され候、藤枝宿、入口町奉行加藤又兵衛、大手前用人本多内蔵之丞、番頭雨宮新兵衛、伊右衛門方御休え、本多様より使者高崎京三郎、問屋場目付一人、同心一人、瀬戸川徒目付小宝為八、同人（心カ）二人、島田宿へ駿府御代官岸本十輔殿より家来二人先払、大井川、川端え川庄屋八右衛門出ル、川端よりひくれて金谷宿佐塚佐次右衛門御泊、曽我様、川村八郎左衛門、近藤様、角屋三郎右衛門也、江戸出立せしより日々つかれはて、歌一首をたによみ出さりしに、此所にて始て思ひつゝけたり、大井川をわたりける時述懐

影うつす　事もはつかし　大ゐ川　かちにてわたる　たひのすかたを

六日

朝より快晴、終日くもらす、朝より北風はけしく吹、時々よわりたり、朝間いと寒し、夜明けて御出立、菊川名所也、小夜中山宝蔵寺門前御休、日坂宿煙草屋善助御休、掛川宿、太田備後守様より先払同心弐人、町奉行遠藤貢、大手前ニ而出ル、町同心小頭山名半蔵出ル、城ハ右ノ方ニ有、浅羽屋総左衛門御休、人馬役志村庄七問屋場え罷越、大池村右秋葉山道あり、銅鳥居あり、額秋葉大権現とあり、原川金田屋林蔵御休、袋井宿、立花屋又四郎御昼休、見附宿鈴木孫兵衛御休、見附ハ遠江の国府也と、中泉村、宿駅の如し、よき家多し、池田、松村七左衛門御休、天龍川、源ハ信州諏訪の湖より流れ出る也、水深し、右ノ方遠く秋葉山見ゆ、天神町角屋治郎兵衛御休、右ノ方に味方か原、さいかかけなとあり、浜松入口、水野越前守様より先払同心二人出ル、浜松より一里計こなたにて日暮たり、川口治郎兵衛御泊、曽我様、杉浦助右衛門、近藤様、平野屋助太夫

七日

朝間くもり、辰中刻よりからりして空晴たれと、時々くもれり、朝より夕くれかけ北風はけしく、終日寒さ強し、暁六ツ時浜松宿御出立、水野様より先払同心一人出ル、舞坂宿茗荷屋清兵衛御休、同宿より荒井え御乗船也、舟場へ松平伊豆守殿舟役清水加右衛門同心三人出ル、御召舟え同心壱人乗、同所え舞坂舟場御用聞掛塚屋市左衛門来て何かと世話致ス、入海右ノ方いと遠く広し、此所の事古人□□歌又ハ記行なとにあまた見えたる名所也、真淵翁の岡部日記にくはしくいはれたり、賀茂翁集五ノ巻に春海（村田春海）大人出されたり、余か前年の日記にハ大かた引用したり、御関所、伊豆守殿代官役田村籐左衛門出ル、先払同心二人、新居宿、疋田八郎兵衛御休、御油宿より半道計、こなたより挑灯にて赤松宿平松弥市左衛門御泊、曽我様、松平彦十郎、近藤様、伊豆屋庄左衛門

奥津宿

四月五日

京都所司代

晴見寺

駿府

安倍川

迄一里八丁、吉原迄一里半也と、岩渕より右へ身延山道あり、七難坂、左ハ海にて眺望よし、蒲原宿那須屋伝八御休、由井、倉沢、冨士屋七郎兵衛御休、さつた峠、右の山の中腹を左ニ海をみおろしつゝのぼり行坂也、六七丁もあるへし、此の道ノ下海辺に古ハ道ありて、親しらす、子しらすといひしとなん、親不知、子不知と名付し所日本に多し、中にも其名高く聞えたるハ越中越後の界のと、紀州熊野のきの本のと也、何れも山の出崎の海辺の道也、此さつた峠の眺望海辺第一也と或人ハ云へり、実に天景いはんかたなし、坂を下り谷間にいりて三四丁行、奥津川、橋をかりに掛たり、水至てあさし、奥津宿、手塚十右衛門御泊、曽我様ハ市川新左衛門、近藤様水入屋半兵衛

五日

朝よりくもり、巳下刻晴しか、未よりくもりかち也、朝間北風烈しく吹、いと寒かりしか、巳より空はれあたたかになれり、八ツ上刻より支度し、七ツ半時御立、京都所司代土井大炊頭殿、江尻宿御泊ニ付、途中御逢これなき様ニ未明に御立也、されと奥津と江尻の間にて未明に御行違也、江尻問屋場にて挑灯を消したり、奥津宿を出て右ニ晴見寺有、夜中なれはいさゝかも見えす、前年参詣せしに眺望美景、今に忘れかたし、晴見寺ハ巨鼇山求玉院と云東福寺聖一国師の弟子開聖禅師の開基也、客殿に雪舟か書る絵あり、門をいり左に五重塔・五百羅漢あり、客殿東西十五六間南北六七間、額あり、永世孝享とあり、また潮音閣、東海名区と錦谷の書る額二ツあり、鐘楼あり、銘文陽文なれとよめかねたり、正和三年七月とあり、額瓊瑶世界　螺山とあり、此門前より三保へ舟行したり、江尻、右ニ帆掛山とて、高き山見ゆる、草薙村、道より八丁左也、日本紀七景行紀に見えし日本武尊の東夷のために焼殺され給ひなんとせし危難にあひし所也

駿府、町中より左へ行く、右城の堀行て浅間へ行也、近年御再建ありて、宮殿の美麗日本第二也と云り、こたひハ詣る事を得す、前年参りし頃ハ不残造営できぬ頃也き、駿府町奉行牧野左衛門殿組同心出役神原猪八郎・布施源三郎、加番一柳土佐守殿使者篠田半司、加番松平内蔵允殿使者塚本源次郎、同加番溝口内記殿使者笠原清右衛門、町奉行牧野左衛門殿使者石川仙助、問屋場御同人組同心小屋頭稲生才蔵・深津玄次郎、安倍川破風屋六兵衛御休、安倍川かち渡、向手塚村御霊大明神、殿様御参詣有之、牧野様組同心小藤弥十郎・松井和平次、川越人足為見届罷出ル、同磯貝佐次右衛門・市橋助次、人馬継立為見届鞠子宿へ出役、鞠子宿、米屋市郎右衛門御昼休、宿を出て右六丁計行、宗長か隠遁せし柴屋寺あり、乾の角に墓有、谷間の小川にそひ上り、うつのや（宇津ノ谷）、険しき坂也、業平朝臣の歌によりて世に名高き所也、世々の歌人の詠吟いと多し、十団子の名物也、林道春（林羅山）先生の詩あり

岡部宿、二藤清左衛門御休、藤枝宿村松伊右衛門御休也、前横折村より本多能登守殿より掃除方八田加蔵待請て此

粥を施

黒田甲斐守殿

頼朝公

四月四日

沼津宿

富士川

て施と云り、寒中にハ道行人に迄粥を施となん、其家にいりて施主の名を聞しに、女一人ゐしか、江戸呉服町かす屋友七と云る者の施行也と語れり、上りの方に有しハ与兵衛と有と覚へたり、此施行箱根山に二所、木曽路の碓日（ママ）峠と和田峠、都合四所ありと語れり、日本第一の施行也と聞り、実に然るへし、委しく聞糺し記さんと思へと、女計にて分明に答兼しそ口惜き、かさねてよく〳〵聞糺しおきて書付べし、二丁計下り、石わり坂絶景也、又二丁よ下り出茶屋あり、家の向ひ道をへたて築山めきたるさまに木を植、石を立たる、いふにもたらぬほとなれと、所からをかし、おふかれ（ほ）木坂、小かれき坂、此辺も景よし、二三丁左右杉の所を行て山中宿なり、右高き所なる宗閑寺ニ御休、北ノ方高き所に山中城跡有、是北条の臣一柳伊豆守なとこもりしを天正十八年三月廿九日に秀吉公の先鋒勢の攻落せし所也

三ツ谷村、樋口伝左衛門御休、黒田甲斐守殿ニ出会たり、其以前上田左門と云る人使者に来たり、坂を下りはて、河原ヶ谷村橋を渡り三島宿也、三島宿の中程右ニ三島ノ神社あり、宮殿美麗也、大山祇神を祭れりと、光仁帝の御時伊予国三島より此地に遷せりと、社領五百三十石也と、此宿より伊豆の北条下田へ行く道あり、三島より下田迄十五里十五丁ありと、至て難所也と云り、三島宿ハ出はなれの所三四十間計、田なとへたて家あり、三島のを出はなれ五六間下り、橋を渡り又上る、是伊豆駿江（ママ）の堺也

新宿、長沢、八幡村、八幡宮あり、黄瀬川橋あり、此所にて頼朝公源九郎義経に初めて逢し事東鏡ニあり、種々の書に見えし所也、富士の方より流れ来る水也、此川上一里計北ノ方ニ大畑といふ村あり、桃園山定輪寺とて宗祇法師を葬りし寺ありと、詣でず、石田村、道ノ右ノ寺に亀鶴か墓ありと、石田より狩野川を左ニ見て並木の中を行也、沼津宿ハ狩野川にそひて長き町也、城ハ町ノ右ニあり、城門の前往還也、先払同心三人出たり、町奉行高見沢純助、小頭一人、同人（ママ）一人出て礼義あり、本陣間宮喜右衛門、曽我様ハ清水彦右衛門、近藤様ハ高田弥惣左衛門

四日

朝よりくもり、巳時ころはれゆくへく見えしか、くもり、終日日かけ見えす、朝より東風はけしく吹ていと〳〵寒し、夜あけ沼津宿を御出立也、高張提灯二ツ先に立同心三人付ておくられたり、千本杉原、原宿、大黒屋伝左衛門御休、柏原村、江戸屋弥右衛門御休、右に富士沼あり、此辺浮島か原とよへり、吉原宿、此町ハ、延宝八年八月六日の大風の津浪の時町屋悉く破壊せしかは、十丁計北へよりて今の町を建たりと云り、かたはみ屋庄七御休

富士川、東海道第一の急流なり、川のこなた渡場より少シ上に水神社とて木立ふりたる森川へなり出てあり、川水此社地の岩に流れ当るさまめさましく、心よし、川を上れは岩渕、屋作りよし、常磐弥兵衛御休、此所よりかん原

大筥根山東福寺

孝謙天皇天平宝字年中、万巻上人始て造立して、彦火ゝ出見尊を祭れりと、鎌倉にて天下を下知せし頃、殊に尊信厚かりし也、今社領二百石、張即の筆の法華経七巻、淳祐（ママ）四年の板、北条時宗の書簡なとあり、鳥居の傍なる大釜のつばに鋳たる銘、文字大きさ方一寸くらひ

大筥根山東福寺湯釜一口　満山大衆別当法橋上人位隆賢　文永五年戊辰十一月十二日

とあり、おなしく釜のつはに鋳上たる文字、大きさ方一寸五分くらい

大筥根山東福寺浴堂釜一口　奉為天長地久御願円満保仰東諍謐武家安穏　別当法眼和尚位隆實并満山大衆奉鋳冶之状如件　弘安六年癸未五月一日　大工豆州磯辺康房奉鋳冶

とあり、鐘銘いとめてたし、字の大サ方一寸五分くらゐ

大筥根山鐘銘并序

當山者盖山嶽之神秀者也孝謙皇帝御宇天平宝字年中萬巻上人草創擇地三所権現招場並甍尓降鎮坐餘五百歳鏡應被十二州衛護之徳外現風馨周遍之願内證月明希来之道心言叵及奥若去茲協合之暦仲冬厳粛之天回録成○祠壇欠基是以便致土木之殊功将復瑞籬之舊例先鋳華鐘専備寶器宜達逸音於避邇皎垂於勝利於幽顕仍作銘曰

鳧匠号巧　冶鋳功新　聲驚暁夕　韵徹霄旻　霜後高和　嵐底遠臻　並利三界　悉滌六塵　芥城猶尽　却石縦磷累多歳序　茲器無填

永仁二年五月日　大工侍立権頭磯部安弘

御関所

一丁計下り湖水近き杉森の中を通り、さいの河原、左の山の方に堂宮、右湖水の辺に石塔あまたあり、一丁よ杉森を通り御関所也、杉森よりてまへにも左右に家あり、関所にいり、中程に御駕籠をすゑて御道具等を立て後に通る、夫より前に用人中より、書付を以て届致ス、関所に御入の時、左右ニ並居たる役人・下役共下座、関を出れは箱根宿なり、小田原侯の家来松井才助待請たり、天野五右衛門御昼飯

小田原侯

箱根の宿を出はなれいさゝか下り、又坂あり、足軽山といふ、左右杉也、さいのかはらより御関所・箱根宿より此所迄、右ハ湖水近く左ハ山高くして湖水をめくりて人家ある也、左の山のをへ七八丁、けはしき坂をのほれはいたゝき也、少しゆき右高き所に、東、小田原領、西、江川太郎左衛門御代官所の杭あり、左高き所に豆相の境杭あり、左右高からぬ、谷合を五六丁いさゝかくたりさまニ行、此所をはらかたいらといふ、一丁計行、少し上れは右ハ山也、左ニ伊豆国、伊豆の海眼下に見へ、遠景いはん方なし、実朝公のはこねぢをわれこへ来れは、伊豆の海や沖の小島になみのよる見ゆ、とよミ給ひし、世にひらける歌ハ此所にての事也しと、かふと石坂、かふと石、道ノ傍左ニあり、少シ下りたひらの所右ノ方ニ人馬施行の家あり、此施行往来の馬に年中幾百千の数もしらぬに、大豆を煎

江川太郎左衛門

遠景いはん方なし

四月三日

小田原町

眺望至てよし

湯本

箱根権現

はや日暮たり、松並木を通り小田川宿ニ入、桃灯（提灯）□清水彦次郎御泊、町奉行川口清右衛門、藤地亀左衛門、木曽内蔵之助等来ル、小田原宿ハ我殿様の御同家なれば、別て御丁寧也、宿ニ入しより真先ニ高張二ツ、外ニ家々戸先に行燈を出したり

三日

朝よりくもり、午時頃はれゆくけしき也しか、まなくくもり終日はれす、巳より北風吹しか、未時やミたり

八ツ半時頃、おき出て支度し、夜のあけぬほと出立、小田原町の見付を出て板橋村、此村十三丁余往還なるよし、いさゝか坂を上り、山を右にして行也、此辺より谷間也、されとせまからす、右山根にそひ、左に田あり、箱根湖水の末も流るゝ川也、其川向に石垣山見ゆ、木しけり高し、いはゆる天正十八年豊臣秀吉公の陣所也

風祭村、小田原より一里、家ゐいと賤しく茶屋もなし、右に長興山あり、長興山と額あり、石坂三百段よの上り也、眺望至てよし、鉄牛和尚の開基也、私の旅ならは必す参るべし

いりう田、右の山のきは也、少し上り又少し下り、三牧橋、板橋廿間計り、早深の流也、此所より湯本の湯へ行道あり、山崎村、塔沢湯、こゝより左の山きはを上り放光堂有、左早雲寺あり、北條家代々の菩提所にて石碑ありと、此寺の障子、古法眼元信か書たる虎の絵、世に名高けれと、こたひハ見る事を得す、鐘も元徳四年の古鐘なり、放光堂より一丁よ上り、湯本也、左右軒をつらねて家あり、世にゆもと細工といふ翫物なと多く売也、湯本入口に廿七丁五十八間、湯本掃除場の杭あり、伊豆屋定右衛門御休、此所より畑迄殿様御ひろひ也、須雲川十三丁よ、一ノ瀬川、橋あり、坂あり、大沢川、橋あり、此所ニ永代人馬施行家右ニあり、畑、釜時屋儀右衛門御休、畑ハ左右軒をつらね家あり、ゆもとに似たり、畑の出口右ニ芦ノ湯へゆく道あり、瀧坂といふ、上り廿八丁有ていと険しとなん、畑より御関所迄一里八丁、外ニ御朱印地八町、都合一里十六丁ありと、さいかち坂、つきあたり右へ上り左へ曲なとして上る、かしの木坂、此辺両山の間より小田原の海見ゆ、此さいかち・かしの木の坂、箱根上り第一の急険なり、上りはて四五丁平なる所をゆく、此中程あま酒を売出茶屋二軒あり、此所より御関所迄廿丁也と、此辺右の二子山のすそ也、左ハ谷をへたて大山、木しけり高し、白水坂・八丁坂上りはてゝ一丁はかり平地を通る、此所より二子山を見れは両山なからいたゝき二ツにわかれて見ゆ、道ゆく人ふたこ山にハあらす、よつご山也とたはむれいへり、実に峯ハよつに見ゆる也、後撰集

（一行分の余白あり）

右ニあしの湯へ行小道あり、三四丁下り右ニ鳥居あり、箱根権現道也、箱根権現ハ湖の辺古木のしけミの中ニあり、

（五）

品川釜屋

四国迄遊歴

御席順

程ヶ谷宿

四月二日

武州・相州の国境

藤沢宿

貝原翁

相模川

大磯宿

をかへり見かち也、品川釜屋にて御昼食、品川ハ入口より宿役人一人先に立て、したにゐろといひつゝ案内ス、問屋場にてハ宿役人上下にて土下座也、釜屋迄御見送り御使者、出入の町人、御知行の村役人なと来て、いと大勢にてさわかし、こたひの道行ふりくはしく書まほしけれと、公事□無塩といへる如く日々いとまなきに、東海道ハ文政三年六月伊勢国より畿内・四国迄遊歴せし時の日記に力を尽して筆記したれば、大坂迄ハ別てあらましをのミ書たり

午上刻釜屋御出立、東海道ハ曽我様、次に我殿様、次に近藤様と御席順、大森にて御休、六郷川を渡り川崎宿藤屋にて御休、生麦にて御休、此所を立てまなく雨ふり出て神奈川宿へ至りし時ハいと〳〵甚し、本陣にて暫く休らひしに、いと小雨になりていて立しに、芝生村辺より雨のつよさいはんかたなく、日もはやくれかゝりければ、曽我様より仰出され、程ヶ谷宿ニ御泊、曽我様刈部清兵衛、大久保様金子八郎右衛門、近藤様藤屋四郎兵衛、西上刻、わが殿様・近藤様御同道にて曽我様へ御出也

品川宿釜屋、川崎藤屋、生麦桐屋源四郎、神奈川宿石井源右衛門

二日

朝より快晴、巳より西南風つよく吹しか、未時下り風やミ、夕くれかけくもりたり

暁七ツ時より支度し、夜あけて出立す、此程ヶ屋を新町とのミ唱ふ事ハ、むかしかたひら程か谷とて宿ありしを、慶安二年此町に一所に移せり、故に新町といふとなん

境木村、若林長四郎御休、此所武州・相州の国境也、道ノ右に杭あり、やきもち坂、しなの坂、かしを村、右へわかれ道あり、是大山道にて世に長後通りといふ

戸塚宿、紀伊国屋助左衛門、此宿より鎌倉へゆく道あり、江戸より行には此所より入べし、影取村三河屋五郎御休

藤沢宿、伊豆屋定五郎、宿ノ入口時宗の本寺清浄光寺あり、世に藤沢寺又ハ遊行寺といふ、道より入ば小栗判官并殿原の石塔とて、十一照手姫の石塔とて五六間はなれあり、此小栗の事世に種々の妄説あれと聞にたらす、鎌倉大草子に委しく見えたるを証とすべし、水府の鎌倉志の金沢照手松の条に引て、貝原翁の吾嬬路記なとも信用したり、南郷松本屋喜兵衛

馬入川、本名ハ相模川也、源ハ甲州山中の湖より流れ初猿橋なとをへて相模の国中を通り海に入

平塚宿、高麗寺山、右に木しけり高き山あり、至て美しき山也

大磯宿、尾張屋藤右衛門、梅沢、松屋作右衛門、酒匂川、川のこなたニ小田原侯より役人出されたり、此川端にて

未明に御出立

伝馬町

曽我又左衛門様

高輪

【表紙】

自江戸
至大坂

西海道日記　一

天保九戊戌年　四月　大

朔日　壬寅　朝間雨いさゝかふりしか、辰よりやう〳〵はれ、巳午の時ハいと〳〵暑さつよかりしに、午下刻より北風はけしくふき出てにはかに冷かになりしか、未下刻より雨ふり出て申上刻やミ行けしき也しか、まなくつよくなり行、日くれいと甚しかりしか、酉よりよわり夜半やミたり

今日ハ未明に御出立之積ニ而、八ツ半時おの〳〵おき出て支度し、何くれと事しけゝれと、其向々の書付に記しあれは、この日記にハもらしぬ、暁七ツ時用部屋にて用人・給人・近習・中小姓・徒士等列席ニて朝飯を食す、足軽・中間・知行の役人等ハ勝手、御客・御使者等ハ御座敷并玄関ノ間也、伝馬町の人馬ハ八ツ上刻来たり、夫々御支度も夜あけぬ程ととのひたれと、曽我又左衛門様の御立を待て遅刻になり、御立有しハ五ツ時なるへし、御屋敷を出て九段の上へ出て、鳥井侯の門前より麹町三丁目を横きり、霞関に出て寅門より飯倉を通り芝、赤羽橋の辺、かハら屋と云る茶店にて休ミ、田町三丁目に出て高輪を行に、千里の旅と思へはかへる浪もうらやましく、右江戸の方

んだ。そして四十代半ばの天保九年四月、幕府巡見使の大久保勘三郎に従って九州へ行き九月に帰郷する。なぜ大久保の従者となったのかは不明である。そして、弘化三（一八四六）年には江戸の国学者小山田與清に入門して国学を研究、安政三（一八五六）年に代官を辞し、明治二（一八六九）年に神祇官史生となり、日本書紀などの校正を担当した。明治九（一八七六）年七月二十七日没、八十五歳。墓地は引田の蓮蔵院にある。

著書として、上総の地誌に関する『上総志外伝』『上総志総論』『上総志引用書目』『安房志料引用書目』『上総志料・安房志料』など多くがある。参考：大室晃『市原人物譚』（名著出版、一九七三年）、『市原市史』中巻（市原市教育委員会、一九八六年）。

【凡例】

・解読にあたり用字は、原史料のとおりとするが、常用漢字のあるものはこれを用いた。　ただし、人名・寺社名などは、原史料の通りとする。
・異体字・合わせ字は正字に改めた。
・変体仮名は平仮名に改めた。
・句読点は解読者による。
・合字「ゟ」は「より」、「ホ」は「等」、「而」は「て」、「江」は「え」とした。
・虫食い等により判読不可能な文字は、□にした。
・（　）は筆者の注である。

天保九年 幕府巡見使の従者日記（一）

立野良道『西海道日記』一・二・三・四巻

森　弘子
宮崎　克則

【解題】

前号の紀要四号において、「九州へ来た『諸国巡見使』」と題し、天保九（一八三八）年に巡見使として九州へ派遣された三人の旗本（曽我又左衛門・大久保勘三郎・近藤勘七郎）のうち、大久保が書いた『順見使西国紀行』を紹介した。本稿の『西海道日記』は、大久保の従者である立野良道（たちの　よしみち）が記録したものである。『西海道日記』全七巻の一・二・三・四巻を翻刻する。立野良道のご子孫である立野一郎氏（千葉市中央区）の所蔵であり、同氏の許可を得て紹介している。

筆者の立野良道は、寛政四年（一七九二）十月十八日、上総国市原郡引田村（千葉県市原市引田）に生まれた。『市原郡誌』（名著出版、一九七二年）によると、幼少から学問を好み、享和三（一八〇三）年に十二歳で引田村の名主となり、文化七（一八一〇）年には出羽の大橋盤谷に従って漢学を修め、同十二年には江戸の清水浜臣に従い和学を研究。文政三（一八二〇）年に地頭の代官となり、天保元（一八三〇）年には平田篤胤に入門して国学を学

（一）